
なにがどうなったらこうなった？

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なにがどうなったらこうなった？

【Nコード】

N5418T

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

クリスマスの夜。 彼女居ない暦年齢と同じの俺は、オカルト好きの友人に、黒ミサに誘われ、半ば強制連行させられる。

そこで偶然にも召還に成功してしまったサタンは、しばらく人間界に留まるとか、何とかいう理由で、ただその召還の一部始終を見ていただけの俺を「召還の代償」に選び、その代償として家に泊まらせる日々が幕を開けた。

質問を開始します（前書き）

残酷描写だの、暗い雰囲気無しで
馬鹿らしく面白い話を書けたらな……なんて思っていますが、そんな話は私の苦手分野です
駄目だし、感想大歓迎です

高校生でこういう話……親には見せられませんね（
勘違いされたらどうしましょ W

QとAは前編後編と言った感じに見ていただけると幸いです

質問を開始します

非常に、理解に苦しむ。

ああ、考えても何でこうなったのか、サッパリと言っていいほど分からない。

何があったって？ 簡単な話だ。

魔王様がうちに居候していてだな、時々勇者が遊びに来てだ。

何で、何がどうなったら、勇者が魔王の元に遊びに来るんだ！

変でしょ！ 変だよね？ いや、変だ。

「あゝそゝぼッ！」

なんて幼い声が、また玄関のインターホンを連打する。

止めてくれ、電気代がまた上がる。

「いいよ〜」

なんて、家の中に居座っていた美少女が、その餓鬼の遊び相手になる。

何で、俺は巻き込まれた？ いや、何で、よりにもよって、俺？

友達は大体、俺の家に魔王が居候していることを「うらやましい」などとほざきやがる。 実際、そうも楽な相手ではない。 そう、俺に対してのみ。

大体なんで、魔王がうちに居る？ まずは根本から、遡ってみるでしょう。

質問を開始します（後書き）

見ての通り、マンネリ&自己満足要素が凄まじいです

Q1. 何事ですか？

クリスマスの当日。　こんな日も学校が有ったなんて、何だか鬱だ。

そして、友人に黒ミサとか言う怪しげなイベントに「俺一人で行くの怖いし、年齢的に気まずいから」と言う理由で誘われ、一人寂しくマフラーの端を弄くりながら駅のホームで待っている俺は、一体何を考えてOKしたのだろうか？

まあ、奴とは古い付き合いで、腐れ縁で俺以外に友達と言うものが居ない故に、俺を誘ったのだろうが、止めてくれ！

その誘い方も、最悪だった。俺の口からそれは言えないが俺が小さい頃に（略^ビ）だったとか、そういう話をネット中に振りまいたらどうしよう口調で話してきたのは、流石に腹が立ったし、従わなければ俺の（略^ビ）な秘密が漏れるので、半ば強制連行されているというのが実際の所だ。

俺にはそんな、クリスマスの当日に男とデートする趣味も無ければ、黒ミサとやらに対する興味も一切無いと言って良い。出来れば、相手は女が良かったし、これから来るイケ面の友人に彼女が居ない時点で、チビで女顔の俺に彼女が出来るわけがないと言うような暗示であることも分かっている。彼女居ない暦、年齢と同じと言うのも何だかな……。

カミサマって、気に入らない人間にはとことん残酷だ。

「人のこと待たせやがって……帰ってやろうか」

こみ上げてきた怒りを無理に押さえ込み、ひたすらそいつの到着を待つ。

これから向かうのは、ボロ小屋だと聞いている。

黒ミサと言う奴は、ローマ・カトリック教会に反発するサタン崇

拝者の儀式で、別名サバトとも言う。その目的は、あろうことが神を冒瀆することを目的とした儀式だとか。

ああ、成程。俺がそれに参加すると分かっている俺には残酷なのか。と、勝手に納得。

やることは、本当のミサの逆のことというだけで、クリスマスの日に対を成す日など無い故に、クリスマスに行くこともあれば、平日に行くこともあるらしい。

対をなすと言えば、キリストが死んだ時だのどうのこうの言われているが、実際の日付が分からないからに故に、クリスマスにキリストが再び誕生することを抑えるために行っているとか、如何でも良い情報も散々聞かされたような気がする。

「お待たせ、財布探したら遅くなっちゃってさ」

あ、やっと来た。

今笑顔で俺に喋りかけてくるイケ面君こそ、俺の友人。俺から見ても友人ではなく知人程度の距離をおきたいこいつの名前は、辻^{つじ}本恭弥^{もとしきやう}と言う。俺からしてみれば、運動も出来て頭の良い、自分とはまるで真逆の男らしい奴。だが、宗教だの悪魔だの、オカルト好きで、周囲からは「眉目秀麗頭脳明晰無病息災の変人」^{びもくしゅううれいずのうめいせき むびょうそくさい}の烙印を押されたかわいそうな奴だ。

大体、モデル事務所などにも結構スカウトされているが、趣味を聞かれたとたん相手をドン引きさせてスカウトの話は無かったことになるらしい。

出来れば俺と並んで歩くのはよしていただきたい。俺がコイツの彼女と間違われかねない。

いや、前に一度間違えられた。で、それを聞いたこいつはとうと、

「そうだね、今日は俺が全額持つよ。待たせちゃったのも悪い

からね、マイハニー」

なんて、ムカつく言葉で今もからかってくる。まったく、1年以上前の話だぞ？

マジで、殴ってやろうか。

なんて顔でどうやら見ていたのだろう、「冗談だよ」とだけ言うと、タイミングよく来た電車に乗せられた。どうも、俺は身長も小さい故に体重も軽いらしい。

朝から電話で「今日は補習よ、優希くん」なんて言う可愛いモノ好きの先生のラブコール以上に腹が立つ。なにせ、あの先生は妙に俺にべったりしてきて、まず勉強がはかどらない。実際、俺の成績では補習など要らないくらいだったし、先生が勝手に補習必要と判断したのだろう。

いや、先生の気分次第で、俺はしなくても良い補習をしよつちゅうやっている。

気づけば、後ろから覗き込んでいるのだ。気づいた時は何時かだったのか、その他もろもろの事情を併せて物凄くビビる。

「違う！ 勇者だもん！ 本当だもん！」

不意に、電車の中に、黄色い声が響く。どうやら、小学校低学年ほどの子供が、剣の玩具を持って振り回していたのが近くに居たチンピラに当たり、からかわれているらしい。

親は何処に居るんだよ……。

そんなことを考えながら、俺はチンピラ二匹へと歩み寄る。

如何にかしようと思っただけは居ない。俺は弱いから、あの子供を助けてやるだけで精一杯だろう。場合によっては、あの子供がからかわれる代わりに、俺がサンドバックになる。

が、見殺しにもしたくない。その方が後味が悪いし、何よりああいう連中は嫌いだ。

正義とか、そんなんじゃない、個人的な感情として。

「あの、止めてあげてください」

チンピラに、有無を言わさぬ視線で迫る。

だが、俺ではどうやら気迫というものが無いらしい。

「どうした、彼女う！　もしかして、この餓鬼のお母さんか？
早いな！」

……。　何かが、切れた。

気づけば持っていたかばんでチンピラAの顔面を強打し、チンピラBが迫り来る始末。

だが、そのチンピラBを、辻本が取り押さえ、そのまま関節技をかけに移行する。　多分、喧嘩でこいつに勝てる奴なんて、ボクシングの国内チャンピオン辺りからがやっつとだろう。

それくらい、辻本は強い。　特に鍛えているわけでもないのに、羨ましい限りである。

「子供相手に恥ずかしくないのか？　良い大人が情けないことするな」

やばい、何コイツ、かつこいい。　やっぱ俺とは正反対。

辻本はチンピラBを抑えながら起き上がったチンピラAに手を伸ばし、二人を相手に抑えている。　そんな間に、目的地についた。

電車の中にそのチンピラA、Bを転がして、電車からホームに足を踏み出す。　どういうわけか、その子供も一緒に降りた。

親の姿が見えないところから見て、どうやら、迷子らしい。　ま
ず行くべきはアレだな、迷子センターって奴。

「スイマセン、迷子の子供が居るのですが……」

カウンター越しに、辻本が勇者気取りの餓鬼を見せる。

「迷子じゃないよ！ 魔王倒しに来たんだもん！」

自称勇者が咆える。 だが、大人達はそれを聞いて、笑うだけ。

「分かりました、ありがとうございます」

カウンターの何だか強面のおっさんに餓鬼を引き渡し、駅の改札を抜けた。

その先の風景は、……殺風景と言うべき殺風景。 本当に何も無い。

見渡す限り田んぼが広がり、ずっと遠くに明るく光る小屋がある。 どうやら、黒ミサはあそこで行われているらしい。

辻本が、物凄い勢いで田んぼを駆け抜け、小屋へと向かう。 開始時間とはとくに過ぎ、もう少しでメインの悪魔召還が始まってしまいう時間だったからだ。

俺は辻本を追おうにも、体力が無ければ、足もそんなに早くは無
い。 つまり、

「後から追いつくから、先行ってろよ」

とだけ述べて、辻本を先に行かせる。

まあ、怪しげな集団の中に入る勇氣もないし、辻本と一緒にということも会ってなお更そんな中には入りたくは無い。 確かに、あいつは頼りになるが、好きな事には夢中になってしまいうタイプだ。

つまりは、俺が居なくても大好きなオカルトの中に「俺一人で行くの怖いし、年齢的に気まずい」は関係ない。 直前までの感情で

あつて、今はもう目の前に餌の乗った皿を見つけて猛ダッシュする
飢えた猛犬に等しい。

大体、10分後。　ようやくその蝋燭の明かりが灯る小屋へと到
着したその時だった。

「私の召還に成功したことは褒めてやろう。　では、召還に必要な
代償は……その娘、貴様だ」

小屋に入ってきた俺に、怪しい人物の輪の中心に描かれた、魔方
陣の中心から、指が突きつけられたところだった。

一体、何事ですか……？

Q1. 何事ですか？（後書き）

友人	主人公
A	馬宮
辻本	優希
恭弥	

A 1. つまりこういうことです

「は？」

“娘”と言う単語に反応し、自分ではないと判断。

回れ右して後ろを確かめるが、いたのは無精ひげの白髪親父だけ。
あれ？

この白髪親父、どこかで見たような気が……。まあ、それは今はスルー。

後ろに娘と呼べる人物が居なかった場合、相手の二言目は決まっています、

「その者、お前だ」

改めて指を指される。　　と言うか、何だ、これ。

誰よ、コイツ？

「お前、誰だ？」

思わず口からその言葉が漏れる。

まあ、普通はもっと混乱する所なのだが、何処かの変体のおかげで大体の異常にはもうなれた。　　何だか悲しい体質だな。　　こういうのを、肝が据わっているというのだろうか？

「まさか、召還儀式に参加しておきながら私が誰か分からぬのか？」

長い黒髪の男……もとい指を刺してきた男は驚いたようによろめくが、周囲に居た怪しげな黒装束が彼を支える。　　どうも、事情が

今一はつきりと分らない。……というのは嘘。薄々、感づいている。

彼が、召還された悪魔であるということも、自分が何故か召還の代償に選ばれたと言うことも。

「召還された悪魔だろ？ 実際、信じられねえケド」

「おお！」

彼は崩れた態勢を立てなおし、

「まさしく、私は悪魔にして魔王。魔神とも呼ばれし悪魔を統べるもの。つまり、大魔王、サタンである」

予想外の答えを口にする。まさか、サタンって、おい。

もう少しさ、下級悪魔とかそういう洒落は無いわけ？ そんな人間風情が大魔王ぽんぽん召還可能なわけねーじゃん。つか、コイツが悪魔だということ自体信じていない。

大方、ミサ開催した奴等の仕込だ。

そう、たかをくくっていた。ああ、たかをくくっていましたがとも。

「私がサタンであるとは認識しておらんようだな。悪魔であるとも認識しておらん。信じられぬのは無理も無いか。無駄な説明は今しがたここに来たばかりの娘には少々混乱を招くだけか？では、ご覧に入れようか、私が、私であると言う証明を」

彼のその言葉とともに、何も無かった空間から大きな黒塗りの鎌が出現し、それを片手で一振り。当たってもいないのに何故か辻本を吹き飛ばし、小屋の壁に大穴を明ける！

更には、その大鎌は刃に沿って大きな牙を覗かせる口を大きく開ける。 本物だ……！

「別段、殺しても構わぬのだが……貴様の友人ゆえ、殺すのは避けてやろう」

サタンは偉そうに踏ん反り返る。

少し、腹が立ってきた。 いや、最初から相当ご立腹だ。 ついさっき抱いた恐怖など、その怒りに吹き飛ばされた。

「何だよ、偉そうに！」

本日二度目。 いや、学校でのも含めて三度目。 何かが切れた。 気づけば、サタンを名乗る男の居襟首を掴み、

「大体、何で俺が！ 代償だ？ 何をしろって？ ええ？」

最早言葉ではない。 苛立ちに任せて単語を吐き出しているだけだ。 だが、本気で切れるともう一段階上がある。 今ここでの説明は止めておこう。

「慌てるな、貴様を侍女に……」

「だ・か・ら！ 俺は……男だボケえ！」

「はい？」

サタンが。 今の今まで襟首つかまれても一切動じなかったサタンが、今、大打撃を受けた。

驚きに満ちた表情を、優希に向ける。

「馬鹿な」

「馬鹿はお前……だ？」

気づけば、優希の胸の辺りをサタンはつつくが、手ごたえなし。

「ほう、賓乳で誤魔化そうとは……中々考えたな」

「ちげえよ！」

今度はこっちに大打撃。確かに、体つきはそんな男らしいとかそういう感じは一切無い。だが、女っぽいかそんなのも一切無い。

「まあ、この話はここまでだ。代償はこの娘。そして私は、この娘を連れ、地獄へと帰る前に、貴様等の質問に答えるのだったな。では一人づつ順に問うが良い」

それから十分間。優希はその場で即身仏のように座りながら呆けていた。

肝心の辻本はというと、サタンに質問攻めの状態で、優希のことなどお構いなし。本当に、興味のあることに関しては何とことんだな、あの変体。

「それでは、私は帰らせていただくのでしょうか。そこの娘を私の元へ」

「ハッ！」

集団で、優希のことを持ち上げ、サタンの横に下ろす。

もう、勝手にしてくれ。何も考えたくはないし、考えれば反って何が起きるか分からない。自分で何をするのかも分からなければ、周囲がそれに如何リアクションを取るのかも分かったものではない。

「それでは、私の城に……」

その言葉とともに、視界を紫色の光が支配した。

気づけば、目の前に大きな城。御伽噺に出てくる城かと思えば、

もう、誰もが魔王城と聞いて連想しそうな、城。

塔があり、その上には竜の彫刻。そして、松明が城壁を埋め尽くす様に掲げられ、周囲の空に人の形をした『何か』が飛んでいる。

Q2. それは侍女にされると言うことですか？（前書き）

何で、サタンって入力して通常変換すると左端になるのだから……
私的な謎なんだぜ

Q2. それは侍女にされると言うことですか？

城の中へ連れ込まれ、真っ先に入ったのはレッドカーペットなる巨大な絨毯と、その脇に控える鎧の騎士。各々、大きさが違い、体格にあった武器を持たされ、ただそこに立っている。

巨大な斧を持った熊以上に巨大な鎧の騎士もあれば、ネズミ並みに小さな鎧の騎士は爪楊枝らしきものを持たされている。

どうやら、この男が悪魔だというのはマジらしい。
今更ながら、恐怖で足がすくむ。

「どうした？」

「いや、足が……」

どうしようもなく、優希はその場にうずくまる。　　どういわけか、足に力が入らない。

いや、足の感覚が無くなった。

「そうか」

「そうか」なんて言いながら、サタンは優希を軽々と持ち上げ、玉座へと座らせる。　止めろ、マジで、オイ！

そして、そこで事は起きた。

「服を脱げ」

「ハイ？」

「いいから脱げ」

「え？ 薔薇^{そっち}？」

そんな無意味な問答の最中だった。突如上半身を覆っていた布どもが内側からはじけ飛ぶ！ それを見て、サタンは満足げに「フッ」と鼻で笑う。

原因……コイツか！

更に間髪を入れず、サタンは優希の下半身に手の平を向け、にやりと笑う。

いや、止めろ、コラ！

予想通り。ズボンが弾けとんだ。

それを見て、サタンは顔を真っ青にして優希をにらむ。だから言っただろ、男だって。

「貴様……男だったのか」

「言っただろ？」

「では仕方が無いな。悪いがしばらく……眠っていただこう」

「は……？ ……ッ？」

一閃。サタンの容赦ない一撃が、優希の首に叩き込まれる！ 意識が遠のき、闇に飲まれる感覚……。俺、死んだのか……。

「うああ！」

なんて、馬鹿な夢を見たものだ。

布団から体を起こし、異変に気づいた。

夢じゃ……ねえッ！

しかも横にサタン居るし、現実で悪魔って……ホント勘弁願いたい。

「ようやく目覚めたか、待ちくたびれたぞ」

テメツ……！

この野郎、誰が気絶させたと思ってやがる。

「お前があんな強く殴るから長く気絶したんだろうが！　ちよつとは手加減……」

ここで、第二の異変に気づく。

声が、……明らかに高くなっている。　まさか、このクソ魔王……。

「気づいたようだな、私が男性不信であるが故のしかるべき対処だ。　許せ」

「許すかッ！」

顔面に容赦ない拳での一撃。　これは大魔王でも少しは効くだらう。

……なんて、甘かった。　コイツ、滅茶苦茶硬い！　何製だよ、オリハルコンかこの野郎！

「フム、腕力も落ちたな。　では……」

ヒッ……！ まさか、……まさか、ねえ。
無いよね、そんな展開。

「私の正体を教えておくとしよう」

いや、ありえた。 向こう向いて服を脱ぐな！
止めろ、止めてくれ！ 服脱ぐのストップ！ ストップ！

「私は666代目サタン」

その言葉だけ、少し声が……高くなった？
いや、声だけじゃない。 服を脱いだだけのはずなのに、身長も
縮んでるし、なにより……向こう向きとはいえ、何かあるんですよ
ね？ 胸の辺りに。

「代々サタンと言う名を受け継ぐ我が家系にとって、威厳の薄い
女兒は致命的でな。 人間の前に出るとき、私は極力男の姿をして
る」

つまり、自分は女ですよ……ってこと？ だよね。
今度はサタンはこっちを向こうとするが、優希はそれを押さえつ
け、自分の方を向かぬように反対に向ける。 だが、サタンの力は
人間の女の筋力では相手にならないほど、強い。

「それを隠すためにも、私が惚れたと言う意味でも。 現時点を
持って貴様を、私の妃に任命する」

黒髪の美少女は、紅の瞳を優希に向けて、言い放つ。

A2. いいえ妃にされると言うことです

「は？ 百合そっち？」

思わず優希の口から失礼極まりない言葉が漏れる。

本日二度目……三度目……何度目だろう？ 普段口が悪いと言うのもあって、無意識にいつているものも多い。数えられないし、回数はもう如何でもいいか？

その言葉の直後、魔王……もとい、目の前の美少女は、

「失礼な、レズビアンだ」

開き直って見せた。

いや、開き直ろうがどうしようが、百合とレズビアンは同じ意味ですよ……？

……さて。 本題に戻ろうか。

まずは今居るこの場所。

「何で俺の家にお前が居るんだよ？」

根本的で、一番気になる点。

気絶して、目の前に魔王がいたのだ。 そっちに気を取られて勝手にまだ魔王城に居ると思っていたが、落ち着いてようやく分かる自分の今居る場所。

それは間違いなく、自分の家の、自分の布団。

ちなみに、もう一個。 俺、今全裸だ……。 ついでに言うと、賓乳。 Aカップくらい？

まあ、それはありがたい。 特に自分でも自分の体に違和感を覚

えないと言う面においては。

「ああ、それには深いわけがあっただな……」

わざと深刻な空気にしたいのか、魔王だからなのか、無駄に重々しい口調で、

「私の城で弟が誕生会をするといっているのだ。地獄、魔界、冥界に住む貴族共を呼んでな。そこで……、だ。私は実際、居ないはずの姉だ。故に、しばらく城を離れる必要がある」

詰まり、弟の誕生会があるから、不審者は逃亡しておこうと……？
そういうことか。と、勝手に納得。

「で、俺の家に……ねえ」

布団から起き上がるとタンスの引き出しを開く。

それを見て、優希は絶句した。そしてついでに、硬直した。

「ああ、取り合えず女物の服を詰めておいた。しばらく着る分には問題なからう」

……。

「何してくれてんだよ！」

タンスの横に立てかけてあったダンベルで、魔王の顔面を強打。
だが、よろけるそぶりも見せず、微動だにしない。更に言うと、ダメージは皆無。

殴った相手が固すぎて、ダンベルを持っている俺の手に激痛が走

るこの始末。

「まあ、そう怒るな。男モノがいいのだな、仕方ない……」

仕方なくない！ いや、むしろ、男物とかじゃなく、元に戻せ！
全部戻せ！

よく見たら部屋中至る所に見覚えの無い装飾……もとい、色々な変化が……。

ソファーにおいてあったクッションは、黒の枕サイズのものが、小さなピンクのフリフリ付きのものに変化しているし、タンスもよく見れば、明るいデザインのものに変えられている。

一体、俺が寝ている間に何をした！

「ほら、戻ったぞ」

サタンはタンスから離れ、優希を呼ぶ。

「……マジかよ」

驚いた。数秒間で全て元通り……。

魔法って奴か？ だけどそんな光見たいのでなかったし……。

「何だ貴様、魔術に興味があるのか？」

サタンは適当な服を見繕って着る俺に気軽に話しかけてくる。

「ああ、ちょっとはあるな」

しばらくして、もう一個。最大級。

例えるならラスボスの一個か二個手前のボス並みの問題にぶち当

たる。

服のサイズが……デカイ。

「フン、愚かな」

黙ってろ。

「当然の結果だな。貴様の脳内を観察し、復元したのだ。縮んでいる貴様に合うサイズの服などあるまい」

だから、黙ってろ。

無言のまま、優希は服を漁り、タンスの引き出しをひっくり返して中身を全て床にばら撒いた。

だが、やはり全てサイズが合わない。

「まあ、私の妃となるのだ。服程度、私が如何とでもしてやろう」

そういうと、サタンは指を一振り。

見る見るうちに、服の山は縮んでいく……？

魔法って凄いな。

「マジで……縮んだ」

「ああ、サイズも合わせてある。スリーサイズは見れば分かる」

ああ、はいはい、無駄な特技持ってるのな。

魔王として必要ないとか何とか言う前に、服屋の店員以外必要としないスキルだろ、それ。

何でこういう状態で近くに居る奴はこんな不思議極まるスキル

を有しているのやら……。

「あ……」

ここで最後。恐らく一番恐ろしい問題を思い出した。
いや、忘れていた。

この家の状態を少し知れば分かると思う。

まず、俺の居る部屋は二階。もちろん、下に一階がある。幸
い、両親は仕事で家に帰ってくるのは年に一度か二度。特に、親
の心配は要らない。

帰ってくる頃には、俺もこの魔王の呪縛から解放されているだろ
う。

そして、二階にある部屋は三つ。そのうちの一つは、俺が使っ
ている。そして、もう一つは物置状態。で、最後の一部屋はと
いうと……？

そう、予想の付いた人も居ると思う。

俺の兄妹。つまり、妹が使っているのだ。

そう、現時点で我が家最大のラスボスが……。

「今は朝だぞ？ 学校とやらに行かなくてはならんのだろう？」

サタンが、優希に現実を伝える。

時計を見れば、朝の7時。学校が8時に出れば余裕で着くとは
いえ、ここでじっとしていれば確実に妹が俺の部屋へ来る！

そして、妹の学校の授業開始時間は、10時から。出発も、俺
より遅くて良い。

何だよ、ゆとり教育かこの野郎！ 最初は確かに喜んだが……今
となっては恨むぞこいつめ！

「起きろ、馬鹿兄貴！ おーきーろー！」

ああ、下でコールが始まった。

一体これは……どうやって誤魔化せば良い？

Q3. お兄ちゃん？

妹がコールを始めて約五分。

その五分が永久とわに感じるほど、優希に思考は物凄い勢いで稼動していた。

現在の解消すべく課題は「如何にして妹に女と気づかれずに学校へ行くか」である。

そして終に、待ちかねた我が家のラスボスが、階段を上ってくる音が……優希の耳に入る。

「どうするんだよ！」

「私は特に、貴様をどうもする気も無いぞ？ 既に述べた通り、私は男性不信でな。貴様を男に戻すのなら、殺した方がまだましだ」

ですよねー……。ふざけるな。

兎に角、誤魔化すべきか。学校を休む？

いや、提出期限の近いレポートがいくつかあったはず……。それに、今の所、皆勤賞。

休むにはちよつと苦しいぞ。補習を受ける可能性も……。あ、それはしよつちゅう……。て、そうだ。あの先生を忘れていた。

それを理由に特別コースで俺だけ補習をするに違いない！
考えただけでゾツとする。

「優希〜！」

ついに、思考をめぐるす優希の部屋のドアノブが握られる。

「私のことは心配するな、常人には見えん」

それと同時に、サタンが問題の一つであった要因を消去。
少しは気が楽になったが……やはり、優希の現状は問題と言う問題だ。

髪も伸びているようだし、この姿を晒すのはまずい。

「起きろー！」

妹が勢いよくノブを回し、ドアを半ば蹴破る要領で開ける。
蹴破るなって、毎日言っていた筈なのだが……何で我妹はこうも
ガサツなのだろうね？

「……」

沈黙したか、無理も無い。

優希もそれとともに沈黙。 まあ、自然な反応だな。

数秒すればまた、再起動するだろう。

「お兄ちゃん？」

ああ、幼児退行……。

これは我が妹が小学生中学年の頃の呼び方だ。 ちなみに、今は
俺のことは呼び捨てが多い。

ついでに言うと、優希は高校1年生。 我が妹……まみや馬宮育美は中
学2年生である。

年は近いが、俺にはそんな親近の気は無い。

「ああ、お兄ちゃん」

自分を指差し、その問いに答える。

だが、育美は硬直したまま、その脳をフル稼働させ、何かを考えている。

一瞬、優希の後ろに居るサタンの方に目が行ったような気がしたが、見えているはずも無く、目が泳いでいるのを過剰に捕らえすぎただけだろう。

「え……？ 何で、髪の毛そんな長いの？ 何で、声高くなって
るの？ 私、幻覚見てるの？」

「いや、髪は伸びただけで、声も特に高くなったわけじゃないし、俺は幻覚でもない」

順にその疑問に答える。

「じゃ、飯食ってくるから」

硬直した妹をその場に残し、逃げるように1階へ。

何だかんだで上手く誤魔化せたかな？ いや、あの反応は誤魔化せた気がしない。

飯を大急ぎで平らげ、洗面所へ直行。

そこで見たのは、自分ではなかった。

もとより髪の色は明るい茶髪。それが伸びて、所々で癖毛が飛び出している。

そして、特筆すべきはその顔。

男だった時よりも、輪郭が丸くなり、まごうとなき「女」として機能していた。

まあ、一言で表すと世間一般俗に言う「美少女」と言う奴になっていたと言うことだ。 何だか、受け入れがたい。

「髪の毛、どうすっかな？」

「切らせはせんぞ」

ちよっとお前マジで黙れ。

「切る切らないは俺の自由だろ？」

「いいや、妃として貴様を迎える私の特権だ。切るな！」

なんという強引な制止。

「そうだ、まだ名を聞いていなかったな。名乗れ」

うん、コイツ自分勝手だね。

この数分間で物凄くよく分かった。

「馬宮優希」

取り合えず、齒を磨く。顔を洗う。髪を解かす。

あ、ここでもう一個。家の外での問題が……！
しかも、これはとても大きい。

「学校、どうしょ？ 男子校なんだけど、この格好では流石に無理だよな……」

はい、詰まりそういうことです。

女が男子校なんて通えるわけも無く、一番の課題はそこです。
妹を超える敵がこの世に居たとは……グハッ！

その時だった。

『優希く！ 学校行くぞ！』

インターホンで、辻本の声が……。

さて、これは一体、如何対処すればいい？

A 3. いいえ今はお姉ちゃんです

何でだろう？

数多ある疑問の中で、これが一番上に浮上してくると思わなかった。

何故、目の前で「侍女にする」発言を目撃し、まだ俺がこの家に居ると思い込んで迎えに来るのか。

謎と言う謎だ。まあ、大方こういうパターンは自分で夢オチだと思い込んで迎えに来る自己満足とか混ざっていそうで怖い。

人間信用できませんね、ハイ、そうですとも。

「さて、サタンは学校で何かやりたいことでも？ 付いて来る気満々の様だけど……」

次なる消化すべき疑問。 サタンは、学校に居る間いったい何をやろうというのか。

場合によっては、サタン目当てで魔物が来るかもしれないなどと言う二次元チックな妄想を抱いておりますが、何か？

「ああ、私は特に。 優希の護衛だ。 私と契約した人間には強力な魔力が宿るからな。 その魔力に惹かれ、人間界へ来る命知らずも多い。 ちなみに言えば、私は自分の魔力を抑える術がある故、私が狙われることは無い」

ああ、二次元チックな妄想が大正解。

つまり、この馬鹿魔王の所為で魔物が俺に押し寄せてくると言うわけか。 何だか、マジでアニメ染みた状態だな、オイ。

「案ずるな、私が優希を守る。 命に代えても、な」

ああ、そうですか。じゃあ、命に代えても守ってください。
そして、死んでください。呪縛それで解けるでしょ？

「ただ、私が死んだ後もその契約は続く。ただ、無理に魔力を抑えれば、人間である優希は魔力の毒に負け、死ぬ。故に、優希にも簡単な魔法の基礎は教えてやるつもりだ」

ふざけるな。

続くのか、この呪縛は！

「マジで言ってる？」

「ああ、私は常にまじめだ」

まじめには見えないのは俺だけか……。

「じゃあ、学校で他の奴にちょっかい出したりしないよな？俺の行ってる学校、男子校なんだけど……？」

皮肉たっぷり言い放つ。

「案ずるな、それくらいの辛抱はして見せよう。ただ、優希に近づく輩があらば、即、あの世行きだ」

わー、おとなげ大人気ない。

で、その手の塩は？

「何で塩を持ってるんだ？」

「念のためだ。優希に話しかけた男には、これを浴びせる」

「止めろ、馬鹿魔王！」

数分間。辻本を待たせた挙句、ようやく玄関へ鞆を持って出る。すると、後ろから何かの気配。そしてそれは、ゆっくりと近づいてくる……！

「ハイ、お弁当忘れてる」

その言葉に過剰反応し、物凄い形相で後ろを振り向くと、そこに居たのは……育美か。

何だ、凄く怖かった。

魔物が来るとかそんな話された後にこれは無いよ、何、このお約束の拍子抜けする展開。

何だよカミサマ、俺がそんなに憎いかこの野郎！

「えーと、お姉ちゃん……？ お兄ちゃん……？」

ああ、迷ってるな。

うん、俺も迷ってる。肉体で決めるべきか、精神で決めるべきか。

ある意味、究極の二択だもんな……。

「えーと……今はお姉ちゃんで」

「待ちくたびれたぞ、優希」

何かいろいろ有って、玄関から外へ出た。

そこには、まだ待っていたのか。と、呆れるほど待ち続けた辻本の姿が……。

コイツ、真正正銘の馬鹿だ。

何でこんなにも待って来かったのに、まだ待つかね？ 更に言うと、昨夜何があったのか覚えてないのか？ それとも、夢だったと思ひ込んでいるのやら。

違和感無く話しかけてくる。

「お、珍しい。 お前が帽子なんて」

ああ、そうだよ。

お前に昨夜の黒ミサに誘われなければ、こんな事して髪の毛隠す必要も無かったんだ。

詰まり、

「元凶がよく言うよ」

そういうこと。 まあ、独り言だし、声小さかったし、聞こえてないだろ。

うん、聞こえてないに違いない。 いや、聞くな。

「あれ？ どうした、声変だぞ？」

うわ、聞いてやがった。

まあ、この際コイツには全部打ち明けるか？ 俺以外に学校で口聞く奴と言えば教師共くらいだし、問題ないだろ。

「ああ、変だよ。 お前の所為でこんなになったからな！」

帽子を取り去り、睨み付ける。

うわあ、身長之差でどうしても上目遣い……。今まで以上に身長に差がある分、更にムカつく。

おお神よ、何故コイツには何事も無いんだ！ 黒ミサ興味深々で「行こう」って誘ったのに！

こんなことなら、OK出すんじゃないかった。いや、OKだそうが出すまいが、恥をかくという結果は同じか……。
どんどんコイツが悪魔に見えてくる。

「え……？」

一瞬の硬直。 一瞬の間。

そして……、

「好きだ」

その場で告白。 ……え？

何言った、こいつ……。

「ハ？ 何言ってんだよ、辻本……」

「だから、好きだ、付き合ってくれ」

あ、地雷踏んだね。

辻本の後ろから、サタンが音も無く忍び寄り、優希から辻本を引き剥がすと辻本は頭から大量の塩を浴びた。

ナイス、サタン。 今回ばかりは感謝する。

「じゃ、学校行くか」

Q4. どうやって誤魔化しますか？

俺の通う学校は、遠い。

電車を乗り継ぎ数十分。恐らく人身事故でも起きたらもう学校には間に合わないくらい、ギリギリの時間に何時も家を出ている。

が、人身事故で遅れた場合は学校側の配慮があるので特に、遅れでも問題は無い。

と、言うことを知ってかしらるか、サタンが駅のホームで電車待ちしている中年小太り親父を線路に弾き飛ばそうとしたのに気づいた時は物凄くびびった。

「不潔」

なんていつていたような気もしたが、まあ、そこに触れてはいけない。

そんなこんなで端から見れば深々と帽子を被った奴が一人怪しく何も居ない空間に怒鳴っている所に、電車が来た。

辻本に触れられる前に素早く、そのまだ席の空いている電車の席を取る。

今の辻本は、塩まみれで、恐らく俺でなくとも触りたくない、触られたくないと思うだろう。

「なあ、塩全部取れてるか？」

「いや、まだ雪積もったみたいになってる」

ええ、そうです。ここに小さな丸太小屋の模型を載せれば、なんと北国の冬が再現できそうです。ちょっと雪の粒が大きい様な気もするけど、まあ、そこは素人の考える程度のジオラマと言うこ

とで。 やったとしても大目に見て欲しい。

そんなことを考え、思わず苦笑するが、辻本は気づかず、頭にくつついた塩を掃う。

オイオイ、電車の中で……止めろよ……。

『終点』

アナウンスが流れる。

地名は架空がいいか、実在する所がいいかと言われて、選ぶ気になれないという作者都合により『終点』とだけ表記させていただき
ます。

まあ、何だかんだで数十分。 電車に揺られながら夢現状態で到着し、基本的に起こされて不機嫌な状態で電車から降りる。

そこから、歩くこと約十分。 結構余裕を持って到着。

遅刻すればそれだけ目立つし、まあ、早く来たのは良いか。

取り合えず、下駄箱で靴は着替えて、階段を上る。 教室は一番上の四階。

……あれ？ こんなに階段上るのが、疲れることだったっけ？

息を切らしながら、横から辻本に視姦しかんされながらも、何とか上りきる。

階段を上りきった直後、「最高に色っぽかったぞ」と言う一言さえなければ辻本を本気でぶん殴り、階段の一番上から転落させてしまうと言うことも無かったのだろうが、この馬鹿にはそれくらいやつても許されるような気もしなくはない。 何だか、複雑な気持ちだ。

まあ、そんなこんなでHPが終わり、一時間目も「馬宮、帽子を脱げ！」「嫌です！」の応酬に何とか点を引かれるだけで勝利し、次……二時間目。

何故だろう、お決まりとも言うべき教科。

そう、学校での一番の難関。 体育である。

着替えれば、上を全部脱ぐことになり、如何に胸が小さくとも絶対バレル。

こういう時ってどうすればいい？ ああ、そうだ。 いいこと考えた。

「辻本、壁になれ」

「構わないが……」

つまり、壁と辻本で、俺を隠し、着替える。

そうすればバレはしない。 が、辻本に胸を見られるのは余り嬉しくない。 むしろ、嫌だ。

俺の頼みだったとはいえ、余りに凝視するので殴ってやろうかと思ったが、「ここで暴れるな、バレるぞ」と言う奴の一言が、牽制。結局その恨みは体育の授業中に晴らすことにした。

着替えも終わり、これで安心。

……ではなかった。 そういえばこの学校の体操着、汗をかくと張り付いてくる。

通気性最悪。 さて、どうしようか？

「それでは、今日の体育は、外でマラソンをするつもりでしたが……雪が降ってしまったので室内でやります！」

女の先生が、体育館で叫ぶ。

この先生、男子生徒と、校長から人気は有るのだが、馬宮はとも苦手な先生だ。

そう、あの補習を押しつけてくる先生。 それがこの、白銅葵先生である。

「何か、やりたいことがある人！」

「先生、ボクと保健室で……」

「ハイ、却下。他に？」

まず白銅先生はお決まりの第一波を易々とかわし、

「ドッジボール」

「バスケ！」

「ボクと保健室で（略^{ビー}）！」

次々に押し寄せる生徒達の声を聞き分け、

「では、そうですね……。バスケは多いし、待つ人も増えるので、ドッジボールにしましょう！」

聖徳太子よろしく、聞き分けた中で最も効率的なものを選択。
もちろん、「保健室ネタ」オール却下。

「では、そうですね。出席番号が偶数と奇数のチームでまず分けてみます。あ、それと優希君！」

今回は自分だと認識。

同じクラスに優希は俺一人。自分ではないと思いたいののは山々だが、必然的に俺に絞られる呼び方なのだ。だが、馬宮も俺一人しか居ないのに、そっちで呼んで貰った覚えが無いのは何故……？

「帽子とってください」

「嫌です」

「取ちなさい！」

先生が歩み寄り、俺の頭の上に乗っかっていた帽子を引き剥がす。多分、この先生には俺が男でも力負けする。なぜなら、数多の重量上げ大会に出て、男装し、男子の方に混じり、優勝するほどの怪力なのだから……。

もちろん、表彰時に女とバレて女として優勝しているが、その腕力はゴリラ並みに強力であることは保障されている。

「ちょっと……！」

「えいっ！」

先生に帽子を握られ、とっさに抑えるが、それも虚しくその帽子は頭から剥離され、先生の手の中に。

その瞬間、帽子に詰め込んであった髪の毛が一斉に外へと飛び出した。

Q4. どうやって誤魔化しますか？（後書き）

先生A 白銅はくどう 葵あおい

体育の先生だが、補習時の監督も受け持つ学年主任の先生

A4&P;Q5. むしろ誤魔化し方を教えてください

白銅先生に連れられるがまま、たった今優希は校長室まで連行されてきた所だ。

何だ、退学って奴か？ などと警戒しつつ、その間に白銅先生は校長室の扉を二度ノック。

返事を待たずして、扉を開けた。

「どうしました、白銅先生？」

その部屋で椅子に座っていた。

その人物には、どうも見覚えがある。

「あ！」

「あ！」

同時に叫ぶ。

そうだ、思い出した。

「黒ミサに居た白髪親父！」

「サタンに連れて行かれた女の子！」

ええ、そうです。

皆さんお気づき？ 俺の後ろに居たあの白髪親父、そうです。今思い出しました、我が校の校長です。 はい。

「何でここに……？」

校長はまるで、バケモノを見るかのような目で優希を注視する。

そして、

「白銅先生、通常通り、授業を続けてください。彼……いや、彼女は私がかします」

「かしこまりました」

白銅先生、退室。

その直後、長い沈黙……。

「で、どうすればいいんですか？ 校長。俺、男だったんですけど、あの時のサタンにやられまして、結果、こうなりました」

取り合えず、優希が話を切り出す。校長もその一部始終を見ている故に、言い逃れは出来ない。

「そうですね、困りましたよ。何か、いい誤魔化し案は無いものですか……」

「むしろ誤魔化し方を教えてください」

「そうですねえ……」

校長は額の汗を拭い、思考をフル稼働させる。

同じく、優希も何か誤魔化せる方法はないかと必死で考える。

「そうですねえ……では、こうしましょう」

え？ 何かいい案でも？

「貴女がおなべで、この学校はそれを容認した心優しい学校と言うことに……」

「なッ……！」

いや、確かに有だ。 だが、何で俺がそんな扱いを受けねばならんのだ？

元々男だったんだぞ？ 何故そんな扱いに……。

「まあ、……ええ、……有り……ですね」

「では、そういうことで決め込みましょう。 私としても、一学校の校長が黒ミサに出て、偶然召還出来てしまったサタンに生徒が面浚われる所を目撃して直何もしなかったという烙印は、押されたくありませんから」

ほほう、自分勝手な理由だな。

それを俺が世間にばらせば、この学校の評判はがた落ちか、成程。

「まあ、世間にそんなことを言ってみた所で、サタンや悪魔。オカルトですから、信じる人は少ないでしょうけれど、証明写真などもあることですし。 何より、戸籍上男ですから。 その間は我が校に居ても問題はありません」

優希の考えを見抜いたかのように、校長は付け加える。

……だてに、校長やってないな、こいつ……。

A 5. 質問には答えを返してくれ

結果、女体化はその日の内に学校中に知れ渡り、更に、「馬宮つて、元々女だったらしいぜ」と言う尾ひれが付くというこの状態。

しかし、理解者が増えた分いいか。

辻本はもうそれを知っているとして新たに校長が加わった。まあ、この学校にまだ通いたいのであれば、「小さな胸とはいえブラジャーをつけてくるように」と言う条件付だったものの、首の皮が繋がったことは事実だ。　　っ！か何でだ？　男の胸見て男は発情するワケでもあるまいに……。

そして、この学校にもう一人、俺の幼馴染が通っている。　　もちろんそいつにも全て話した。

「馬宮！　　飯食おうぜ」

そう、この辻本よろしくのトラブルメーカー。　　赤碕　吟あかざき　ぎんである。

コイツは、まあ、調子がいい事で有名な奴だ。　　そして、辻本と同じように、しょっちゅう俺を巻き込んで問題を起こすトラブルメーカーと言う顔も併せ持つ、得体の知れない奴であり、俺から言わせれば腹の底が真っ黒な奴だ。

そして、運動が出来ない代わりに、勉強が異様に出来る。　　まあ、その他に回している脳を勉強面に集中させようものなら、恐らくコイツはアインシュタインを追い抜くと俺は勝手に確信している。

「どうした、女化したのがそんなに嫌なことだったのか？」

ああ、嫌だよ。

もちろん、喜ぶと言う選択肢は無い。

むしろ、

「顔と体がつりあって丁度いいと思うけどな」

こんなポジティブには考えられそうに無い。

いや、こいつの感覚が可笑しいだけだ。

コイツも、一応ついこの間まで俺の仲間だった。まあ、補習仲間であり、辻本の彼女モドキである状態。多分、コイツは辻本の所為で病んでこうなったんだろうな……。

少し、赤碕の話をすると、コイツは知る人ぞ知る「男の娘」と言う奴で、見た目胸が無いだけで普通に女子である。

そして、その扱われ方に慣れきっている所為か、自分が男ではなく女に生まれてくれれば良かったとか、そういう考えを持った奴だ。

まあ、俺をおなべだの何だの言うのであれば、コイツはコイツでニューハーフもどきと言うわけだ。いや、訂正。コイツはマジかもしれない。

「ふざけるな、俺はこんな状態望んでねえ」

授業中、低音で張っていた声をようやく元に戻す。その声に数人が反応したが、眼^{ガン}くれてやると慌てて優希とは反対方向を向いた。結構、低音で張って声を出すと言うのは、女子の喉では辛いことが分かった。更に、長時間と言うのもあって、無駄に喉が痛い。風邪引いた時みたいだな……。

「えー？ いいじゃんか。俺なら大歓迎だぜ」

「じゃあ、今度辻本と黒ミサ行って来い」

皮肉たっぷりに赤碕に返す。

もう、辻本に誘われてオカルトイベントへいくのはやめよう。

うん、ロクでもないことになると言うのが、昨日実証された。
しかし、昨日の今日でバレるとは、思いもしなかった。

「え？ 嫌だ、折角の冬休み棒に振るのは勘弁願いたい」

「メイド喫茶でのバイトだろ？ そもそも男がメイド喫茶でメイド服着てバイトすることが間違ってたよ、止めちまえ」

ちなみに、冬休みは12月上旬からクリスマスまでの2週間弱。
その間がこのバイトの虫の稼ぎ時だとか何とか。 まあ、一番は
夏で二番目だから如何でもいいとか何とか言っていた気もする。

「えー？ いいじゃん、一緒に優希もバイトしようよう」

高音、女子ボイスで赤碕が優希を誘う。 いや、引きずり込もう
と必死になる。

何故って？ いや、俺にも心当たりが無いわけじゃない。

そうだな、それは去年の丁度この時期の話だ。

赤碕が、「ちよっとバイト手伝ってくれよ」なんて珍しく言うも
んだから、言われるがままに連れて行かれたのは何を隠そうメイド
喫茶。 当たり前のようにメイド服を着せられ、アルバイトとして
一日だけ嫌々ながらやらされた結果、その日の売り上げがその年で
トップだったそうなの……。

故に、コイツは俺を引き込もうと必死なのだ。 それに、今俺、
女だし、文句も言えないだろう的な考えがありそうで怖い。

「あのな、女子ボイス分かったから。 高音で喋れるのな、俺も
だよ馬鹿野郎。 二度と行くか、あんな所」

「いいじゃん、一生のお願い！」

両手を合わせ、頭の上に持つてくるその行為を止めてもらいたい。
俺、そんな偉い奴じゃないよ？

「無・理。 夢見た話を止めろよ、お前男だろ？ メイド喫茶でのバイトも止めちまえ」

「だってさ、給料良いし……」

知るか！

金の亡者かコイツは……！ 確かに、一日だけで5万も稼げるとは思わなかった。 いや、俺効果で5万だった。

だが、金が入ろうともう二度とあんな格好はしたくない！

ブラを付けろ、さもないと退学だと言われて仕方なくでは無い。

金が欲しくないのか？ と、聞かれているのだ。

そんな金、欲しくない。

「シラネ」

そっぱを向き、弁当にがつく。

何だか、今日の弁当量が少ないような……。

「フーン、いいよ、もう優希のことは店長に話してあるから。

来ないとの店の、と白銅ちゃん行き着けだし、もう大きく予告しちゃってるから、優希の補習も増えるだろうね」

……。

赤碕……この野郎！

な……まさか白銅先生を味方に付けている……だと！ なんということだ、ここで断ったら来年の春休み、夏休みが補習に消える！

なんとしても……阻止しなければ！

「……分かったよ、今回だけだぞ」

「よっしゃ！ 優希ならきつと乗ってくれると思ってたんだ」

乗せたくせに。 いや、辻本よろしく強制連行だろ？ これって

……。

「メイド服……着ないと駄目か？」

「何言ってるの？ 駄目だよ、私が許さないからね」

女子ボイスで、赤碕は言い放つ。

その声に、周囲の男が反応する。 いや、周囲の男って、ここ男子校だから当たり前か。

にしても……なんで、こんな事に……？

「ハイハイ、俺って弱み握られやすい性なのか……？」

A 5. 質問には答えを返してくれ（後書き）

友人 B

赤碕 あかさき

吟 ぎん

Q6. 改めて質問再開 帰りに襲撃された時の対処法は？

その日は一日、放心状態で終わったと言っても過言ではない。

いや、魂が半抜けの状態だったといってもあながち間違いではないだろう。

それくらい、疲れた。

帰り道、辻本とは別方向で、赤碕に関しては地元。なので、俺は一人寂しく電車に乗り、ナンパされ、痴漢して来た奴にサタンが塩を浴びせる&炎魔法でケツに火を放つの二連攻めで撃退し、駅から出て10分前後歩いた、駅と自宅の中間点とでも言うべき住宅街の、中にある公園。

そこで休憩を取っていた所だ。そして、何時もここで苦いコーヒーを飲み、眠気を覚まして家へ帰る。が、今日はどうもその苦いコーヒーが異様にまずく感じられたのは気のせい……だろうか？

「さて、帰るか。サタンはどこか行って見たい所は有るか？」

「待て」

不意に、立ち上がった俺をサタンが制止する。今までに無いほど、殺気をたぎらせ、周囲を見渡す。

恐らく、俺でなくともその殺気には足がすくむだろう。いや、俺に向けられていない殺意で、俺が足をすくませていると言うのが正しい。それほど、魔王とは思えなかったこいつは魔王であったということだ。

詰まり、百合であろうと、魔王は魔王。強く恐ろしい存在であることに、変わりはない。

「動くな、敵が居る。私は別次元で待機しているからな……物

は送ることは可能だが、私自らそっちへ行くことはできない。つまり、今の私はホログラム状態だ。それに気づいた奴が、どうも居るらしい。学校に居る間は居る間で20匹近くが優希に目を付けていたが、気づかなかったか？ 全て威圧していたが……」

20匹……、気づかなかった。

いや、いつもと変わらない日常だった。つまり、悪魔は何処にでも居ると言うことか？

「まずいな、私はさっきの弱小魔術を放つので精一杯だ。その場に居なければ、このレベルの悪魔は……相手に出来ん。魔術をそのまま送るには、相当な魔力を消費するからな。あれでも、私が放ったのは最上級魔術だった」

サタンの言葉とともに、茂みの中から一匹の小さなネズミが姿を現した。

ネズミであれば、良かった。ネズミなら、無害だった。

だが、そのネズミはその場で巨大な姿に膨れ上がり、見る見るうちに熊サイズのバケモノに姿を変える！

「そうだな、優希、魔力の使い方を教える。あの程度であれば、魔術の基礎が不完全でもそれだけの魔力の力押しで勝てるだろう」

そして、猛スピードでその30mも無い間合いを迫り来る！

「右手のひらを前に突き出し、意識を軽く集中しろ。相手が触れるか触れないかの寸前で、自分に追い風が吹くイメージを頭の中に思い浮かべろ。それで……」

寸前のところで……追い風！

そのイメージはその場で現実へと変換され……そのバケモノをいとも簡単に吹き飛ばす！

「相手は吹き飛ばす」

バケモノは公園にあったベンチを粉々に砕き、吹き飛び、トイレの外壁にぶち当たり、ようやく止まった。だが、吹き飛ばし続けるだけでは……

「ダメージが足りないな。訓練無しにいきなり上級魔術を使わせるわけにも行かない、どうしたことか……」

サタンが考え込む間、そのバケモノは体勢を立て直し、大口を開けて再び突進する！

だが、優希はもう一撃。強烈な爆風で吹き飛ばすと、吹き飛ばされ、体勢の崩れたそのバケモノに近づき、もう一撃。爆風を叩き込む！

「なあ、イメージ変えれば斬れるか？」

優希の問いに、

「ああ、可能だが、風で刃だ。人間の考えでやって、イメージが間違っていれば即こいつに食われるぞ？」

サタンは疑問符を浮かべながら返す。

「十分だ。斬るイメージで……」

優希は適当な木の枝を拾い上げ、そのバケモノへと投げつける！

その枝は、面白いように次々とそのバケモノに突き刺さり、バケモノの行動力を殺ぐ。

だが……ダメージが有るようには見えない。

「物理攻撃は効かんらしいな。やはり、手っ取り早く焼くしかあるまいが……勝手なイメージで火花が出ても、焼く前に食われる……そうだな、合体と言うのはどうだ？」

ハイ？ 合体とな……？

つまり、貴女と私でランデブー？ と、言うことでしょうか？

いや、それしかないか。つか、マジでランデブーしちゃうわけ？

「そんな事、可能なのか？」

「合体相手が女であれば、私は可能だ」

「男だったら？」

「絶対に嫌だ」

様は気分の問題か。でも俺、見た目は女でも中身は男ですよ？……まあ、

「なるように成れだな、これを持っても倒せる気が全然しねえ」

「よし、同意したな？」

サタンの言葉の直後だった、光を発するわけでもなく、音も無く、頭に違和感を覚えるとともに、

「授業の時間だ」

サタンの言葉が頭の中に木霊する。

違和感を感じた頭を見てみれば、髪の色はそのまま黒い羊のような角が二本生え、それに伸ばしている手の爪も、攻撃的に尖っている。

更に言うと、上半身黒装束。で、何故かミニスカート……？

何でこういうのは、足の露出が好きなんだ？ スースーするし、スカートと言う所は認めたくない。

メイド喫茶の経験で、スカートは嫌だと言うトラウマがある。

「これで大丈夫か？ 何か手違いで戻れないなんて事はないだろうな？」

「ああ、中々同調シンクロさせやすかった。分離の方が融合より簡単だ。

では、これから私が体の主導権を握り、感覚をお前に教える。

合体するのが嫌だったら、一度で覚えるようにしろ」

あー、ヘイヘイ。了解しましたー。

その言葉とともに、サタンは右腕を前に突き出し、今しがた起き上がったばかりのデカブツに、容赦なく炎を吹き付ける！ 炎を発生している手は暑くない。むしろ、冷たい。

だが、まだ奴は動く。

「次は、そうだな。雷と言うのはどうだ？ 魔王といえば、やはり炎よりも雷と言うやつも多いだろう？」

容赦ない連続攻撃。雷は、静電気に似ている。が、反発する感覚だけで、痛みは無い。

魔法って、便利だね。

「うわ……まだ動くぞ？」

「仕方あるまい、それが魔物だ。では、トドメと行こうか」

その言葉とともに、右手のひらに何か重いものが現れる感覚。
それは大鎌。そして、重たいが、持ち上がる。腕力ではない、別の力が持ち上げている。

「さあ、地獄へ……還るがいい！」

容赦ない、一撃。その鎌は、大口をあけて、そのバケモノに噛み付き、食い殺す！

最初からそうしろよ……。

ああ、吐き気がしてきた。素人には刺激が強すぎるんだよな、多分。

霧みたいになって消えてくれると助かるんだが……どうも、そうは行かないらしい。

「討伐完了……戻すぞ」

その言葉の直後、喪失感に襲われる。

後は帰り道をボーっとしながら歩いて帰ったところまでは覚えて
いる。

その後ベッドにダイブして眠ってしまったらしく、目を覚ました
のは翌朝のことだった。

魔法を使った間は、そうでもなかったが、どうやら、合体と言う
やつは異様に体力を消費するらしい。

Q6. 改めて質問再開 帰りに襲撃された時の対処法は？ (後書き)

悪乗りして魔法少女化をしてしまった……

ま、良いよね……多分 きちんと戦闘ってタグ付けたし

A 6. 合体しちゃえば楽だぞ？

翌日、開け放たれた窓から、部屋にすずめが飛び込んできて、優希の頭をつつく。

優希は寝ぼけ眼で周囲を見渡し、ベッドから起き上がる。朝のこの夢現に落ちている時間が、唯一現実逃避可能な安らぎの時間だ。ただ、その後に襲い掛かってくる喪失感も凄まじい。

「よくもまあ、冬も終わりが近いとはいえ、窓開けたまま寝て風邪引かなかったな……」

昔から何とかは風邪引かないとか言うし、今回も勝手に納得。ベッドから起き上がり、カレンダーに目を通す。

ああ、昨日始業式だったんだっけ？ 全く、何であの学校は始業式を昼飯食った後にしたがるかね？

で、今日は土曜日で……

「そうだ、メイド喫茶が明日あるんだ……」

優希は大きくため息をつき、

「鬱だ〜!」

叫ぶ。 半ばヤケクソ。 半ば苛立ちを少しでも晴らしたいと言う願望が混じって、それは奇声にも似た雄たけびとして家の中を駆け巡り……

「五月蠅い！ 馬鹿兄……姉貴！」

妹を怒らせる。 ああ、嬉しいね。

まだ兄と認識してくれてるよ。 まあ、その『兄』が消えるのも時間の問題か……。

「優希、暇なのか？」

「ああ、今日はね」

サタンが珍しく話しかけてくる。
どうも、臭い。

「では、そうだな。 私とデートしろ」

はあ？

臭いとは思ったけど……まさかのデート？ まあね、妃とか行っている相手からすれば、デートが今日というのも遅いのもしれないけど、俺からすれば随分と早すぎる。

ついでに言うと、サタンが銭湯のチケットを片手に持っている辺り、デートは嫌だと言う気持ち勝ち、

「却下。 銭湯行くならなお更……」

「体くらい洗え。 昨日からずっとだぞ？」

ああ、そういえば、この体になってから風呂入ってない――……？
いや、俺にそこまでの勇氣はない。 駄目だ自分で自分の体直視できない人間が何処に居るんだよ？

見ない分には随分慣れていたが……まさかこんな所にボスキャラが潜んでいたとは……！ シークレットキャラかこの野郎！

さて、風呂にやってまいりました。

思春期男子の皆さん、お待ちかねのシャワーシーン……。でき
ることならカットしてしまいたい。

サタンに言っても、「自分の体くらい自分で洗え。何なら、私
が洗ってやろうか？」と、返してくれました。無理です。思春
期の男子にはそんな女の体を女に洗ってもらうなど、出来ませんと
も。

多量出血で死ぬのが見えてる。止めて！

「さあ、俺は今までこの風呂がここまで凶悪に見えたことは無い
ぞ……？」 触手生えてきたりしないだろうな……」

「触手？ 望んでいるのか？」

望んで……ねえ！ つーか止めて、そういういじり方。

取り合えず、恐る恐る服を脱ぐ。で、どうすればいいんだ？

『少々お待ちください』

三分後。大きな爆発音と、相次ぐ会話。

ここからは音声だけでお楽しみください。

「いやっ！ ちょっと……！」

「往生際が悪いな、私が直々にこの世界に来てやったというのに」

「だから……ひゃあっん！」

「いい声で啼く……」

「うわあああ！ 止めろ！ 止め……っ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！」

更に五分後。

悪夢に打ち勝ち、優希はタオル一枚を巻いてベッドに倒れこんでいた。

気絶しているとか言うより、死んで無いかと疑われるその潰れっぷりは見事なものだ。

「なあ……この状態で魔物が出たらサタン……頼んだ」

うなされる様に机に腰掛けているサタンに言い放つ。

だが、サタンは首を横に振り、

「嫌だ、優希が魔法を使って追い返せ。 優希が魔王を完全にマスターしたら私が動いてやる。 それまではまあ、合体か、練習あるのみだな」

「マジかあゝ」

その答えに、優希は悲痛の叫びにならない言葉を力なく言い放つ。 何だか、鬱になりそうだ。 マジかよ……毎日これが続くのか。 地獄だな、こりゃ。

その頃地獄では……？

大魔王が地獄から外出し、人間界時間で二日間。

地獄では、1000年以上の月日が流れていた。それもそのはず、地上と地獄では、時間軸が違いすぎる。

人間界での一日は、地獄での500年間に相当し、666代目であつたサタンの家系も、既に674代目サタンが地獄を治める始末。だが、彼女はそんなことなど知らず、ただ、人間界を楽しんでいた。

そして、地獄でそのことを知るものは……一人も居ない。

何故……？ 簡単な理由だ。

「威厳の薄い女兒は致命的」前に666代目サタンが述べた言葉。これが、関係している。

弟が、後を継いだのだ。サタン姉は、記録の上にしか残っていない、『存在しなかった架空の人物』の扱いを受けている。いや、その記録を見る者も、この1000年間、誰一人としていなかった。『架空の人物』であり、『歴代最強』と謳われるその魔力は、後のサタン後継者に越えるべき壁を作るだけの役割を果たした結果だ。勇者が試練を乗り越える間、魔王は歴代を超えようと必死なのだ。ただ、歴代最強を超えなくとも、その力は十分すぎるほど強い。そして、その歴史書に述べられている名は『リベラル』。サタンの人格を否定するその名は、歴代最強としては恥さらしともいえるよう。

「……記述が正しければ、まだ人間界に？」

その記述書を黙読する影が一つ。宝物庫に安置されたその書物を、食い入るように見つめている。

下手をすれば、その人影には不意打ちが有効かもしれない。魔王の城、魔王の宝物庫に入れる人物などただ一人。魔王だけだ。

「いや、……しかし……人間界へ出向くなど、初代でもなければ不可能では無いのか？　まさか、私と同じように……時空転送魔術を完成させている？」

その人影はフブツブツとなにやら呟いている。

そして、その声は、高い音域にある。女声そのもの。

『威厳の薄い女兒は致命的』今正に、それが繰り返されていたのだ。地獄にて、666代目サタンと同じ現象が……！

「転送陣を用意しろ、私はこれより、人間界へ出向く」

その声が、物陰に命令を下す。

「人間界にはまだ、リベラルが存在しているはずだ。私がそれを超え、最強となる」

すれば……性別など関係ない。最強であれば、威厳など不要だ。

私がこの姿のままでも、十分な貫禄が得られる……！

「武器は鎌だけで良い。私が最強となって、戻ってくるのに10年も掛かるまい。頼んだぞ、大臣」

『御意』

影が、揺らめき、返事を返す。

その頃地獄では……？（後書き）

リベラル

666代目サタンの正式な名前

彼女が人間界へ飛び立った後に、死んだとみなされ名づけられた

ちよつとこの辺から戦闘シーン入れようか入れまいか悩んで中
デカイネズミのこともあって、無いと不自然だし、余りにありすぎ
ると方向違っちゃうし、難しい……

猫耳巫女服……

地獄で着々と遠征の準備が整えられている間、優希は不幸のどん底に叩き落されていた。

事の始まりは、「ああ、猫になりたい……」の一言。これを真に受けたサタンが、優希をリアル猫耳姿にして見せたのだ。ついでに、茶色い毛並みの尻尾つき。

元男として、これだけは避けたい事態。それに追い討ちを掛けるかのごとく、サタンは優希の服を巫女服に変換。結果、何処かのお稲荷様よろしくの姿になってしまったわけだ。

「早く戻せよ！　もううんざりだ！」

「良いだろう、魔法少女……もとい魔王少女に変身したのだ。その程度の姿、問題あるまい」

さらっと思いついたくない思いつき^{トラウマ}を出を述べられ、優希は更に頭を抱える。更に、ここでドアのノックされる音が……。

サタンは今ここに居て、姿も常人に認知される。つまり、サタンが居るといふ異常事態の乗っかって、俺が猫耳巫女服少女状態であるということも見られる。来た奴は一度で二度美味しい状態に陥るわけだ。

勘弁してくれ……。

何て思っていれば、サタンは躊躇なく部屋の扉を開く。そこに立っていたのは育美。

数秒のフリーズの後、我に返り、再起動。

「え……と……この間も思ったけど、夢……じゃないよね？」

「ああ、認めたくは無いが現実だ。 我が妹よ」

その言葉の後に、ようやく扉の近くに居たサタンに目が行き、

「この人は？」

答えに困る質問が優希に投げかけられる。

「えーとだね……」

「私か？ 私は地獄の大魔王、サタンだ。 忌むべき名としては、リベラルと呼ばれていた。 まあ、どちらで呼んでくれて構わない」

あ……？ リベラルって……聞いてないぞ？
そんな名前があるんだったら、

「最初からその名前言えよ！」

「嫌だ、忌むべき名である故、この名が付けられるのは本来死してからだ。 サタンでは複数居て困ると言う理由で、地獄では生きている間から既にリベラルと呼ばれていたがな」

あ、そ。

じゃあ、話を最初に戻すか。

「この猫耳巫女さん状態を戻せよ」

「い・や・だ、と言ったはずだが？」

いや、今始めて拒否されたよ？

つか、直してくれんのか？ この状態……。

「そもそも、優希がスカートを履けば問題ないのだ。スカートが嫌ならば、一生猫耳巫女服のままで戻れなくなる呪いをかけてやる」

ざけんな！

そんな魔法と言う高尚な技術を、そんな下らないことに使うなよ！
つか、そんなことも可能なのか、魔法って！ 何でもありだな、自由か！

半ば関心を覚えつつ、優希の顔が怒りにゆがんでいくのを見てか、サタンは指を一振り。

一瞬の浮遊感とともに、本の黒いジーンズにジャケットの姿に戻った。それを見ていた育美は、顎が外れるんじゃないかと思うくらい口を大きく開けて見ている。

「えーと……」

「ああ、サタンは本物。で、俺をこんな姿にしたのもこいつだ」

その言葉を聞いた後、その場に流れる永遠に感じる一瞬の沈黙。
そして……

「ありがとう！」

育美はサタンに飛びついた。
何をやっているんだ、我が妹よ……。

「兄じゃ嫌だったんですよ！」

成程、そういうことか。　って、オイ！
ふざけるな！　この状態が嫌なのは俺だけか！
見方が居ないのか、コンチクショー！

「あのゝ何事でしょうか？」

「優希、ずっとそのままで居てね！」

嫌だ！　……とも返せず、無言で首を横に振る。
だが、育美は有無を言わさぬ視線で迫り来る。

「……ハイ」

ああ、終に返事をしてしまった……。　これで契約になって一生
戻れないとか、無いよな……。？

猫耳巫女服……（後書き）

一度やってみたかったシチュエーション
何かと勝手に満足

初デートって、もっとうろ……ね

何があったのやら、少し時間を遡って考えてみるとしよう。

まず、部屋に育美が入ってきたことは覚えている。その後の返事も、確かにした。で、そこから後、目を覚ますまでの間、意識がどういふわけか飛んでいたのだが、どういう経路で意識が飛んだのやら……。その理由はさっぱりだ。

そして、一番の重要な点は、今、馬宮優希（高校1年生、性別元男、自称世界一の不幸者）は、全裸にされ、ベッドに寝かされていると言うことである。

さあ、そして寝かされているだけであれば、サタン……もといリベラルが奇妙な魔術を使っただけだと安心できる……様な出来ないような……。だが、現時点で、起き上がって気づく。

何故かそこには、辻本の姿が。そして、育美となにやら話し合っている。

「だから、お姉ちゃんはジーンズの方がいいって！」

「いや、優希はやはりミニスカートだ。ついでにジーンズにジャケットの組み合わせは絶対止めろ、萌えない！」

……。

「黙れ、愚民共。私が考える限りでは、メイド服というのは如何だ？」

何リベラル……サタン？

ええい、どっちでもいい！ サタンまでこの討論に参加してるんだよ！

「何事だよ？」

優希は突如起き上がり、それに反応して辻本は鼻血を滝のように流し、育美はジーンズと女物パンツを押し付けてくる。それを見ているサタンは特に問題ないとも言わんばかりに辻本の鼻血を逆流させ、元に戻した。鼻血を鼻から戻された辻本はむせ返る。それに優希が気を取られていた隙に、なんと言うことでしよう。

育美の柔道仕込の目にも留まらぬ足捌きで転ぶ途中、全裸の優希に服が着せられる。

何時も着ていた黒のジーンズに、ジャケット。黒い髀褌。ブリントの白シャツ。

通常装備だ。ただ、女物の下着だけはどうも勘弁してもらいたい。

「え？ だから」

「俺は優希にミニスカートを」

「黙れと言っておろうが！」

サタンの一言がその場に居た全員を黙らせる。流石魔王で、

「一体何事だよ」

長すぎるジーンズの裾を折りながら問う。

「ああ。今しがた、この色ボケ馬鹿が」

「馬鹿とは何だ、馬鹿とは！」

サタンが辻本を指差すが、辻本はその指の指す視点から外れる。だが、サタンは指を挿しなおすと、辻本はその手を握って下げようとしたが、サタンの怪力に屈し、涙目になりながらも意地を張っている。

何だ、こいつこんなに可愛かったっけ？

つか、色ボケは否定しないのか。

「優希にデートの誘いをしに来てな。私が一蹴したのだが、余りにもしつこく頼むため、渋々部屋に上がらせた次第だ」

『渋々』の所、明らかなお前の悪意を感じるのは、気のせいかな？ ニヤニヤしてるし……。いいのか、未来の妃を別の男とデートさせて？ 最も、妃になってやる気も無いけど。

悪意を感じるか否かは、自分の気のせいであることを願いたい。

「詰まりは、辻本。俺とデートしろってことか？」

「ああ、そういうことだ。頼む」

土下座止めろ。 そうだな、今は女なわけだし……不自然なことは無いか。

ただ、こんな野郎。 しかも、あろうことか辻本とデート？

辻本は真剣な眼差しで優希を見つめる。 今にもこの馬鹿の目からレーザービームか何かがでそうな勢いだ。 まあ、人間の目からそんなものは出るはずも無いけど。

まあ、どうするべきか考える余地も無いよな。 この馬鹿、決めたらそれ一点張りだし、断った所で無駄だ。 いや、強制連行される。

「……分かったよ、今回だけだぞ」

「そうか！ では、俺から条件が……」

「何でお前が条件を出す？」

「いいから」

「良くねえ！」

「で、条件だが……」

「ああ、もう勝手にしてくれ」

「全部俺の奢りな」

……。 案外マトモだった。

つか、それ、こっちから突きつけてやろうかって考えてた条件……。

「は？」

「だ・か・ら、全部、俺の奢り。 彼女に金使わせる彼氏が何処に居るんだよ」

ああ、そう。

何コイツ、こんなかつこよかったっけ？ いや、落ち着け。

相手が女の姿をしているからだ。 絶対そうだ。 いや、そうに決まってる。

「ああ、分かった。で、格好の指定とか、無いかな？ さっきまで散々ミニスカートがどうこう言ってたけど……」

その問いに、辻本は考え込む。

考え込むなよ……ともいえず、3分程度の長考の末、

「そうだな、じゃあ、こうするか。優希の服、買いに行こう」

最悪の結果が出ましたね。ハイ、分かりました。多分これ、拒否権無いんだろうな……。

初デートって、もっとうろ……ね（後書き）

時々見かけるWeb拍手とやらを調べるうちに

宣伝しないと埋もれていくと言う現実を目の当たりにしたけれど、宣伝する気が一切無いところがやっぱり私でした

時々他の小説サイトでの話の流れで「こっちでもこんなの書いてるよ」程度で、宣伝効果ほぼゼロですし

ブログも作れなければ、細かな設定も苦手で、特に自己満足に小説を描けていれば良いかな

なんて思う人って、私以外にもいるのかな？　とか思った今日この頃

取り合えず今はこの停学状態を紛らわすために描いているというのが正しいかな……？　うーん、どうだろ

初デート

うん、ジーンズパーカー姿で初デート……。男の姿ならそれで良いかもしれないが、女の姿だと流石に目立つ。「ボーイッシュ」だの「男装少女」だのと言う単語が聞こえてきたような気もした。

「ボーイッシュ」じゃねえ。俺は男だ。

「辻本、マジで服買いに行く気か？」

「ああ、マジ」

うわー……。超不安。コイツのセンス、当てにならないからな。成績も、たった一個。美術を除けばオール5。つまり、美術的なセンス皆無。

ついでに言うと、5段階評価で美術はなんとー5。5段階評価が10段階評価に早変わりする。

「さて、ここでもいいだろ」

近所の……。裁縫店。てか、都合よすぎる！

何で？ 何で女体化と化する話って、近所に洋服屋があったり（略）ホテルがあったりとかしちゃうわけ？

何でだ！ 神め、この野郎！ そんなに俺が憎いか！

「……え？」

もちろん、今の辻本に拒否など通らない。辻本の脳内に居る統括者が即刻却下している。

詰まり、拒否しても腕をつかまれ、今みたいに店内へと強制連行

されるのがオチだ。

問答無用で、入店。その店内は、無駄に広いが、段ボール箱に山のように詰め込まれた洋服がそこかしこに放置され、歩くスペースが狭い。広いからと言って無茶に品物を置き過ぎた結果が……これか。

「いらっしやいませ」

戸口付近の店員が寄ってくる。何だ、寄って来るな！
苛立ちながらも、笑顔は崩さず。一応、我慢する。

「え……と……」

「こいつに似合うやつ、無いですか？」

辻本がいきなり核心を突いた。いや、流石にそれはいくらなんでも直球過ぎる。

見ろ、店員固まってるじゃねえか！

「似合うお召し物……そうですね……。店長！ モデルみたいな娘に似合いそうなものってあります？」

店員が店の奥に向かって叫ぶ。いや、待て。
モデルみたいって何だ、落とし文句か？ つーか、店長呼ぶな！
これ以上増やしてどうする？

「はい、店長ですよ」

早過ぎるだろ……！ 呼ばれて2秒無くてこの場に来る……だと
う？

この狭い店内をこの速さで……！ コイツ、できる！ 何に？
とか突っ込まないで。 ノリだよ、ノリ。

「お客さんの前ですよ、しっかりしてください！」

店員Aが叱咤する。 だが、

「良いじゃないか、娘への誕生日プレゼントが完成してハイテンションになるくらい！」

全く堪える様子もなく、店長と呼ばれている男は恥ずかしげもなく言い放つ。

よくもまあ、こんな店長で店が成り立っているなど、むしろ感心させられる。

「で、このお嬢ちゃんに合いそうなもの……合いそうなもの……」

店長は、適当な服の山を崩し、洋服を漁り始める。

店長、勝手に勘違いしてたよ。 店の中に並べられた洋服……適当に避けてた結果がこれだったんだね。

「よくあの店長で店が成り立ってますね」

辻本、店員と何話してるんだ？

「ええ、私もそれは不思議で不思議で。 何か裏からお金仕入れ
ているんじゃないかと本気で心配になる時も……」

オイオイオイ、服買いに來ただけが物騒な話になってきたな。
何でだよ、何でそうなった？

「……これなんか如何かな？」

店長が、漁ってきた服のうちの一つを、優希に投げ渡す。

渡されたのは……真っ白いワンピース。

駄目だ、俺の男としてのプライドが、これを着ることを許さん。

顔をしかめたのが見えたのか、店長は「これなら？」と、次の服を渡す。

「えーと……何故にメイド服……？」

「これは？」

バニーガール？

「じゃあ、これ」

エプロン単体？ ……何を望んでいる！

「店長！」

店員Aが見かねてそれを止めさせる。

ありがとう、寄ってくるなどか考えてごめんよ。 いい奴だったんだね。

「ハイ？」

「ハイ？ じゃありません！ 一般のお客さんですよ、そんな小道具ではなく、きちんとした服を選んでください！」

店員Aの声が、店内に木霊する。
それが終わると、店長は再び服の山へと向かった。

結局メイド喫茶の手伝い準備ですかそうですか

「フン、魔物が私のお楽しみを奪いおって！　許さんぞ……貴様ア！」

サタンが小さい怪獣に向かって咆える。　いや、正確には俺の口で咆える。

現在、『中型』の魔物との戦闘中。　しかも、メイド服でデッキブラシを握りながら、顔出して。

何故、こうなったのやら……。　時を少し遡り、思い返してみる
としよう。

「お会計、25800円になります」

服を買いに辻本と行ったデートで、結局一着買った。

しかも、あろうことか購入したのはメイド服。　事の発端は簡単な話、赤崎の手伝いをするということが、馬宮に知れていたということだ。

そしてここでこれを購入すると言うことはつまり、

「明日、俺もメイド喫茶行くわ」

そういうこと。

来るな！　……とも言えず、買ってもらったメイド服を家で疲労する羽目に……。

サタン居るんだから、メイド服くらいいくらでも量産可能だろうと思うのだが……。

冷え切った視線で、優希は辻本を注視する。

だが、辻本は「そんなに見つめるなよ、照れるだろ」と、頬を赤らめて言うのだが、正直言ってその姿は「キモイ」の一言に限る。折角のイケ面が台無しだと思う。

と言うより、皆「キモイ」使いすぎなんだよね。何か事あるごとに「キモイ」だもん、それしか罵り言葉を知らないのか！とか、時々思う。いや、知らないんだな、分かりました。

「んで、これを俺に着ろ……と」

「ああ、当たり前だ！」

真顔……止めろ。更に気色悪い！

……と、まあこんな感じで購入に至ったわけだ。そして、家でお披露目させられているこの状態で、家が突如巨大な爪のような物によって半壊。

余りにも突然のことに、『手持ち魔力の足りない』サタンは否応無しに俺と合体したと言うわけだ。

どうも、悪魔という奴は地獄や魔界から人間界へ出てくる際に魔力を全て持ってくるのは大変なので一部だけを地獄や魔界に残し、それを媒体に充填してそこから転送すると言う手法を取るらしいのだが、生憎、完全充填フルチャージされていないため、送ってくる間に減少して大した量ではなくなってしまうとか。

そのため、突然の敵にサタンは慌てて合体したと言うわけだ。そして、今回襲い掛かってきた敵。

「ミストルティンの成木が魔物を取り込んだらしいな、優希のレ

ベルでは魔力のゴリ押しをしても手に負えん」

「ミストルティンって何だ？」

「人間界では神話などで知られる宿木と呼ばれる寄生樹木だ。

が、それは剣を意味する場合もある。つまり、奴の蔓は全て剣と思え。ちなみに、この魔物は、唯一魔物の中で光の神に勝る性質を持った魔物だ。ただ、成木では意味を成さんが……」

寄生樹木？ しかも、この巨大な幹から突き出した無数の蔓全てを剣と思えて？ 下手すると足みたいに稼動してる根も剣のような物に変わるんじゃないか？

しかも光の神に勝るって？ 冗談じゃない。

何が中級だよ、能力考えたら十分上級じゃねえか！

「中型と言っていたと思ったが……上級な魔物ではないのですか？」

思わず質問。

「ああ、中の上だ。ちなみに、この前のデカイネズミは下の上。実力差はでかいぞ」

さらっと返されるその答え。だが、サタンは一切気にして居ないといったいい程余裕の表情。

まさか、これに勝つと？ いや、魔王サタンならありえなくは無いか。だが……どうやってその不足した魔力を補う？

「さて、今の私は優希のメイド姿を愛でるのを邪魔され、頭にきてる。一撃でトドメを刺す」

サタンが猛る。

「恥ずかしいことサラッと言うなよ」

「ああ、スマン。つい言ってしまった」

「大声で？」

「ああ、良いだろう？」

……言いわけあるかよ。

何処を如何間違えた？

「さあ、トドメ行くぞ！」

サタンの言葉と共に、持っていたデッキブラシのブラシが炎上する！

てか、何時の間にデッキブラシなんか持ってたんだ？ しかも服装はメイド服のまま変わってないようだし、まさか……

「デッキブラシは何処から調達したんだよ……？」

「私の私物だ、メイド服Ⅱ剣ではなくデッキブラシやモップ、箒etc……というイメージが人間にはあるのだろうか？」

やっぱり。

呆れるな、ここまでやるか大魔王！

だが、呆れる合間に、攻撃は始まっていた。迫り来る無数の蔓をまるで脅威に感じることもなく、ブラシの柄で弾く！

気づけば、既に魔物の目の前にまでその得物の炎は到達し、魔物の幹に……一瞬かすった。

が、蔓に弾き飛ばされ、半壊した室内へと投げ込まれる！

「クッソ、隙がねえ」

「いいや、隙だらけだ。それに、既に勝敗なら決した。私たちの勝利だ」

サタンの言葉と共に、ミストルティンに起こった事態に、優希は目を見張った。

ミストルティンが……炎を上げて暴れている！ 何故？ あのブラシの先の炎が燃え移ったか？ しかも、かすった程度で？ 考えにくい。

だが、……悪魔だの魔物だのに常識が通用しないことも重々承知だ。

「じゃ、こっちはどうする？ 部屋が半壊してるぞ。下手すれば癒えも今にも崩れそうな雰囲気放ってっけど……」

10分後。

全て元通り。

あろうことかこの魔王、時を巻き戻して家の崩壊を『無かったこと』にしやがった。

ただ、消費した魔力と言うやつも半端ではない量らしく、しばらく『合体』も出来ないと述べて、どこかへ消えてしまった。

そして、俺も体力を持っていかれてこれから強制睡眠に落ちるわけだが、起きた時、どうなっているのかを考えると、どうも眠れそうに無い。

何処を如何間違えた？（後書き）

何だか今回、極端に短くてスイマセン

Q7. どうしても手伝わないと駄目ですか？

優希は今までに無い速さで、目を覚ますと脱兎の如く洗面所へ階段を飛び降り、向かった。

ああ、そうです。詰まり、今自分がどんな姿なのか確認するためですとも。 場合によっては化粧されて遊ばれている場合も否定できない。

実際の所、育美が提案し、大魔王^{サタン}がそれを率先してやりそうで、怖い。

いや、そんな提案が出れば大魔王^{サタン}は「よくやった」と言いながら育美を抱きしめることだろう。

「うげっ！」

その姿は、想像を超えた姿だった。

……その姿は、筆舌に尽くしがたい。 知りたければ各々で想像して欲しい。

そこから一時間。 終に、審判の時がやってきた。
インターホンの音と共に、

「優希〜！ バイト手伝ってよ！」

来やがった！

終に来やがったな！ 赤碕！

「御免被るって断ったらどうするつもりだ？」

優希は玄関を開けると共に、その言葉を吐き出す。 すると、赤

碯は笑顔で、

「え？ そんなことしたら（略^ビ）な秘密をネット上にばら撒いてあげるよ？」

この……悪魔！

コイツ……だったらオマエが男の癖にメイド喫茶でバイトしてることを店長に言いつけてやろうか！ それに、今は大魔王^{サタン}の呪縛で俺は女だ。

前に手伝ったこともそれで誤魔化せるだろう。

さあ、どうする？

……なんて、弱み握ったつもりになって勝ったつもりになるべきではなかった。

「俺が女のフリしてメイド喫茶でバイトしてることを店長に言いつけようって？ 止めとけよ、無駄だから。店長は“カワイければ問題ないって言う変人だぜ？”」

……。

やはり、コイツ……侮れない！

白銅先生が来ると言うこともあるが、何より店長の許可が無ければバイトは不可能。

許可が出なかったで押し通そうと思っていたが……よりもよって、赤碯^{コイツ}、女顔で華奢な痩せ型。つまり、見た目女だ。

……駄目だ、作戦失敗。

「また……あのフリル付きのメイド服着せられるのか……？」

優希の問いに、赤碯はキョトンとして、

「あれ？ 優希、メイド服昨日買ったんじゃないの？ 辻本が宣伝してたけど……」

……。

いま、何かが切れた。

何だろう、この怒り。 この感情、何処に向けようか……。

優希の頭は超スピードで回転を始める。 だが、

「じゃ、優希、行こっか」

その回転は赤碕の一言によっていとも容易く止められた。腕を握られ、毎度お馴染みの強制連行。 向かうは、メイド喫茶。

「あのさ、どうしても手伝わないと……駄目か？」

「うん、駄目。 既に決したことだし、男なら文句は言わないもんだろ」

「いや……私、今は女……」

「言葉遣い変えても駄目だ、行くぞ」

ああ、何故こんな事に。 この悪魔め、いつか見てろ、オマエの（略）や（略）な（略）を学校中にばら撒いてやる！

そんな思考など露知らず、赤碕は優希の腕を握ると、そのまま電車代を金肩代わりすることも惜しまず駅のホームへと降りた。

何でだろう、まだ初夏と言うわけでもないのに、駅のホームのこの熱気。

直射日光を浴びたコンクリートが、熱を吐き出しているんだ……。

優希の脳はついに如何でもいいようなことの分析を始めた。自分で、自分が現実逃避をしていることを冷静に感じ取りながら。ああ、電車が来た。これを使い継いで、地獄へ行くのか……。

A 7. 君に拒否権はありません（前書き）

何だか最近、敵キャラLove状態が続いております

良いヤツって何だか全体見えていない奴が多いような気がしてどうしても好きになれないんですね

自分達一派が救われるだけで、周囲が見えてない

まあ、見てる側がスッキリするのは大体そんなモンなんでしょうけど……

正義って何でしょうね

A 7. 君に拒否権はありません

「お帰りなさいませ、ご主人さ……優希ちゃん！」

店に入るなり、店長は優希に飛び掛る。まるでそれは襲い掛かっているようにも見えなくは無い。

それを見て、ニヤつく赤碕を殴りたくなる衝動に駆られるが、優希はそれを押さえ込む。元より、優希は非力だし、ひ弱だ。この腕力の落ちたこの状態では、殴ればこっちが痛いことも分かっている。

「えー、まあ。去年と同じように強制連行されてきたところで
す」

苦笑いしながら、しがみつく店長を引き剥がす。
だが、何でだろう？ 全く微動だにしない。

「優希ちゃん、胸大きくなったんじゃない？ 去年はまな板だったのに〜！」

単純に……鬱陶しい。

「ハハハ、そうですか店長。 俺……」

「コラ！ 俺は禁止。 私といいなさい！」

一言の小さな失言が、店長を怒らせる。

この人、基本は良い人なんだけど怒ると……怖いんだよな。
それも、ひよんなことでマジ切れするし……。 で、そういえば

「今頃ですが……店長って名前なんですか？ 私、去年も店長のこと店長としか呼んでなかったの……」

「へ？ いーよいーよ、名前なんて。 店長が私の名前って事で
一っ」

相変わらずそれか。 確か、去年もそうだったんだよな。

店員も皆して店長店長としか呼んでないし、自分の名前が嫌なのか……？

「了解しました店長。 で、私が働くのは今回が本当に最後ですよ？ もうこの残念な天才が何を言ってきたても、私は手伝いに来ませんから」

優希は赤碕を指差し、宣言する。

赤碕はそれに対し、豆鉄砲を食らった鳩のような顔で優希を注視する。

「優希……本気で言ってるの？」

「ああ、本気も本気。 自分からこんな野郎に対して奉仕活動なんて金もらってもやりたくねえ！」

その言葉に、店長は苦笑いを浮かべる。

だが、起こる気配は無い。 何でだ？ 言葉遣いでアレだけ怒っておきながら……自分の仕事が批判されて怒らないのは何故？

「何だ、優希ちゃんメイド嫌いだったんだ。 まあ、それ以前に私としては吟^{ギン}ちゃんが何か優希ちゃんの弱みを掴んで手伝わせてい

る所に引つかかるかな……？　ねえ、それってどんな弱み？」

店長……。

呆れ半ば、優希は二人を放置。　店の奥へ向かい、持参の制服を着る。

もちろん、辻本が先日購入したメイド服。

後から店長と共に来た赤碕は、それを見て無言で飛びついてくる。が、それを店長が制止する。

「私の所有物に飛びかかろうとするなど、千年早いぞ。　この壊れかけた便所スリッパが」

あれー？　店長、何？　キャラ激変？　え？　え？

だが、その違和感はすぐに拭い去られ、優希は納得した。

「如何した、私がわからんのか？」

大魔王^{サタン}だ。　どうやら、店長に憑依でもしているらしい。

「如何したんだよ、赤碕気絶したぞ？」

「知らないな、私の妃に飛び掛るからだ。　この腐りかけたドリアンが」

で、大魔王^{サタン}って、こんなキャラだったわけ？
もう少しさ、ねえ？　こんなSだったわけ？

「オマエ……キャラ激変してねえか？」

「一夜にして男から女に変わった奴が何を言う？」

あれー？ お前が変えたんだろうが！

「いや、それ以上に衝撃的だ。 そんな腐りかけたドリアンなんて一度も言ったことは無いだろ？」

「ああ、今はじめて言った。 この男がそう見えただけだ。 それに、私が付いてくるの当たり前であろう。 男共の中で奉仕活動だと？ 手を出すやからが折れば、私直々に消し炭に変えてやる」

大魔王^{サタン}は手のひらで青い炎を弄び、言い放った。

「どうやら、去年以上に気を張っていなければ死人が出る！」

Q8. 焼き殺してはいけないのか？

優希が着替え終わり、表に出てきて数十分間。

店長のキャラ激変に去年の比ではない客が詰め掛けた。ただ、

店長……もとい大魔王^{サタン}効果によって詰め掛けた客は、罵られたいM男が大半を占めているというのは、見ていて何だか悲しくなってくる。

「何だ貴様、役に立たない便座カバーが何ゆえ私の優希に手を出そうと思考する……？」

まあ、優希からすれば去年も居た痴漢常連に火炎弾という鉄槌が下るのは見ていて相当すつとするものだったが、それに併せて水を汲んだバケツで火を消すという作業で疲労していた。

何だろう、体力までがた落ちしてるのか……？

「死を覚悟の上での愚考であろう、許しはしまいぞ……？ この蛆虫共が」

ああ、店長、止めて下さい。俺の仕事がどんどん増える。

「店長！ もういいですから、奥へ行っていて下さい！」

優希は店長に取り憑いたサタンを店長もろとも店の奥へと押し込む。もちろん、自分も付いていく。

「サタン、もう止めてくれ。……疲れた」

「ほう？ では疲労を回復させれば問題あるまい」

……なんでかな、そんなゲーム染みた答えが返ってくるとは思わなかった。

確かに、魔法と言う技術は万能と言っても良い。だが、その用途と発想を、コイツは間違えているような気がしてならない。

「人間はゲームのキャラじゃないんだ、店長も、オマエが取り付いたことで何かあったらどうする？」

説教開始。 いや、正しくは俺の中に溜まっていた不満が一気に爆発した。 今まで溜め込んでいた感情を、一気に吐き出す。

「大体、オマエの自分勝手なわがままで俺がこんな姿になったんだろうが！ 次は俺以外の奴を巻き込むつもりか？ いい加減にしろよ！」

「いや……私はただ……」

「如何でも良い、店長から離れろ」

優希はサタンに対し、殺気立った視線を送る。

恐らく、その行動は予想外だったのだろう。 サタンは店長の体から離れると、バランスを崩した店長はそのまま床に倒れこんだ。 恐らく、気絶している。

「オマエも、もう少し自分以外の奴の気持ちも考えてみろよ」

優希が静かに、怒りをこめて言い放つ。 その言葉と共に、サタンはうつむき、その空間と同化するようになって……消えた。 それと共に店長が目覚めます。

「あれ？　優希ちゃん、表での接客……は、無理そうね」

店長は優希の異変を感じ取り、静かにたたずんでいる優希の横を通り過ぎる。

「収まったら、表出て接客やって。　何があったのか分からないけど、苦しそうよ」

いや、苦しくない。

全部吐き出したし、苦しいどころかスッキリした。

「いえ、店長。　私、もう表出ます。　お客さん、待たせちゃ悪いので」

A 8. 人の気持ちを考えなさい

サタンが消えてからすぐにキャラの戻った店長を見てか、凄まじい勢いで押し寄せてきていた客は引いたが、それでもまだいつもの比ではないであろう人数が残っていた。

何だ、この状況。 去年もここまでの人数は来なかった。 ……
そうか、宣伝効果だ！

「店長、去年は私、飛び入りでの手伝いでしたよね……？」

「ええ、そうよ」

やっぱり。 何でかな、メイド喫茶で男の方がウケがいいって。この調子で行くとまた増えるかもしれない……。 そういえば、白銅先生来たっけ？ あ、来たな。

辻本とオムライス注文してたハズ。 さっき受付で金払って帰ったところをチラッと見たし。

そんな考えを浮かべつつ、客の居るテーブルに順に注文された料理を置いていく。

そして、持っていたものを配り終わり、注文を聞きに回る。

「ご注文は」

「アイスコーヒー一個。 角砂糖5つ入れて」

優希はあっけにと取られた。

明らかに、注文をしているのは同じ年くらいの女子。 長い黒髪に、紅の瞳。 痩せ型で、男のの学ランを着て、何故かその腕には風紀の腕章。 まあ、女子が珍しいと言うのは珍しい。 だが、学

ラン風紀の女子など、生まれてはじめて見たと言うのが本音だ。
うーん……近くの共学校か女子校の風紀委員の視察か何か？
確かに、メイド喫茶ってだけで学校の近くは嫌がられたりとかする
らしいような話は聞いたことが無くもないけど……。

「はい、ただいま」

「ああ、ゆっくりでいいよ。 ゆっくりで、優希君」

何で俺の名前を――！ 間一髪、その十手での一撃を避ける。

この女ア！ 何だよ、急に攻撃するのがオマエの礼儀か、この野郎！（女だけど）

優希も臨戦態勢へと移るが、それを速攻解除した。 サタンとの『合体』である程度の弱小魔法程度なら使える自信がある。 が、魔法を使えばそれこそ騒ぎになる。

いや、既に客の一人が十手を取り出して店員に攻撃を仕掛けたと言うことで騒ぎにはなっている。

「何で俺の名前知ってるんだよ……」

「ああ、知っているよ。 彩白男子校の生徒……のはずだよな？」

あー、早速男子校ってバラしやがった。 けどま、どんだけでも誤魔化せるし、問題ないか。

「あー、うん」

「男である君がメイド喫茶でのアルバイト。 その行動派風紀を乱す、故にボクが君に制裁を下しに来たんだよ」

相手は十手を手のひらでクルクルと回す。　どうも、喧嘩慣れしているらしいが、相手にその喧嘩で負うような傷は皆無。　相当強いのか、何なのか。

いずれにせよ、こっちが魔法を使える。　敵じゃない。　それに、喧嘩する気もない。

っーか、

「オマエ、誰？」

今の疑問。　アンタ、誰よ？

「ボク？　名乗るつもりは無いよ、君はボクに殺される」

あの一、ここ日本ですよ？　殺されるって、俺が死ぬわけないが

……何？　電波か何か？

「あー……そう。　でもさ、君が返り討ちにあうとか考えたことは？」

「あるわけ無いだろう、ボクが返り討ちにあうのは、死ぬ時さ」

あ、そ。　何よ、この電波。　重症だな。

こっちの気持ちも考えてくれよ、喧嘩売られて買うのも好きじゃないし、何より……手伝いに来ているって言う俺の立場を理解して欲しい。

「分かった、相手するから。　満足したら帰ってよ」

優希は構えるような素振を見せる。　素振と言うだけで、実際は警戒していなければ、相手が脅威と思う感情も一切無い。　面倒く

さい。

ただ、それだけ。

A 8. 人の気持ちを考えなさい（後書き）

何か、コメディーじゃなくなってるような気がする

Q9. アンタ、誰よ？

「ふざけているのか、構えもどきじゃないか」

ふざけていません、やる気が無いだけです。

「いや、俺さ、喧嘩した経験殆ど無いから……ハハハ」

思わずその言葉に、自分で笑う。喧嘩したことがないやつが、こんな風紀なんて腕章つけて十手まで持ったヤバそうな子の相手をしようなんて考えるわけが無いのは言わずもがな。

店内の客は、いつの間にか騒ぐのを止めて二人の勝負に見入っている。いや、実際は、二次元染みた現象が起こっていることに見入っているのだろう。

相手の風紀の子も、美少女と言う美少女だ。これで、この喧嘩狂みみたいな性格じゃなかったら、可愛いんだろうな……。

「何を呆けているんだい？ さあ、こっちから仕掛けさせてもらうよ」

相手が動く。

ゆっくりとした挙動で、それで居てなお、物凄い速さで間合いを詰める。

そして……十手による連続打撃！ 思わず優希はそれを『風』で吹き飛ばす！ その瞬間、客席が沸いた。魔法を使った所為だろう。

多分次ここでのバイトやったら魔法少女扱いだろうな……。勘弁してくれよ、恥ずかしい。

「今のは……手品？」

「いや、魔法」

「ふざけるのは大概にして欲しいな」

「同感だよ、俺も同じ事考えてたところだ」

再び迫り来る十手に、優希は何も持っていなかったはずの右手に出現させた大鎌で応戦する。釜での連続攻撃。隙は大きい。

その隙に併せてだろう。相手の子は、十手でその攻撃の合間に鎌を持った右手を強打。

思わず鎌を手放した優希に追い討ちをかける！

「わっと……ちょ……タンマ！」

「随分と余裕だね、他に何か面白い手品があるのかい？」

ねーよ！

実際、十手で攻撃での痛みは皆無。魔力って奴が鎧の代わりをしているんだろうが、一方的に攻撃を受けてばかりでは埒が明かないのも事実。

ここは、可哀想だけど……。

「ゴメン」

相手の十手が優希に触れた直後、相手は電流が流れたかのように一瞬痙攣し、その場に膝を突いた。

電撃攻撃。威力はさして高くは無い。

高威力でも良かったけれど、感電死させちゃ取り返しが付かない

んだよね。

「で、オマエは誰だ？ 恨まれるようなことした覚えは無いけど……」

優希は倒れこんだそのこの近くにかがみこみ、問い詰める。
「どうやら気絶しているらしく、返答は無い。仕方ないな……」。

「店長、この子奥に連れて行って面倒見るんでお店のほう続けてください」

A9. 君は誰？

小一時間ほどして彼女は眼を覚ました。 何があったのか覚えていない様子で、店の中を見回している。そして、

「お、目が覚めた。 気分はどう？」

店長がその子の面倒を見る。

基本的に店長は面倒見がいい優しい人だ。 あの不規則な激怒さえなければ出来すぎている人間といっても過言ではないだろう。聞いた話、車道にいた猫を助けようとして大型トラックに撥ねられたとかいう話もチラホラ耳にする。 よく生きていたもんだ。

「……最悪だよ。 視界が回って気分が悪い」

「そう、じゃあこれ」

店長はなにやら飲み物を勧める。 湯気が出ていて、熱そうだ。彼女はそれを受け取ると、自分の口へと運んだ。そして……

「熱っ！」

その熱さに驚きながらも一気に飲み干す。見た目とは反対の行動に驚きもせず、店長は笑顔のままそれを見ている。

「ねえ、優希って店員。 あれ、男……だろ？」

その問いに、店長は驚きの表情を浮かべ、

「胸があるのに？」

逆に問う。

「え？ 嘘……」

「本当よ、彼女は女の子です。 嘘だと思ふならちょっと待って」

店長はその子を残し、表へとでる。

そして、片づけをしていた優希を呼び止めると、再び店の奥へと戻っていった。

「……」

「何、まだ疑ってるの？ 大丈夫、証拠見せてあげるから」

店長はなにやら笑みを浮かべ、優希を学ラン娘の前へと立たせる。
そして……

「それっ！」

スカートをめくりあげる。

それに優希は思わず赤面し、ものすごい勢いでスカートを抑えた。
もちろん、男特有の（略^ビ）は無い。

「何するんですか、店長！」

「えゝ？　だって彼女が優希ちゃん男だなんて言うんだもん、誤解は解かないと」

そう言う……問題でしょうか？

「そういえば、あなた名前は？」

店長は特に優希の言葉に反省する様子も無く、さらに質問を投下。

「ボクは……けどういん 祁答院 ゆず 柚だよ。多分、その辺に屯してる不良に聞けば大体名前は出てくるんじゃないかな？　古宮女子高で風紀委員をやってるから、見回りついでに寄ってみただけさ」

「じゃあ、何で……」

店長が優希を注視する。明らかに、『俺禁止』といっているのが見受けられた。

「……私が男だって？」

優希は店長に対し、細心の注意を払い、問う。

「それは簡単だよ。　ボクはこの近辺の学校の生徒と顔、全部覚えてる」

A 9. 君は誰？（後書き）

PCウイルスに感染して更新が遅くなってしまいました、スイマセン
なんだか最近、良いこと無いな……

Q10. それは俺のことも知っているということですか？

「この近辺の学生の顔が全部わかるって？ 何でそんなまた……」

優希が驚いたような反応をするのを、柚は呆れたような目を向ける。彼女からすれば、『その程度のこと』なのだろう。

「この近辺の風紀の乱れは凄まじい。嫌でも風紀を乱す可能性の高い学生のことは自然と覚えるさ」

柚はサラッと難しいことを言っただけ。もちろん、周囲からすればとんでもない能力なのだが、彼女自身、その能力の自覚は特になさそうだ。

それを聞いて店長が適当な椅子に腰掛け、

「そう、それだけ柚ちゃんはこの町がすきなわけ」

微笑むと、壁に立てかけてあった十手を手渡した。

何やってるんだよ店長、またそれで暴れられたら……

「心配性ね、優希ちゃん。大丈夫よ、話のわかる子だから」

どうやら顔にまた出ていたらしい。何だろう、そんなに俺の考えてることって分かり易い？

店長は優希の方向を向いて首を縦に振ると、

「俺禁止、私といいなさい」

恐らく完璧に考えていたことを読んだ発言をする。

そして、柚のほうへ向き直り、

「ねえ、柚ちゃん。ここでバイトしない？」

早速勧誘。風紀委員長にその勧誘はありえないって。

風紀乱すから立ち寄ったんでしょ？ だったら無いから、暴れられる前に止めておけて。

「……」

「そうね、柚ちゃんのサイズだと……この辺かしら？」

店長は答えを待たずして自分のロッカーの中に掛けてあった無数の衣装のうちのひとつを取り出すと、嫌がる柚を押さえつけ、無理やり着せる。

五分後、店長はやっこの思いでそれを柚に着せた。

「可愛いじゃない、どう？ これ！」

えーと、良いと思います。

柚はその衣装に困ったような表情を浮かべている。見た目はどこにでも居そうな女の子の格好だが、それだけで十分かわいらしい。なのに、学ランはもったいないぞ。

「良いんじゃないでしょうか？」

優希は社交辞令よろしくの答えを店長に返す。

が、店長はその答えを特に聞いている様子も無く、質問だけしてそのまま柚で遊び始めた。

「店長、閉店10分前です!」

一人の定員が、店長に知らせる。 ああ、もうこんな時間だったのかと店長は柚をその場に放置し、表へ向かった。残された柚は、優希をじっと見つめ、

「ねえ、何で男子校に居るの?」

質問を飛ばす。 まずいな、下手にサタンとか何とか言ったら暴れるかも……?

ここはあの時決めた設定でいいのか……?

「うーん……俺さ、性同一性障害者って奴なんだよ」

「そういう設定なのは知ってる。 あの高校の校長のことだし、“可愛いからOK”って変換するのが正解だよ。 現にあの学校の白銅葵もそれで教師をやってる。 高い能力はあるけど、性格の問題ではかの学校の教員採用試験に落ちた先生だからね」

A10. 答えはまたの機会に

……マジか！

確かにあの先生、性格に問題ありなんだよな。教員採用試験、今まで受けたの全部女子高らしいし、それが原因か。

と、優希は勝手に納得する。

確かにあの先生の性格で教師が勤まるわけも無ければ、バイト禁止の学校のはずなのにメイド喫茶でバイトしていないと補修を増やされるこの始末。

「あーそうだね、あの先生は何で教員採用試験受かったのか不思議だよ。俺にはサッパリだし、さっき聞いた“可愛ければOK”とやらなのかね」

それならば納得できる。白銅先生、顔は良いんだよな。そして好調はそんな先生に甘い。

「ああ、そうだよ。……ッ！」

突然の出来事だった。柚は苦しそうに胸を押さえ、

「発作だ、ボクは帰らせてもらおうよ」

それだけ断りを入れると裏口からさっさと出て行ってしまった。何だか、苦しいというより見られるのがいやなようにも見えなくは無かったが……？ まあいい、彼女にまた会ったときに聞けばいいだけのこと。

そういえば、サタンはどこ行ったんだっけ？

優希は自分の思考を遡り、自分で説教して追い払ったことを思い

出した。

「ああ、そうだった。さて、閉店前数分サボったら店長が怖いし、表の片付け手伝うべきかな」

優希は小さくつぶやくと、表へと手伝いに出た。

「疲れた〜！」

ベッドに寝転がり、優希が吼える。

本日のメイド喫茶でのアルバイト、総売り上げ550万円。客数不明、恐らく1000以上来た。優希のバイト代、12万円。

凄まじい数値なのだが、優希はいまいち実感を感じなくなっている。金どころではない、この体を元に戻すにはどうすればいいのか。それが今現在の課題だ。

サタンを説得する？ いや、無理だろう。あの頑固な魔王の事

だ、全面拒否するに違いない。

自分で魔術を解く？ いや、技術の無い俺では無理。

「同じ境遇の奴って居ないから……居たら助言もらえそうだけど……」

A10. 答えはまたの機会に（後書き）

時間無かったので短いです
スイマセン

ルシフェル

同じ境遇の奴、居るわけが無いよな。　リベラルが男性不信で俺を女に変えただけで、リベラルのような悪魔が地上に出てくるとも考えがたい。

それに、居れば俺のように隠れているだろう。　見つけるのは容易ではない。　まあ、どうでもいいか。

今夜はよく……眠れそうだ。

優希が大あくびをしながら夢の中へと落ちた頃、彼女が動き出していた。

大きなビルの上から。　長い黒髪を束ね、鎧ではなく黒いマントを羽織、その紅の瞳で周囲を見渡している。　その手には、大きく峰と刃の中間地点で口のように裂けてだらしなく舌を垂らす大鎌。　見るからに魔王と言うその装備の人物には、実際魔王であるとすれば不自然な部分が多々存在した。

まず、背が低い。　そして、

「大臣、リベラルの居場所は割れたか？」

声が妙に高い。

「この地点より南へ約1KMの地点に御座います、ルシフェル様。　準備はお済で？」

「ああ、準備はとうに終わっておる。　行くぞ、歴代最強を超えに」

その風貌は、リベラルにも似た美少女という美少女だった。　血縁関係に当たるのだ、当たり前といえば当たり前。

そんな彼女の行く手を、一本の巨大な十手が阻む。

「何しに來たんだい？　ボクの許可を得ずにこの町で暴れるつもりなら、風紀を乱したとして君に制裁を下さざるを得ないな」

祁答院　柚。　地元最強の、風紀委員長にして、この町を最も愛する人間。

「そうだな、私は暴れるつもりなど無い」

ルシフェルの言葉に、柚は耳を貸さず攻撃を開始する！　だがそれをルシフェルはいとも易々とよけきると、その高いビルの上から躊躇うことなく飛び降りる！

「人間では追っては来られるまい」

ルシフェルの油断は、簡単に打ち消された。

高さ100mはあろうかというビルの屋上から、柚はルシフェルを追い、躊躇うことなく飛び出したのだ。　常人であれば、地面に落ちて即死が良い所。

「死ぬ気か！」

「君を殺す気さ」

柚はその十手の先を、ルシフェルの喉元へと突きつける！　だが、ルシフェルはそれに対し、不敵な笑みを浮かべ――

「燃え尽きるがよい！」

右手を柚に差し出し、その手のひらから爆炎を放つ！ 柚は直前でルシフェルを地面へと蹴落とすと、軽やかに民家の屋根の上へと着地する。

あの程度で死ぬようには見えないな……

『油断したか、柚？』

柚の背後から、やさしい声がする。 女性のものだ。

「ああ、全くだよケルプ。 ルシフェルがあそこまで強力とは聞いてないし、そもそも君たち天子や悪魔の存在を知ったのも今日の夕方だ。 順応するほうが至難の極みとでも言うべきものだと思うけど？」

柚は不機嫌に背後の声に返す。

『そうよね、悪いな。 無茶言って』

背後の女性の声が、男性のものへと変化する。

「いい加減教えてほしいんだけど、君はいったい何なんだい？ 男か女か、その名前も」

柚は苛立つように言い放つ。

一方、ルシフェルは目標地点、リベラルの元へと向かっていた。屋根の上を駆け抜け、飛び移り、音も無く、目にも留まらぬ速さで。 目の前に、屋根の上に座り込む黒髪の女……！
リベラルだ！

彼女の思考は瞬時に捨て去られ、彼女は人の形を模した悪魔という名の怪物へと変貌する！

瞳孔が開ききり、その手の鎌はそれに呼応するようにして『ギギギ』という泣き声を発する。

ルシフェルがリベラルの真横まで迫ったそのとき、ルシフェルの視界からリベラルの姿が消えた。それとともに、ルシフェルの視界がガクンと揺れ、凄まじい重圧によって体が屋根に押し付けられる！

「こんな夜中に、何の用だ？」

屋根へ押し付けられたルシフェルの背から、その問いが投げかけられる。

リベラルはルシフェルの背に腰掛け、ルシフェルの持っていた大鎌を足で抑えていた。

ルシフェル（後書き）

何だろう、最初はコメディー描いてた筈なのに……

バトルシーンがえげつないものになりそうな予感。ギャグ混ざってればバトルありかと思っただけど、どうも私の技量ではそういうわけには行かないようです

今回は少し時間が多く取れたという事も有って、わずかながら丁寧に書いてみました

リベラル

「優希の持つ魔力を狙った魔人か？」

リベラルはその瞳に殺気をみなぎらせ、ルシフェルに問う。もちろん、リベラルはルシフェルが血縁関係だということなど知る由も無く、はたまた自分が歴代最強などと呼ばれている事も一切知らない。

歴代最強という称号は、彼女が魔界を離れてから与えられたもの。そして、その称号は666代目の数字によるものが理由のほとんどもを占めていると、ルシフェルも考えていた。

だが、ルシフェルは突然の出来事に、啞然とする。歴代最強の『称号だけ』のはずなのだ。

実際にここまでの実力だという事など、知らない。無理なこじ付けだと思って居た。だがこの女……実際に強い！魔力の潜在量もさることながら、その五感の全てが、異様なまでに卓越しているといっても過言ではない。つまり、歴代最強というのは、あながち嘘ではないかもしれない。

「どうした、答えるくらい返してはもらえないか？」

「……リベラルの魔力を狙った、歴代魔王の一人だ」

ルシフェルはその鎌を持った手を、リベラルの放つ異様な重圧に逆らい、振りぬいた。たったそれだけで凄まじい疲労感。

リベラルは強い。死を覚悟すべきか……。

「へえ、私の弟の子供？ いや、それにしてはなんか違うな。面影もないし、どっちかといえば私似だ」

リベラルはルシフェルへと歩み寄る。警戒する事も無く、一步確実に。そして、ルシフェルが鎌を振り下ろすが、リベラルはそれをあろうことか左手で受け止め、ルシフェルの顔を覗き込む。そして、数秒間の沈黙が二人を支配する。

「そうだね、女の子なんだ。道理で、部下を従えていないわけだ。君も弟か兄が居るんでしょ？」

リベラルは小さく問い、ルシフェルはその問いに黙り込んだ。答えの代わりに、手のひらから巨大な青白い爆炎が放たれる！リベラルが防御体制をとるはず。実力がこれである程度わかる。そのはずが、リベラルはそれを真つ向から浴びた。

火傷は一切負わず、煙の中からリベラルは姿を現す。さすがのルシフェルも、この現実には唾然とするほか無かった。

確かに、手加減はした。周囲まで焼かぬようにした。

だが、どういうことだ？ 火傷はおろか傷ひとつ負っていない？ 魔術を放った様子も無ければ、その場から動いた形跡すらない。何がいったいどうなっている！

「……ッ！」

「無駄だよ、魔族の魔術は私には通用しない。生まれつきの体質だね」

リベラルは、ルシフェルのことを観察するかのように眺め……次の瞬間、何かが起こった。いや、何者かの攻撃を受けた。

巨大な火柱が地面から出現し、それは天へ伸びると黒く冷え塊巨大な岩石に変化する。

「やれやれ、魔王退治にきたら危険な女の子が二人……？　いたいた！　どういことだ、あの馬鹿王め、魔王は男って決め付けてやがんな」

男の声が、ルシフェルの背後から。そして、ルシフェルが後ろを向くと同時、『ガギンッ！』という金属音。

リベラルが、黒い人影の剣をその手の大鎌で遮っていた。

人影は不敵にも笑みを漏らし、剣を鞘へ収めると、リベラルの大鎌に右腕を押し当て炎を放つ！　だが、リベラルはそれに反応し、黒いガラス玉を炎へ投げ入れる。

すると、ガラス玉は小さなブラックホールのように炎を見る見るうちに吸い込んでいく！

「だからといって、君も弱いと決め付けているようだね」

リベラルが人影に返す。その人影は、茶の短髪に兜を被り、鎧を身にまとった、勇者といわれて誰もが真っ先に想像するであろう姿の青年。

そして、その手には柄に宝玉のはめ込まれた剣。この男は正しく……勇者！

「いいや、予想以上だ。　楽しませてくれよ」

それも、戦闘狂……。　柚と気が合いそうだ。

魔王VS勇者

さて、一体どうした事か……。勇者に襲われて強姦されそうになったときのマニュアルでも読んでおくんだった。

大臣が読め読め五月蠅かったし、今となっては勇者の対処法を知っておかなかったことに後悔するしかない。

リベラルが馬鹿げた考えを浮かべる最中、勇者は動いた。

その手に握る大振りの剣でリベラルめがけて切りかかる！　だが、リベラルはそれを自分の顔ぎりぎりのところで反応し、『風』によって吹き飛ばす！

が、勇者はニツと笑い、空中に光の足場を展開するとそれを蹴り、再びリベラルへと迫る！

勇者は所詮勇者……。魔術は初歩的でお粗末だ。光の壁を足場にするか……。、

「レベルの低い！」

「そりゃどうも！」

今度はリベラルが真っ向から勇者の剣を大鎌で受け止める！　…
…重い、受けきれない！

リベラルの小さな体は軽々と吹き飛び、民家の屋根へと衝突する！
衝突した屋根には大穴が空き、リベラルは家の中に投げ込まれた。

だが、住人は居ない。今この時間、この辺一体は、リベラルの作った仮想空間であり、そのプログラムを書き換えるのはリベラルの自由だった。

だが、プログラムの書き換えが……。出来ない？
そうか、あの魔王娘の所為か！

「あー痛たた……。レディーには優しくしないと駄目だよ」

リベラルは小さく呟くと、空を舞い、勇者の目の前へと降り立つ。さすがに、勇者も驚いたような表情を浮かべ、リベラルを注視する。だが、その驚きも長くは続かず、勇者は次の攻撃へと移る。剣を構え、それに炎を纏わせる。

それを見て、リベラルは鎌を握り締め、黒い霧を身に纏う。両者共に、フルパワー。

空が白み始め、勇者のその顔がうつすらと見え始める。日が昇りかけ、太陽光が二人を照らしたと同時に、勇者が動く！

目にも留まらぬ速さで間合いを詰め、リベラルへと必殺の一撃を当てに行く。それに対し、リベラルも鎌を手にした。

両者後10メートル、8メートル、7、6、5、4、3、2、1メートル……。そして……。その強大な力同士が互いにぶつかり、^{せめ}闘ぎ合う！

そしてそれと同時に。太陽が……。昇りきると、白い煙が周囲を覆い、勇者の姿が消え去った。

「えーとだな、何事だ？」

そして、白い煙幕が消え去り、視界が開けると、リベラルの目に映ったのはついさっきまで勇者がいたところで大の字になって寝ている小さな子供。

生意気真っ盛りな年頃と言えば良いのだろうか？　だが……

「何だ、この子供は……」

思わぬシルフェルも小さく呟く。が、リベラルには聞こえていなかった。

「ねえ、君の名前は？ サタンじゃない名前、あるでしょ？」

リベラルはルシフェルに問う。

「……ルシフェル」

「そう、分かった。 強くなりたければいつでもおいでよ、妃と一緒に鍛えてあげるから」

そういうと、リベラルは小さな子供を抱きかかえ、足で二度屋根をタップして空けた穴に飛び込んだ。

「歴代最強……強いな。 大臣、一度引いて体勢を立て直す。

私はしばらくこの世界に留まる故、契約者を探すぞ」

『了解しました、ルシフェル様』

ルシフェルは自分の影に言い放つと、その場に溶ける様にして消え去った。

嵐が、一時の間去った。

いい朝……？

何だろう、久しぶりにぐっすり眠れた。そして、寝覚めもいい。そうだ、サタンが俺を女にしたのは長い夢だったんだ。そんな事を考え、優希はまぶたを開き、起き上がる。

「そんなわけ……ないよな」

そして、待っていたのは嫌な脱力感ともう一個。横で寝ている小さな子供。

あれ？ この子供、どこかで……！
思い出した！

「駅のホームで不良に絡まれてた俄鬼！」

優希の声に、彼も目を覚まし寝ぼけ眼で優希のほうを注視した。そして、もう一度まぶたを閉じると再び彼は眠りに落ちてしまった。

えーと、どうすればいいの？

対応に困るが、一度状況を整理しよう。朝起きた、寝覚めが良かった、横に子供が居た。つまり、

「まだ夢の続き……？」

そんな事をつぶやくと、優希は再び睡魔に襲われ夢に落ちた。

「これが……リベラルの契約者か……。中々可愛い契約者だな……」

それを、ルシフェルが横で見ていたことなど、優希は知る由もない。

「リベラル、中々いい契約者を見つけたものだな」

「でしょ？ 優希の寝顔って可愛いんだよね。私はその横で添い寝したらベッドからたたき出されるけど、何でこの子供は平気なんだろう？」

そんな理由など分かりきっている。だが、リベラルにはどうしてもそれが分からない。

力の大きな魔族特有のことなのか、魔王だからなのかは不明だが、彼女にはそれを理解する『常識』など無い。つまり、デリカシー皆無なのだ。

そして、恐らくこれは魔王特有の特徴。『相手の迷惑を考えない』、判らない。

「うーん……」

優希は二度寝から目を覚まし、ベッドから起き上がる。もちろん、横にはリベラルの姿が。

「……戻ってきたの？」

「ああ、答えが分からない。私には、理解できないんだ。体力など、いくらでも回復させられる。死んでも、時間がたっていなければ生き返らせられる。だが、何故それを人間は嫌う？」

リベラルの思考に、優希も少し考える。

確かに、少し言い過ぎた節もある。それに、こいつも氣遣いのつもりで言ったんだ。責める事もできない。

「人間は、今が大事なんだ。体力を使い果たして寝る。寿命が尽きて死ぬ。それが大事なんだよ。体力が無くなれば魔法で戻して、死んだら生き返らせることが出来る。けど、人間はそれじゃ駄目なんだよ。いや、駄目になるんだ」

リベラルはその答えに、疑問符を浮かべるがすぐに理解したらしい。

「殺しても生き返らせられるという思考が芽生えるというわけか」

うーん……チョット違う。けど、あながち間違っているわけでもないか……。

「まあ、そんなところだよ。で、いい加減俺を元に戻してはくれないか？」

優希の言葉に、サタンは冷笑し、

「断る」

即答した。

……**疲れた**

さて、今日の予定を確認しよう。

月曜日で、もちろん学校があって、一時間目国語。二時間目、

数学。三時間目……体育。四時間目、保険。昼休みがあって、

五、六時間目は選択科目で、あろうことか体育が二時間続き。

駄目だ、鬱だ。もうこの時間割見ただけで疲れてきた……。

<ピンポン>

早すぎるだろ！ 俺……今起きたところだぞ！

いつもの様に突っ込みを入れつつも、パジャマ姿のまま玄関へ。

育美も今は家に居るが、基本的に「辻本さんでしょ？」というこ
とでして。

俺が出る事になっている。

「ハイハイ……」

ノブに手をかけ、玄関の戸を開く。そこには案の定、辻本の姿。
そしてなにやら、赤面しているのはどういふことでしょうか？

「あれ？ どしたよ、今日は妙に大人しいね」

思わず口を突いてその言葉が飛び出す。すると、

「いや、いつもお前そんなパジャマか？」

「うん、……そうだけど？」

「乳首のところ、……浮き上がってるぞ」

思いもよらない答え。　思わず優希は顔を真っ赤にして辻本を本気で張り倒す！

バッチーンッ！　と言う音と、それをモロに受け、よろめく辻本。流石にやりすぎたと思ったが、相手が「辻本だから」で割り切れるのは不思議だ。

親友っていいね。　いや、現実的な見方をすると言引に主の弱みを握ってつれまわす下僕1号。

優希はカリカリと頭を掻き、

「チョット待ってて、支度するから」

家の中へと戻っていった。　その言葉に、辻本は首をかしげ、

「あいつ、行動と口調まで女になったな……。　本人、気づいてないだろうけど」

小さくつぶやいた。

いつもどおり支度を済ますと、駅へ直行。　電車に乗って学校へ。HR前に到着していれば、あのゆるい学校はセーフだ。　なんとまあ、ゆるい校則。　だが、受験などは相当きつかった。　面接試験なしで、『明日は受験のテストです』の突然テスト。

明らかに学力面を重視した学校で、近所では不良校の扱いを受けていたが、その学校を出ればまずその後の進路に困る事は無い。

HR開始直前。　優希は辻本と教室に滑り込む。

待つ事30秒。

「今日は担任の鬼山先生は不慮はくどうせんせゆじょうの事故でお休みです。変わりに、私がHRを行います」

来たのは、担任の鬼山おにやま 十三郎とみろうではなく、学年顧問の白銅葵だった。優希の顔から一気に血の気が引いた。

それとは対照的に、赤碕は妙に嬉しそうだ。ついでに言うと、白銅先生もなんだけどさ。

「では、休みは……鬼山だけか。では、時間割の変更を先に言っておこう」

何だか、嫌な予感。

「選択授業が一、二時間目に来る。以上だ」

鬱だ〜!

白銅先生の陰謀……ではなく、学校側の諸事情により、一時間目二時間目、三時間目まで立て続けに体育。何だ、この体育会系男子が大喜びしそうな時間割は!

仕方なく、優希は教室で着替えを済まそうとする。だが、

「優希君、チョット待ちなさい。こんな発情期真っ盛りの男子の中で着替えるのは危険よ。私の更衣室で着替えて」

白銅先生のご好意(?)によって、現在着替え中。仕切られた箱のような更衣室のカーテンの隙間から、白銅先生のレズビアン万歳と言いたげな目が、優希のことを舐め回すかのようにして監視する。

先生……覗き対策でしたら、外を見てはいただけないでしょうか……?

と、まあ……そんなこんなで俺はこれをつける羽目になったわけだ。

スポーツブラって奴。聞いたことしかないし、実際に見たのは今日が初めてだ。どうも、リベラルが俺の荷物に紛れ込ませたらしい。

さして、……これ、どうってつけるのさ? こう……かな?

優希が苦戦するさまを、白銅先生は監視する。あの……

「やってはいただけないでしょうか?」

「よし来た!」

いや、よし来たじゃなくてさ！

「それにしても、優希ちゃん……胸小さいわね」

スイマセンね、賓乳で。これ以上大きくする気もなる気も有りませんよ。

だけど……なんだろう？ この間より、大きくなっている気もしなくは無い。

そんな事に気を取られている隙に、白銅先生はブラを付け終え、更衣室から出る。……と、見せかけて……！

優希の体操着のズボンに手をかけると、それをそのまま引き摺り下ろす！

「キャアアア！」

優希は思わず悲鳴を上げた。とっさに口を塞ぐも、白銅先生の満足げな顔が視界の端に映る。

ズボンの下には、ボクサーパンツ。

白銅先生はまじまじとそれを凝視する。

「あら、優希ちゃん……男物ね」

ええ、女物穿く勇氣なんて、純情ヘタレの俺にはありません。

つか、何です？

「その手に持ってるのって……」

「まだ未使用だから問題ないわよ」

そういう問題ではなくて。その手に持ってるのって、オンナモ

ノデスヨネ……？　それも、お尻のところ、熊さん柄の。

優希は更衣室の角に縮こまる。だが、その抵抗も白銅先生の怪力の前には無意味に終わった。一体全体、先生のこの細腕のどこからそんな力が出てくるのだろうか？

そんな疑問と、男として何か大切な物をなくした喪失感で、頭の中がいつぱいになる。　が、気を抜くことは許されなかった。

白銅先生のその手には、第二波。ブルマが握られていたのだから……。

10分後。

なんとかブルマは阻止した。　だが、問題は下着だ。体育の授業が始まって、しばらくして、

「優希、何で女物のパンツ穿いてんだ？」

辻本に問われる。

何でこいつと選択科目が同じだったのやら、今となっては本気で後悔するしかない。

てか、

「何で分かった？」

「体操着に跡が出てんだよ、ほら」

辻本が、優希のお尻の所にくつきりと浮かび上がった布地のラインを指して言い放つ。

ほほう、そう言うことか。　辻本、覚悟は出来ているのだろうか？　そんな目で、どうやら俺はまた見ていたらしい。　辻本は黙ると、準備運動を再開した。

準備運動終了後、

「では、今回は……何がいい？」

選択教科、体育担当……白銅葵先生が……生徒に問う。
良いのか、この学校こんなんで。

「先生！　ボクと保健室で……」

「却下！　次！」

毎度の如く、凄まじい剣幕で生徒の誘いを受け流す。　　というか、叩き潰す。

そして、その後先生は何かを思いついたように手を叩き、

「マット運動にしましょう！」

目を輝かせて言い放った。

始まって早々、大波乱の予感。

大波乱だ！

体育開始、30分。優希は必然とでも言うべきか、辻本と組み、マツト運動をやっているところだ。

二人一組になって、三点倒立だの、バク宙だのを、辻本は次々とこなして行く。確かに、こいつは凄い。こいつの運動神経は、相当いい。

そんな事を考えながら、授業を半ばサボり、まともにやっている連中を眺めているときだった。

黒髪の学ランを着た男が、辻本に続きバク宙を三連続で決めて見せた。

おお、スゲー……？ あれ？ 学ラン？

次の瞬間、優希の脳内に見覚えのある姿がよぎる。だが、こいつは男。で、

「その君、どこから入ったの？」

白銅先生が、彼を呼びとめ質問攻めにする。学ランは、この学校の制服ではない。

それに、あの男、ウチの学校の生徒じゃない。

「ああ、馬宮優希に用があつて来た。優希は居るか？」

それで、俺指名ですか、ありがとうございます。

白銅先生に手招きされ、優希はその男の前まで歩み寄る。うほっ、いい男。凄いイケメンってやつではないですか。

顔の輪郭も、目の色から、何から何まで、

「……誰？」

そう、『最近会ったばかりの誰か』に似ている。そして、

「ああ、そうだ。話がある、早引きして来い。表で待ってる」

それだけを言い残すと、彼はその場から立ち去った。
まさか、……今のって……。

優希が思考をめぐらす中、

「優希ちゃん、早退を許可します。彼氏待たせちゃ駄目よ、甘えられなくなるからね」

白銅先生、あっさり早退許可くれて良いんですか？
授業の出席は？ 単位は？

「出席も単位も、適当にごまかして置いてあげるから」

それで良いのか、この教師！ つーか、終わったな、学校。
そんなこんなで、着替えを済ませ、いざ校門へ。そこにはあの学ランの姿が。さっきは気づかなかったが、腕にはあの風紀の腕章。

何かの漫画で見た覚えのある顔だな、オイ。

「遅かったじゃないか」

「そりゃ、着替えに手間取ったからな」

優希の答えに、彼は冷笑する。そして、ポケットを探るとなにやら手帳を取り出し、腕時計とあわせてスケジュールの確認。何だ、その手帳。

黒地に銀で羽の模様がプリントされている。どこで売ってたよ、そんなもん。

「そうだね、立ち話もなんだし。どこか行こうじゃないか。そうだな、ボク行きつけのオープンカフェなんてどうだい？」

その言葉の直後、

「俺の優希に気安く話しかけんなよ！」 「テメー何モンだ！ チョット面かせや！」

校舎から騒がしいブーイング。彼がそれに一瞥くれてやると、そのブーイングは恐怖によって収まった。何だよ、どんだけ凄い気迫？

彼は優希を連れ、学校の近くにあったドーナツ店へ向かった。

そして、店の木でできた扉をくぐるとき、それは起きた。

ノブに手をかけ、扉が開き、足を店内へ踏み入れたとたんだった。彼の髪が一気に広がり、それに伴って背が縮む。そして、カウンターへ向かって

「ビターチョコの奴二つと、ミルクティーのセット。角砂糖、5つ入れて」

その高い声で、注文する。

優希の横に居たのは、黒髪の学ランを着た風紀の男ではなく、見覚えのある学ランを着て風紀の腕章をつけた、黒髪の小さな女の子だった。

祁答院 柚木

「まさか、柚？」

その問いに、柚は小さくうなずく。そして、カウンターに財布から小銭を出すと代金を支払い、ドーナツとミルクティーを受け取った。

ドーナツのひとつを、優希に手渡す。

「そうだよ、ボクだ。ちなみに、男のときは柚木って呼んでよ。区別に困るからね」

詰まらなさそうに周囲を眺め、柚が言い放つ。

周囲の監視をしつつ、ドーナツをかじる柚。それを見かねてか、

「口の周りにチョコレート付いてるよ」

優希がティッシュを渡す。柚はそれで口を拭うと、ゴミ箱へと投げ入れる。

そして、次の行動は予想外だった。頭に手をやると、小さなハムスターらしき生き物が、柚の手へと飛び移る。

思わず優希は身構えるが、柚はそれにドーナツの欠片を手渡すと、それはその欠片をほおばった。特に警戒する事も無く、そのねずみのような生き物は、ドーナツを口に詰め終えると柚の肩へと飛び移り、髪の毛の中へと姿を消した。

それを満足げに見送ると、

「さて、本題に入ろう。君には大魔王、サタンが憑いている。ボクは、智天使が憑いている。で、さっきの様に変身して見せ

たわけだけど、君は一体なんだい？」

柚の問い。それは、

「答えられない」

「だろうね」

優希の回答を、興味が無いように流し、

「じゃあ、昨日の夜。サタンが二人居た。……どうということだい？」

柚の問いに、優希は答えられなかった。

……昨日の夜、俺は寝てた。爆発音でもあれば目も覚めただろうが、爆発音さえ無かった。

どうということだ？ サタンが二人って、何がどうなっている？

「どうということ？ 言っている意味が分からない。俺は昨日寝てたよ、久々によく寝れた」

「そう、それは良かったね。で、分からない。知らない、と言う事でいいかな？」

ええ、そんな感じです。と、優希は静かにうなずくと、

『嘘を吐いていない、嘘は無いようだね』

柚の背後から、男の声。その声は、柚の後ろの空間から発生し、優希の耳にダイレクトに届く。

たとえるなら、イヤホンをして聞いているような感覚に近い。

だが、その肝心の耳はと言うと、周囲の雑音波を感知し、その音には一切触れることなく無駄な情報を集め続けている。

つまり、テレパシー。

「嘘を吐こうが吐くまいが……ケルプ、君の敵だろうか？　どうするんだい、一応ボクは武装してきているけど？」

まさか、こいつここで暴れる気か！

優希が身構えるが、

『いや、ここでの戦闘はマズイ。時と場所を選んで暴れる、今はそのときでもなければ、場所も巻き添えの出るであろう店先。犠牲者が出るのが嫌なのだろう？　だとすれば、今暴れる事はお勧めできない』

その声が、ダイレクトに脳に響く。

だが、柚は袖から十手を取り出すと、

「こいつを野放しにするのも、犠牲が出るだろう？」

ケルプに対し、攻撃的に言い放つ。

それもそうだ、サタンに憑かれている以上、俺は厄災を呼び寄せる。そんな危険なものは、とっとと始末したいと言うのが人間だ。放射性物質がその辺に転がっていれば、大騒ぎしながら処理するようなもんだ。

ただ、柚に関しては人間とモノの区別などつくとは思ってはいけならしい。本気で、戦闘体制に入っている。

皮膚がヒリヒリするような殺気を放ち、男の姿へと変身する。

「チョット待て、それ反則！俺今女！」

「生きるか死ぬかだ、喧嘩にルールなんかいるのかい？　ボクは今男だけど、元は女さ。問題ないよ」

いいえ、問題大有りです。　そもそも、基準のパワーが違うだろ！

勇者様再び

「さあ、覚悟はいいかい？」

“柚木”が、優希に言い放つ。

そんな、覚悟はいいかって聞かれて、いいわけないだろ。

前回は柚に天使も悪魔も憑いてなかった。それでどうにか出来たようなもんだ。その柚に、天使が憑いているとなると厄介だ。

それも、悪魔とは違う性質の魔力で悪魔とは違う魔術を扱えば：

。その結果は容易に予想できる。ほぼ確実に、悪魔の持つ魔術のほうが撃ち負ける。

その結論を導き出した理由は簡単。天使が悪魔を追って人間界まで出てきた。それも、そこまでの上級でもない天使が、単体でそれはつまり、その天使一人で十分事足りるからだろう。つまり、リベラル一人程度、智天使一人で十分だという神の判断なのだろう。

「覚悟がいかと聞かれて、覚悟できていますって答える奴は少ないだろうね」

「うん、それもそうか」

その言葉の間に、柚はその十手に蛇のように炎を這わせ、迫り来る！ その瞬間、一瞬だけ周囲の景色にもやが懸かると、通行人が全て消えた。

そして、柚の背後に白髪の男とも女ともつかない顔の人物が、姿を現す。恐らく、ケルプと呼ばれている智天使。

その姿に優希は氣をとられ、

「どうしたんだい？ 隙だらけじゃないか」

目の前にまで迫り来ていた柚の十手に対し、優希はとっさに腕を盾に防御するが、一撃が……異様に重い。

その一撃は、優希の小さな体を軽々と吹き飛ばすと、店のガラスへと叩きつける！ それを受けたガラスは一瞬^{たわ}撓んで砕け散る！
優希も、やられっぱなしでは無い。

「チョット痛いかもしれないけど、我慢しろよ！」

右手を倒れたまま柚木に向けると、砕け散ったガラスの破片の全てが、柚木へと猛突する！ が、柚木はそれを十手で全てなぎ払うと、ガラスの破片に紛れ、接近していた優希に対し、再びあの馬鹿に重たい打撃を叩き込んだ。

が、今度は優希も耐える。魔力の大部分を手足に集中させ、衝撃を吸収するとそれを今度は柚木の十手に対し、打ち放つ！

「くう……」

十手を握っていた右手に激痛が走り、柚木はその手の力を弱めてしまったのだろう。十手はその手から吹き飛ばされ、空を舞い、優希の後ろの店の花壇に突き刺さった。

「おいおい、何だ？ 面白そうな事してるじゃねえか。俺も……混ぜてくれよ？」

手を押さえる柚木と、優希の耳に、男の声が届く。

その直後、太陽光が暗闇に閉ざされ、無数の星が空を彩る。そして、月が太陽を押しつけ空を支配する。

そして、月を背に、そこにその姿があった。

剣を片手に、月光を浴びるその人の姿が……！

「さあ、パーティータイムだ」

勇者と書いても変態と読む場合がある

月明かりを背負う男は、二人をその蒼い瞳で眺めると、大きくため息をついた。その最初の凜としていた表情も、半ば投げやりなそれへと変わる。

「どーしてだろ、男が女襲うってシチュエーション……萌えないんえだよな。俺って」

どうでもいいことを口走り、勇者は動く。動く姿を、視認する暇も与えず、

「つーわけでさ、チョット君。倒れててくれよ」

一閃。視界から消えたと思った勇者が、柚木の後ろに居た。

そして、それに気づき、攻撃を試みようと、後ろに十手による打撃を叩き込もうとした瞬間の出来事だった。

柚木の体が、不規則に数度揺れた。そして、意識を失い……地面へと膝を突き、倒れこむ。

「……マジ……かよ」

魔王の比じゃない。それに、こいつの動きすら見えなかった。一体、俺はどうなるんだ？

「さて、可愛いらしいお嬢さん。どうです、私と一ぱてゅっ！」

やっぱりそういう思考か！

優希は無意識に自分に近づいてきた勇者の腹に蹴りを入れると、

距離をとる。

中々今の蹴りは効いたらしく、勇者はその場にて苦しみ、のた打ち回っている。が、それも長くは続かなかった。

常人であれば、骨は折れただろう。辻本であれば、どうかは分からないが、今の蹴り……

「何で、平気な顔してられるの？」

そう、威力は異常値に達していた。魔力を右足に集中し、蹴りを放った。

魔力はもともとその物質の持つ特性を色濃く発揮する力が備えられ、筋力も、足の硬度も人間の受けて平気でいられるわけがない威力……。

「なんでって、そりゃ、アレだろ」

勇者は突如、まじめな顔つきになると、

「可愛らしい女の子に蹴りを入れられるのが主人公の役目で、それを怪我也せずには受けるのは主人公の義務だからだ」

変態発言。それも、主人公って何だよ？

超極度の電波らしい……。

そんな呆れる優希の意識とは別に、優希から血の気が一気に引いた。貞操の危険、とやらを察知しているのだろうか。

「で、最後の最後女の子に好かれるけど、エッチな事は出来ないのもお約束だよね」

「俺はそうなる気はない！」

優希の言葉に、勇者は目を見開いて怒鳴り返す。

だーめだ、この勇者。ただの変態にしか見えないし、性格最悪。何だ、この子供みたいなエゴイストは。

「そうだ、貴様。俺の女になれ」

「断る」

本当に駄目だ、白銅先生以上に面倒くさい。

迫り来る勇者に、優希は後ずさる。勇者が一步踏み出し、優希は一步後ろへ引く。

しばらくそのやり取りが続いた。だが、それも長くは続かなかった。

そこで、勇者はついに行動に出る！ 右足を踏み出し……優希との間合いを一瞬にして詰める！

優希は、恐怖を覚えたような顔で、その勇者を見上げる。

「わお、上目遣いサイコー」

黙れ、この外道。

「黙れ、この外道」

その言葉に、勇者は後ろを振り返る。そこには……リベラルの姿が。

「私の妃に手を出すとは、いい度胸だ。死ぬほど後悔させてやる」

破片

「死ぬほど後悔……？　俺を生かしたまま降伏させるつもりか？」

男の姿のリベラルに、勇者は冷ややかに言い放つ。それは、「お前ごときに俺を止められると思っているのか？」とも聞こえなくは無い。

だが、確かにこの勇者は強かった。現に、柚木すら何もできない内に地に伏したのだから。

勇者が離れていく事に安堵したのか、足の力が抜けて優希はその場に座り込む。

「ああ、そのつもりだ。私は特に貴様に対し、恨みも無ければ殺すつもりも一切無い。ただの、防衛だ」

リベラルがその巨大な鎌を、両手に握り締めクルクルと回す。

それは、事情を知らない奴が見たら相当な怪力に見えるだろう。

だが、実際のところは魔力の調整。チューニング

リベラル自身、その多大な魔力を扱う事は、実を言うと苦手だ。

どうしても、強大な魔力を一気に魔術と化して吹き付けている節がある。

対する勇者は、冷笑する。

「そうかよ、今から俺はお前を……」

勇者の言葉が、一瞬途切れる。

「殺す気だぜ？」

そして、次に優希の視界に現れたのはそれとほぼ同時。リベラルに対し、真っ向からその剣で斬りかかり、『ギイイン』という嫌な金属音の共振と共に。

リベラルはそれを大鎌で受け止めると、もう片方に持っていた鎌で、勇者に対し攻撃を試みる。

だが、勇者はそれを振り払う直前で引き、振りぬいた直後。隙だらけのリベラルを狙う！

が、リベラルもそうは甘くない。

黒いビー玉を手のひらに出現させると、それを勇者めがけて投げ飛ばす。すると、そのビー玉はブラックホールの如く周囲にあったモノと言うものがある程度吸い込むと、ヒビが入って割れた。

『パキイイン』という音と共に、ビー玉に引き寄せられていた勇者の体に自由が戻る。だが、それは意味を成さなかった。

勇者の体に自由が戻った直後、体勢を立て直したリベラルの大鎌が、彼の胴体を胸を境にを半分に引き裂く！

鮮血が飛び散り、それと共に周囲の景色にヒビが入ったかと思うと、その景色は砕け散り、元居たオープンカフェの椅子の近くに優希は座り込んでいた。

リベラルが、勇者の死体を踏みつけ、冷笑する。

「こんなところで良いだろう。　優希、帰るぞ。　あの野郎、逃げやがった」

リベラルは苛立ち混じりに、優希に帰宅を促す。　だが、優希の目には、リベラルとは別のものが映っていた。

「ねえ、柚を放っておけないよ。　取り敢えず、家に運べない？」

優希の言葉に、リベラルは小さく微笑むとその場から姿を消した。それと同時に、先ほどまでそこに倒れていた柚の姿も、いつの間

にやら消えている。そこに優希は、あるものをひとつ、見つけ、拾い上げる。

「何だろ、これ……」

拾い上げたのは、目まぐるしく色が変わる小さなガラス片の様な物。だが、ガラス片とは違い、直射日光が当たっているにもかかわらず、その冷たさが消える事は無かった。

破片（後書き）

そろそろ優希が一人で（略^{ピー}）しちゃうシーンでも入れようかって本気で一度悩んでみる

ちよっとしたネタ程度の考えで……

私は一体何がしたいのやらorz

忘れ物（前書き）

ちよつとやりすぎたかな……？

（汗）

忘れ物

今、優希は窮地に追い込まれている。電車に乗って、しばらく。痴漢の手が、優希の内股を弄る。何故こうなったかと言えば、簡単な原因。

リベラルが、袖を連れて家へと飛んだため、優希も急いで追っているのだ。そして、学校の近くと言う事もあって定期を使って電車に乗車。

そして、しばらくして今があるというわけだ。

「んっ……」

思わず、甘ったるい声を漏らす。

そのたびに後ろで息遣いが荒くなっていく痴漢に対し、嫌悪感を抱くが、集中できず魔術による撃退も出来ていない。

最初は、掠っただけだと思って油断してた。それは、俺のミスだ。

だが、そう黙っていたのをいいことに、この痴漢、ズボンの隙間から手をつ込み、股間を弄り、指でつつくところまでエスカレーターしている。

早く……如何にしなければ。こういうとき、女の人ってどうやって対応してるんだろう？

「……ひゃうっ」

何だろ、気持ちよく……なってきた……？ ……いや、断じて違う。絶対違う！

俺は男……俺は男……。

優希は自分に言い聞かせるが、それもすぐにかき乱され、効果を

示さない。防衛策が、全くと言って良いほど浮かばないのだ。痴漢に遭遇するのが初めてであれば、その対処法に関して考えるのも今回が初めて。

さて、経験ゼロでどうやって相手を追い払うべきか……。 「痴漢！」 って今叫んでも遅いだろうし、逆に開き直られて何か大声で言われたら恥ずかしい。

まずいな、頭がトロンとしてきた。考えが浮かばない。私、どんな顔してるのかな……。

ボーっとする事約20分。ようやく電車が目的地へと到達し、優希は急いで電車を下りた。するとその直後。

「イヤー！ 痴漢よ！ 痴漢！」

車内の女性が叫び、その男はあっさりと言って良いほど簡単に、その場にいた他の乗客に取り押さえられた。

成程、すぐにああやって叫べばよかったのか。

優希はボーっとした頭で納得しつつ、火照ったままおぼつかない足取りで帰路を進む。

そして、

<ガチャツ>

家に到着し、鍵を差し込み、回す。更に、ドアノブを握ると体重で引き、戸を開ける。

「どうした、優希……？ 遅かったじゃないか」

それを、リベラルが出迎える。そして、

「具合でも悪いのか？ 顔が赤いぞ……？」

なにやら、相当心配している。 どうも、アレがまだ残っているらしい。

今改めて思うと、帰り道、よく魔物が出なかったものだ。 アレだけふらつき、弱った状態で家へと戻ったのだ。

『弱っている』『今がチャンス』などと考え、襲ってこれれば恐らく、優希に勝ち目は無い。

「ううん……なんでも………無いよ」

優希の問いに、リベラルは目を細め、

「嘘だな、隠し事をしている」

その誤魔化しを見抜いて見せた。 にしても、もっと有意義に魔法というものを使えないのかね、この魔王は。

勇者撃退とか、そういうことじゃなくてさ……。 科学技術より魔術のほうが有能なんだし、嘘見抜くなんて事じゃなくてもっと平和利用してよ……。

「……私……ちょっと寝たいよ。 疲れた」

優希の言葉に、リベラルは細めていた目を見開き、優希の手をとると上の階の優希の部屋へと飛び、ソファ―に寝かせた。 ベッドは、柚が占領している。

リベラルには、今の会話の内容で、優希の容態が手に取るように分かる。

『俺』が『私』に変わった。 つまり、

「女性化している……？ 知らない、知らないぞそんな効果！」

何故だ？ 魔術の術式は完璧に組めていた！

姿だけを変える、いたって簡単な変身術の応用だ。確かに、変身術は元来上級魔術だが、大して上の部類の魔術を使った覚えはない。

使った魔術は中の上。せいぜい姿が変わるだけで、内面に変化を及ぼさないものはずだ！

リベラルはソファアで寝息を立てる優希を見据え、

「……まあ、問題ないか」

言い放った。

地獄と魔王

リベラルは寝息を立てる優希の横で、頭を抱えていた。

非情に……悩ましい。優希が女としているのであれば、私もうれしい。だが、私の組み立てた術式にこのような効果をもたらすものなど無かったはずだ。魔術にミスがあったとすれば、それは術者に跳ね返る。

だが、変身術に限っては、変身させたモノにそのリスクが伴う。つまり、変身させられた優希に、そのリスクが伴う。死という、取り返しのつかないリスクが……。

しばらくして、リベラルは頭を抱えるのをやめると、立ち上がった。

「仕方が無い、地獄へ戻り書物を漁るか」

これが、彼女の出した答え。

時空転送、次元転送の魔術を組み合わせた、恐らく最も高尚な魔術だろう。この魔術があれば、どこの世界のいつの時代のどの場所にでも、物や人を転送できる。

リベラルも最初、この魔術によって人間界へ一度来ている。人間界からの『召還』も、この魔術に当たる。

地獄からの転送は、地獄の大气に含まれる魔術が人間界へあふれ出し、それを抑えながら人間界へ来なければならぬ。だが、人間界に漏れるのであれば、こっちから無理に抑えるだけで簡単に押し込められる。

「さて、術式を展開せねばならぬ。何が……あるのやら」

リベラルは漫画本のギッシリ詰まった棚から、適当に青い耳の無

い猫型ロボットの描かれた漫画を取り出すと、優希の机の上に並べ始めた。

そして、トランプのピラミッドのように積み上げるとその周囲を囲うように再びピラミッドを造る。

「……こんなものでいいか」

その言葉を最後に、彼女はポケットからあの黒いガラス球を取り出すと真ん中のピラミッドの天辺に置いた。そして……

「テトラ………カディアス……ヴェーダプラ……ハイド……リ
バース」

リベラルの言葉に呼応し、そのガラス球は勇者の炎を吸い込んだときのように、リベラルの姿を吸い込んだ。

足が地面から離れ、肉体が剥離される激痛。そして、意識が薄れる……。

「まったく、全身平等に痛む分、生理痛より性質が悪い」

リベラルは文句を言いながら、体を起こし、立ち上がる。多少のふら付きはあるが、得のこれと言ったミスも無い。実際、ミスをしていたら洒落にならないのだが……。

起き上がると、彼女は周囲を見渡し、首をかしげる。

妙だ、魔王城の書物庫へ来たはずだったのだが……。ここに、魔王城が無い……。見渡す限り、森だ。どうやらここだけ拓けているようだが……。

そんな彼女に追い討ちを掛けるかのように、森の中から無数の咆哮と共に、新鮮な肉の匂いを嗅ぎ取ったのだろう。50頭は下ら

ない双頭の狼の群れが、リベラルを囲む。

地獄の魔物は、地上に居るような柔な雑魚ではない。大気の魔力を吸収し、呼吸するために地上の魔物と比べて圧倒的に強大な魔力を有し、その運動能力も魔力により、強化されている。

「間違った考えだったか……これで良いのか、悩みどころだな」

！
リベラルは掌に大鎌を出現させると、迫り来る狼たちを相手取る

肩慣らし

「そうだな、地獄へ戻ってから久方ぶりの肩慣らしだ。上級の魔物の群れを相手取るのも良いかもしれんな。見たところ、Aクラスの魔物……」

リベラルは命知らずにも正面から自らに対し飛び掛った狼の首をその大鎌で刈り取ると、もう片方の頭が体の主導権を無い頭から奪う前に蹴り飛ばす。

欠伸が出そうな肩慣らしだ。最盛期は確かに既に過ぎているようだが、次期に感も戻るだろう。

『ル、ル、ル、ル、ル……』と、狼たちはうなり声ともつかない泣き声をリベラルに対して発する。だが、リベラルはそれを死んだ魚のような半開きの瞳で見据えると、鎌を魔術を駆使して肥大化し、周囲三百六十度を刈り取ってみせる！

大方、これで数が減った。最初の50前後だった狼の数も、半数以下。10匹程度。

なんだ、Aクラスじゃないな。こいつら、Bクラスの魔物だ……。

「全く、準備運動にもならないよ」

体勢を立て直し迫り来る狼たちに大使、リベラルが前に出る。

鎌を構え、寸前のところで目の前の狼に背を向けたと思うと、背後から迫り来る狼の胴体を二つに切り裂き、その勢いをそのままに体を回転させ、目の前の狼の顔面を二つに分割する！

鮮血を噴出し、二匹の狼は地に伏すが、まだその隙間を数で埋めるように狼たちは迫り来る。

「残念な知恵だ。 地上の狼が賢いのは、非力だからなのか」

そう小さくつぶやくと、リベラルは左手を狼の目の前に差し出し、『パチンッ』と小さく音を鳴らす。すると、狼たちはその場で心臓の鼓動を停止させ、地に伏した。

上級魔族は、下級魔族を思いのままに扱える。だが、殺す事ができるのは魔王だけだ。

「さて、君に『命令を下す。 私を近くの町まで案内しろ』」

リベラルは倒れた狼の一匹に、言葉ともつかない音を、浴びせかける。すると、その顔面が二つに切り裂かれているはずの狼は、自分の足で立ち上がると一度泣き声を上げ、リベラルを引率した。

10分ほど、歩いただろうか。 視界が開け、森から抜けた。

そこでリベラルは、目を疑った。 自分の城ではない城が、ひとつ。 目の前に城壁を展開し、城下町を囲っていた。

「一体、何がどうなっている……?」

呆氣にとられながら、彼女は再び狼の耳元で、

『案内ご苦労』

洞窟を風が抜けていくような音を発すると、狼は再び糸が切れた人形のようにその場に突っ伏し、動かなくなった。

さあ、この城壁……門まで行くのは面倒だ。 飛び越えようにも、目立つし、困った。

結局、城壁から入れば入った出不法侵入とみなされるように魔術

が仕掛けてあるらしく、面倒を控えたいリベラルとしては城壁をたどって歩き、門を探す。

そして、何分……いや、何時間歩いただろうか。ようやく、城下町の城門を発見し、二人の見張りの兵に対し、

「その者、城内図書館へ行きたい。門を通せ」

でかい態度で、話しかける。だが、

「ハ？ 何を言っているのだ貴様、ここがハクリネンと知っての無礼か？ 今、魔王様は大切な儀式の最中だ。女はとっとと家に帰って一人で自慰でもしてろ」

あっけなく返される。それに対し、リベラルは面倒くさそうに頭を掻くと、

「そうか、それならば実力行使と行こう。そして、私も魔王だ。

『貴様ら、ここで勝手に殺し合え』」

りばらるのその身の毛もよだつような寒気のする一言が、二人の兵士の耳に入る。すると、兵士は驚いたように自分の両腕を見据え、その手に持った槍で横にいた兵士を攻撃する！

そして、もう一言。

『汝、我が道を塞ぐ者よ、道を我に譲れ』

その一言で、城門が自らの意思を持っているかのように大きく口を開け、リベラルの進入を許す。見張りも、これにはびっくりだ。

『殺し合い止め。見張りに徹しろ』

リベラルのその言葉で、二人は城門の前に立たされ、見張りを再開した。

「さて、魔王と言っていたな。私以外に、この地に魔王は居ないはずだが……どうなっている？」

隊列崩し

リベラルが門をくぐると、突如視界が開け、無数の町人たちの姿が映る。

「どうやら、中々上級の魔術か何かで結界を張っていたようだが……取るに足らない、薄っぺらな結界だ。門をくぐるだけで、結界もくぐれるのだ。」

術をかけた魔族の技量レベルも、知れた。大した奴じゃない。Sクラスの魔物のレベルがあればいいところだろう。つまり、

「何時の間に……地獄は遊園地に変わった？」

リベラルがそう呟くのも無理はなく、明らかに、全てのレベルが下がっているのだ。そして、城下町に結界を張るのは魔王の役目。結界を張っている魔王がこれでは、お粗末だ。

初期レベルで攻め入ってきた勇者は倒せても、中盤の勇者が来れば勇者から見て中ボスクラスでしかない。

リベラルは詰まらなさそうに頭を掻くと、城へと続く中央通のど真ん中を直進する。歩き続け、しばらく経った。

なにやら、ラッパの音と、兵士の行進する音……。何だ、戦争にでも出かけるつもりか？

疑問符を浮かべながらも、リベラルは直進。30秒も無い内に、その音源と鉢合わせた。

甲殻を纏った龍にのった魔人と、それを引率するひとときわ豪華な装飾の施された武器や防具を身につけた人間の姿。……恐らく、こいつも魔人だろう。

「そこの者、何をしておる！ 道を空けよ！」

「丁度いい、私の城を知らないか？　ここから南に下ったところにあったはずなのだが、跡形も無い」

リベラルは相手の命令を無視し、問う。　相手は相手に、呆氣にとられたような表情を浮かべ、

「何百年昔の話をしているのだ、我が国は現在戦時中であるぞ！」

先頭の魔人の横に居た歩兵が、声を張り上げた。　半ば、怒鳴っている。

それを聞いて、リベラルは呆れたように、

「もう一度だけ問う。　私の城を知らぬかと、私は言っておろうが」

リベラルは素で彼らに問う。

「貴様の言う城であれば、我が軍により数十年前に撤去された！　道を明けよ、強硬手段に出るぞ」

先頭の魔人が、リベラルにそれを言い放つ。　すると、リベラルは頭を掻くと、

「そうか、貴様らの仕業か。　中々、生意気な事をする」

その手に、大鎌を出現させ、隊列の目の前を一人で封鎖した。　それも、明らかな殺意を発し、無言で「通るな」と言っている。　それにあわせ、彼女の黒い髪は銀白髪へと変化する。　本来、彼女の姿は銀髪、真紅の瞳を持ったこの姿。　そして頭の黒い捻った

角に、漆黒の翼。

「銀髪の魔王など、数えるほどしか居るまい。人間界へ外出していた故、黒髪で人間に化けていたが、それももう必要ない」

リベラルの言葉が、針のように隊列を組んだ兵士たちに突き刺さる。低級魔族はもちろん、それだけで気絶。隊列は乱れ、彼女は呆れたような視線を先頭の魔人へと送る。

「貴様……！ 皆の者、この女を殺せ！ 肩慣らしだ！」

魔人の一声で、崩れた隊列は彼女に対し、襲い掛かる！ 飛び掛ってきた第一号。

オーガらしき姿の巨漢を、リベラルは軽々と蹴り飛ばした。それと同時に、鎌も姿を消す。鎌が消えたのはもちろん、リベラルの意思だ。

「要らないな。その程度の敵に、武器を持つまでも無い」

彼女の姿が、一瞬消える。そして、次の瞬間、ことは起きた。四方八方での青白い炎を伴う爆発に、飛び交う兵士の死体。そして、隊列の先頭を切っていた魔人の腰から剣が抜かれ、

「動くな。武者震いであろうが何であろうが、動けば即首を飛ばす」

その剣を手にしたリベラルが、刃を彼の首に這わせ、命令する。さて、どうした事か。騒ぎは起こしたくなかったのだが……こうなってしまうのは仕方があるまい。そういえば、戦争中といっていたな。

敵がこの町へ攻めてくる事もありえるというわけか……。 ならば、手早く書物を奪還するべきだな。

リベラルはその手に握ったつり儀の刃を、彼の首からゆっくりと離すと、石畳に突き刺し、

「命拾いしたようだな」

それだけ言い放ち、城を目指した。

初恋……love(前書き)

更新遅くてスイマセン、PCの調子が今一よくなかったので直しました

マウスのクリック連打がようやく収まって執筆に漕ぎ着けたところ
です

初恋……love

<ピンポン>

チャイムの音……リベラルは外出中。誰だろう？

学校を早引きしたから、先生がプリント渡しに来た？ いや、先生じゃないな。白銅先生ならやりかねないけれど、そこまで暇じゃないはずだ。

「はい……」

熱が出ているのか、体が熱い。

「よう、優希！ お前が女と色ボケるもんだから、俺が配達係としてプリントを……って、どうした？ 顔赤いぞ？」

玄関に立っていたのは、辻本。そして、その手にはプリントを挟んだファイルが握られていた。

何だろう、凄く嬉しい。前も、こんな事はあった。けれど、そんな時は嫌味言っただけで帰った記憶がある。けれど、今はそんな事をするのが凄く忍びない。

そうだな、せっかく来たんだし。

「上がった。少し休憩してから帰りなよ」

自分の意思で、辻本を家に上げる。前は、死んでもこいつを家に連れ込もうな度とは考えなかった。むしろ、嫌っていた。が、今は何がどうなっているのやら。頭がボーっとして、辻本がとても格好良く見える。

「飲み物は何がいい？　暑いし、麦茶？　それとも、……」

何だっけ？　言葉が詰まって、出てこない。

ああ、そうだ。

「コーヒーとか紅茶の方がいい？」

「どうした、妙にやさしいな。　んじゃあ、麦茶で。　顔も赤いし、熱でもあるんじゃないか？　無理するなよ……」

「いや、そんな事……無いよ」

手が震える。　何で？　何で、こんな事になってる？

氷を冷凍庫から取り出し、コップに入れるとやかんを持ち上げる。手が震えて、取り落としそう。　何だか、さっきから力が入らない。

そんなとき、ヤカンを、優希のものではない手が握る。　辻本だ。

「無理すんなって、優希。　馬鹿は夏風邪を引くって言うけどよ、馬鹿じゃなくても夏風邪は引くん」

顔が火照るのを感じる。　どうしたんだ、今日は私らしくない！　何で……こういうときに限って辻本は私に優しくする……。　いいところ見せたいから？　馬鹿じゃないの？

頭の中で、優希は散々辻本を罵倒する。

何だろう。　私……恋してるのかな？

「こんな変態に……」

優希の口から、小さくその言葉が漏れる。
それを聞いて、辻本は苦笑いを浮かべた。

初恋……love（後書き）

優希……ついに来た

取り敢えず、その場のテンションで書いた結果、何かなかった

恋愛、したこと無いんで私にはその感情さっぱり理解できませんけど……w

序第37番目の不死侯爵

本格的に、何かがおかしい。

熱が出ているようだが、風邪ではない。それに、どういうわけかあの変態がものすごく格好良く見える。やさしくて、頼りになるとまで感じ始めている。

絶対に、何かがおかしい。

「熱でてるんだったら、優希も何か飲んだ方が良いぞ」

辻本がその言葉を発し、優希を更に混乱させている間に、リベラルは城門を片手で突き破り、城の中へと進入していた。圧倒的な力と、魔力による行進。

「ああ、遅かったじゃないか。リベラル、君の城はもうないよ。何せ、100年以上昔の事だ。新しい魔王がいれば、新しい城だって立つし、移転もする」

先客が、玉座に腰かけ冠を被った骸骨を撫でている。長い金髪を束ね、深い青の瞳でリベラルを見据え、骸骨を手に持ったその少女の姿は、正に異様というに相応しかった。

「私のことを忘れたのか？ ヒドイな」

リベラルの反応を見て、彼女は玉座から立ち上がる。

立ち上がると共に、玉座の後ろにあった本棚から本が全て飛び出すと彼女を軸に衛星のように飛び回る。

「君の用件は分かっている。馬宮優希にかけた呪いが誤作動を

起こしている……の、はずだ。 そうだな、私自ら出向いても良いが、この城を管理する奴が居なくなるのも困る。 人間界へ行くには次元の境をまたぐし、ヴァムを置いてくことも無理だ。 つまりは、自分でどうにかするしかない」

彼女を軸に飛んでいた本の一冊が、リベラルの元へと飛んでくる。

「変身術を反転術で簡易化する儀式が載っている。 それで一度呪いを反転させ、意識を正常に戻せる」

彼女はそれだけ述べると、再び玉座に腰掛ける。 それと共に、周囲を飛び回っていた書物は自分からあった場所へと戻って見せた。

「お前、誰だ……？」

礼の前、リベラルの口からその言葉が漏れる。 見た事がなければ、会った覚えももちろんない。

その問いに、彼女は苦笑いを浮かべ、

「アリソン・F・セイファート。 ……じゃ、分からないだろうから悪魔とかそっちの方に分かりやすく言ってあげよう。 ソロモン72柱の悪魔。 序列第37。 20の悪霊軍を指揮する不死侯爵。 つまり、フェネクスだ」

帰還しました

「つまりは、不死鳥だ……ということか？」

リベラルの言葉に、彼女は首を静かに横に振る。

そして、手に持っていた骸骨を床に置き、

「私は元々人間だ。不死鳥と契約したら、この様だよ。きみとは、そうだな。私が人間の頃に会っているはずだけど、覚えていないらしいな」

アリソンは更に、本棚の書物の中から黒い表紙に白い梟フクロウの描かれた絵本を取り出すと、直接リベラルに手渡した。そして……

「兎じゃなくて悪いね、私は心臓を別のところに隠す必要は無かったんだ。何しろ、心臓そのものが無ければ……愛する人も、友人も居ない。美しい化け物というには遠すぎる、血に塗れたおぞましき化け物は寂しく孤独な永遠を過ごす。困ったらまた来るといい、君の城は私が元に戻しておく」

彼女はそれだけを言い終わると、その場の空間に溶ける様にして消え去った。

それと同時、

『帰りは私が送ってあげよう、転送魔術を使った所為でしばらく時間が経たないと転送魔術は使えないだろう？』

その言葉とともに、リベラルは気がつくやうに優希の家の、玄関に立っていた。

両手にその本を抱え、ぼやけた視界が正常に戻るまで。

「何事だ？」

そして、ようやくリベラルはこの重大さに気がついた。

辻本が家に上がりこみ、優希が誘惑(?)している。すくなくとも、彼女にはそう見えたらしい。

リベラルに気付いていない辻本に、リベラルは塩を抱え、後ろから音も無く歩み寄る。

そして……「ザァ」っと、塩を辻本の頭上からお見舞いする。

「な…な、何だ！？」

「何だ、は、私の台詞だ。貴様一体ここで何をしている、この変態が」

リベラルの棘しかないような言葉に、辻本は動じる様子も無く、

「何って、今しがた優希に誘惑されていたところだ。優希を見れば分かると思う」

真顔でリベラルに言い返す。

そして、辻本が指を刺した先では、半裸の優希がソファーに寝転がり、顔を赤くして息を荒げている。一見すれば、誘惑しているように見ようとすれば見えるかもしれないが、リベラルからすればこの上なく芳しくない状態。

早く、早く術式を展開しなければ……。何が起こるかなど、予想もつかない！

「おい、変態。手伝え、優希の体は危険な状態にある」

リベラルが本を開き、ページをめくると、止まった。

そして、そのページから青白い光によって形成された魔方陣が展開される。その中心に、辻本が優希を運び入れる。

「中々手際が良いな、説明した覚えは無いが……」

「説明されなくても大体は分かる。が、次は分からん。指示は頼む」

再構築

「陣の中心に寝かせた後、水と土を同質量。土の種類は指定しない、急げ！」

リベラルの指令に、辻本の行動。

リベラルが嫌っている割には、辻本とリベラルは息がぴったりで驚くところがあった。彼女も、まさかあの変態が自分の指示についてこれるなどと考えていなかったに違いない。

彼の手際のよさに、目を見開き、次々と指令を出す。陣の構築開始から10分しないうちに、陣は完成し、後は魔術を発動するだけ。

優希の前に、リベラルが立つ。両腕を広げ、その掌はうつすらと青白い光を発している。

「さて、始めるぞ……！」

その光を放つ両手を、優希の胸に押し当てた。すると、手から光の尾が伸び、魔法陣の構築式に書き足すように、光は本から出現した陣の上を這い回ると、無数の円を書き上げ、ひととき強い光を放つ。

「詠唱とかないのか？」

「この手の魔術には、詠唱は必要ない。本来、詠唱は陣を使わぬ魔術に行うものだ」

辻本の問いに、リベラルは答えると同時。彼女は全身から汗が噴出すのを感じ、次の瞬間。床に膝を突くと、息を切らし汗を拭

う。

妙だ、魔術によって体力は消費しないはず……。

まさか、肉体の基盤を作り変える魔術か？　だとすれば、この異常な体力の消費もうなずける。　優希の肉体の変換に使用するエネルギーが足りず、私からエネルギーを吸い取っているのか！　だとすれば、私の体力では足りぬな……。

「おい、私の上着のポケットから、紅い石で出来た指輪を取ってくれ」

リベラルの指示に対し、辻本はまるでそのポケットの中をすでにあさった事があるかのように探り、透き通った色の、真紅の意思で作られた指輪を取り出した。

それを確認し、

「それを優希の指に付けろ、後付のバッテリーだ」

指示に従い、辻本は優希の指に指輪をはめた。

それと同時に、リベラルの肉体は急激な体力の低下が止まった事を感知したらしい。　意気が上がったがその呼吸は平常時とほぼ同等に戻り、体から噴出していた汗は引いていく。

「さて、時間が掛かるぞ。　辻本……と、言ったな。　外の様子を見て来い、運が悪ければ戸を開いたとたん魔物の餌だ」

その言葉に、

「ヒデエな。　ま、いいさ。　了解した」

玄関へと向かい、躊躇なくドアノブをひねる。　外はもう夜、満

月が、地面を照らす。

何だ、何も居ない。

そんな事を思った矢先、彼めがけて、その『異様』が襲い掛かった。

首のない、巨大な四肢を持つ『何か』が、彼の目の前を吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる！

「見掛け倒しだな。さすがに、弱いがゆえに地獄を逃れたモンスター……。弱すぎて相手にもならん」

その巨体を吹き飛ばした主だろう。巨大な宝石のちりばめられた剣を片手に、その人影は怪物に歩み寄る。

辻本 恭弥

「誰だよ……お前」

彼の口から、その言葉が漏れる。日が沈み、夜も更けた時間。目の前の異様に対し、真っ先に出了言葉。それが、これだった。それを聞いて、剣を片手に握った人影は辻本に歩み寄る。思わずそれに構えるが、

「構えるな、貴様に用はない。今夜は嫌に魔物が多くてな、困っているところだ。　どうやら、魔王が魔術を行使しているらしい」

その言葉の途中、別の魔物が、ゆつくりと、音も無く。

辻本の真後ろ。家の屋根を、壁を這い、近づく。それを視界に捉えての行動だろう。剣を握った人影は、剣を大きく振りかぶると魔物めがけて投げつける！『ドズン』という重々しい音と共に、そのトカゲにも似た巨大ヤモリとでも言うべきだろう魔物は霧散し、姿を消す。

「すまないな、驚かせちゃって。　この辺で、ケルプを見なかったか？」

ケルプ……？　　智天使の事か。
そんなモン、

「いや、俺が逆に見てみたいくらいだ。　見てない、他を当たってくれ」

「ああ、私はそいつと戦ったぞ？」

二人の会話に、女の声が割ってはいる。明らかにその声の主は、その男を知っているような口調……。

長い黒髪を束ね、闇の中からこちらを眺める真紅の瞳……。

「久しぶりだな、パラディン。相変わらず、地上で魔物退治か？」

声の主は、ルシフェル。

「ああ、おかげさんで。魔物の数が増えて困ってたところだ、どこかの魔王が魔術を行使してるらしくて……その魔力に惹かれて……」

「魔物が集まってくる」

言葉を言い終わらぬ内に、男はその本性を露にする。

家の外壁に突き刺さった剣を手元に戻すと、躊躇無く。そして、正確かつ迅速に彼女の喉元を狙い一太刀。だが、それは金属音によって阻まれる。

闇の中から、黒塗りの大鎌が。それも、刃と峰で裂け、無数の牙とだらしなく垂らした舌を覗かせたそれは、鎌というより魔物に近い形だった。

「血の気が多いようだな、聖騎士団を統べる隊長とは思えぬ性格だ」

「そうだぜえ、俺の力は……俺の意識を代償に……」

言葉が、途中で詰まる。そして、無表情。

男は、その手に持った剣を構え、ルシフェルとの間合いを詰める。

そして、ルシフェルのカウンターを避け切り、彼女の首筋に一太刀。鮮血が噴出し、彼女の頭が空を舞う。

夜明けと共に姿を消す

空が白んできた。この二人は、真夜中から動き通し、戦い続けている。

実力は、ほぼ互角。ただ、パラディンと呼ばれた勇者染みた姿の男の方が、やはり体力は上らしい。動きが徐々に衰えていくルシフェルに、追撃をかけるかの如く、その残った体力をすべてつぎ込み、時間が無いのか。ラストスパート、全力で攻撃を仕掛ける！剣の一太刀の重みは、異様なまでに強力だった。一振り一振り、衝撃波が生み出され、『バンッ』という空気が物にぶつかる音が鳴り響いている。

「体力が落ちてきたじゃねえか、ルシフェル！こりゃ、またとねえチャンスだな！」

「さて、何のことやら。私の体力は落ちようとも……」

鎌を持った女……ルシフェルはパラディンにその掌を向けると、

「魔力の総量は……私のほうが上だ」

その掌から爆風を巻き起こす！パラディンの体が軽々と吹き飛び、コンクリートの地面になクレーターを刻む。だが、彼は大して堪えていないらしく、首を鳴らすと平然と立ち上がってみせる。

……人間じゃない。

それと共に、日の出。

パラディンのその顔は、恐怖に歪んでいた。

何故？ 押している側が……。日の出が、何か関係あるのか？
その予想は、当たっていた。

「やめろ！」

男が、叫ぶ。それと同時に、男の体から白い煙が噴出し、その姿を消した。

「……逃がしたか」

ルシフェルは残念そうに鎌を空間に同化させる様にして消し去ると、辻本を玄関から押し退けて家の中へと踏み入った。

居間では、リベラルが術式を展開している。……まずい！

「誰が家に無断侵入を許した？ 俺は見張り中だ」

「ならば殺されたいか？ 実力の違いが分からぬほど、人間も愚かではあるまい」

「見張りご苦労、そいつを通せ」

居間から、リベラルの声。辻本は、嫌々ながらルシフェルを通す。

「どうした、表は騒がしかったようだが？」

「セフィロトのパラディンだ、空間を越えて追って来たらしい」

ルシフェルのその言葉に、リベラルは呆れたようにため息をつく。そして、

「そうか、すまなかったな。 そいつは……どうした。 殺した

か？」

「いや、逃げられた」

「そうか、ならばよろしい。疲れを癒せ、この様子だと……今晩も襲ってくるぞ」

二人の会話は、今一意味が分からない。パラデイン、セフィロト、魔王、空間を越える。

そんなワードから連想するとなれば、材料がまだ足りない。

「辻本……帰ってよろしい。これ以上ここに居れば、貴様が優希を襲いかねないからな」

「おいおい、俺は野獣の扱いかよ」

夜明けと共に姿を消す（後書き）

何だろう、バトル方向に転向しすぎて元々そうだけど面白くなくなってきているような気がする

もう少し、バトル系統引いていってみるべきか……どうするべきか

不死鳥と付き人と

「ねえ、ヴァン。 久々に地獄に立ち寄ってみたんだけど……中々懐かしい顔を見る事ができたよ」

「懐かしい顔……と言うと？ 初代サタンか、クロアか……オウイスかですね。 どなたでしたか？」

穏やかな海。 波が少なく、心地よい風が頬を伝う。

彼女の居る場所は、帆船の甲板。 それも、その帆船は海賊旗を掲げている。 海賊船というには美しい、真紅の帆に風を受け、何処へ向かうわけでもなく、海上を漂っていた。

床にその長い金髪を散らしながら寝転がり、蒼い瞳で直ぐ後ろに居る紫がかった髪 of 青年の方を向く。

「サタンやオウイスじゃないよ、リベラルだ。 まだ生きてたんだね、彼女」

甲板に寝転んでいる彼女は、上機嫌で彼に答える。
彼はそれを聞くと、楽しそうに微笑し、

「そうですね、僕が……まだ龍だった頃の魔王ですか。 懐かしい……」

ヴァンは、甲板に座り込んだ。

「僕も、彼女に会っておきたい。 近々ヴァレホルの兵士達の収容人数が限度に達するらしく、ヴァルキリア達は浮き足立っている。 神の兵士が、揃うと。 僕は、最終決戦ラグナロクの、悪魔側の存在。 リ

ベラル……彼女もまた、悪魔であり、僕たちの仲間。それ以外にも一つ、伝えておくべき事がある。ジブリール……ガブリエルが近々地上の悪魔を掃討すると宣言したらしいのですよ。同等の力を持ったベリアル達……大罪達が地獄に居る状態での掃討は悪魔サイドにとつては致命的……。僕としても、協力を募ってみたのですが、バルベロとアモンの大爺様しか手伝ってくれそうに無くて、戦力と言えば、こちらが圧倒的に不利。どうします？ アリソン、貴女も戦争に参加すると表明していますが、それは烏かごに貴女を閉じ込めていた飼い主である神と敵対するとハッキリと表明した事と同義。僕としては、貴女に無理はしてほしくない」

アリソンが、ヴァンの言葉に耳を傾けながら髪の毛の束をあさり、中から小さなモルモットにも似た尻尾の長い紅色の体毛の子龍を取り出すと、

「ミゲル、同じ龍同士、ヴァンと協力してガブリエルの悪魔狩りを全力阻止する任務を言い与える。これは、理の支配者ことわりからの絶対命令であり、貴様に拒否権は存在しない。分かった？」

「キュウツ！」

彼女のその理不尽な命令に、そのミゲルと呼ばれた龍はものすごい勢いで首を縦に振った。これは恐らく、YESと取っていいのだろう。

それを確認し、彼女が指を振ると、船内から一枚の紙切れが彼女の掌めがけて空を裂いて飛んでくる。

それを手に取ると、ヴァンに投げ渡した。

「それは私を召還する術式だから、死にそうになったらいつでも召還してよ。と言うより、私が理の支配者だから、代償で死にそ

うにならないと召還できないようになってる。大天使クラスであれば三人纏めて相手できるから。いくら法則無視ができると言っても、召還術で召還する相手にとっては出来ないからね。ミゲルは、これを持って行くといい。賢者の石で作られた指輪だよ。魔力の増幅が出来る永久機関……每秒二億八千万 MA^{マジックアンペア}って言う使用制限は設けるけどね」

彼女はその言葉と共に、ミゲルの長い尾に透き通った真紅の石で出来た指輪を通す。

「さあ、行って来るといい。早くしなければ、手遅れになるかもしれない。既にセフィロトのパラディンが彼女達と接触している。これ以上時間を喰うのは危険だし、がんばって。下級天使達はパイモンや私の軍で散らせばいい。元は人間の悪霊たち。天界から追放されたのが全体の1／3でも大体、全部あわせて下級天使総数の三億人と同じくらいが控えているからね」

黒い訪問者（前書き）

何だか、最近自分の小説は一区切りが短くなって思いました
時間無くて、打ち込むのが遅いと言うのもあるのですが

黒い訪問者

「あれがセフィロトの聖騎士だと言っていたな、何か知っているのか？」
パラディン

リベラルが、「今更だが」という前置きの後、確かに今更聞くような内容ではない質問をルシフェルに投げかける。その横で、まるで眠り姫のように優希は寝息を立てている。

魔術行使後の、体力の低下は半端ではなかったらしい。だが、次期に指輪の効力で体力が回復し、目を覚ますだろう。魔術の術式に、ミスは無かった。

「そうか、貴様は知らぬのだな。セフィロトというのは、世界樹のことだと言うのは知っておろう。その根元にある死者の国……その生前騎士だった者の一人だ。それも、一平卒であの力……私の知っている限りでは、あれがまだ二万は居る。それも全て、天使や神の手先としてだ」

「その通りです、ミス・ルシフェル。近々、そこにあるヴァレホル……戦死者の館が埋まると情報がありましてね。今伝えに来たのですが、どうやら貴女がリベラル殿に全て説明したところのようだ」

リベラルの真後ろから。丁寧な口調で、気配の無い言葉が落ちてくる。

気付かなかった。魔力も感じなければ、気配すらない。気配が無いという事は、こいつ……生き物ではない？

急いで後ろを振り返ったリベラルに、青年は微笑んだまま、

「アモン大爺様は、この最終決戦ラグナロクに参加されるとの意思表示がありました。おそらく、聖騎士程度パラディンであれば、問題なく狩れるでしょう。そうですね、リベラル殿の魔力の値は異常値……アリソン……フェネクスより、これを預かってまいりました」

彼は、上着のポケットを漁ると黒い石の散りばめられた銀のペンダントを取り出し、彼女に手渡す。

「少し話し過ぎではないか？ 不死鳥の付き人、ヴァン・ノクターン。貴様はどうする？ 戦争に参加するか、否か。もちろんの事、私もその最終決戦ラグナロクとやらには参加する」

彼はその言葉に対し、

「もちろん、参加しますよ。主が戦うのです、付き人の僕が戦わずしてどうしますか？ 彼女には、数え切れないほどの恩がある」

リベラルはため息を吐いた。

恐らく、私もそれに参加する事になっているだろう。テンションが下がる。

「私も参加する事意なっているのか？ まあ、この流れだと参加しない方が不謹慎というものだが……」

「いいえ、自己判断で参加しない悪魔も存在しますから。参加すると言う意思表示が無ければ、不参加で良いそうです。初代サタンが言っていた言葉、そのままですが」

赤い訪問者

ヴァンがリベラルの元へ向かって一分と経たず、それは彼女の視界の端に現れた。空高くから、赤い何かが飛んでくるのだ。それも、ものすごい速さで。

隕石にしては、早過ぎる。火を放っているあたり、隕石の様だが明らかにそれ自体が動いている。

視認してから約一秒後、

「乗組員に告ぐ、支給本船を脱出し、陸へ逃げろ！」

声を張り上げ、船の中に叫ぶ。反応なし。だが、彼女には船内の様子が分かるように出来ているのだろう。小さく微笑むと、甲板で寝転がっていた彼女は体を起こし、腕を広げるとその途端、炎が上がる。炎が収まるとそこには、体長5メートルはあろうかと言う巨大な真紅の炎を放つ翼を持った、不死鳥が居た。

それが、ひとたび羽ばたくと、爆風を巻き起こし、船を揺らしながら甲板から飛び立った。

一直線に飛んでくるそれと、その姿は酷似している。つまりは神サイドの不死鳥。つまり、フェニックス。

……まがい物が。

その巨体が、接近すると同時、突如フェネクスが加速する。加速し、体当たりでもするのかと思えばアクロバット飛行でフェニックスと背をあわせ、宙返りして後ろについた。そして、そこから再び加速すると、フェニックスの翼を足でつかみ、急降下。

凄まじい勢いで海に叩き付けると、水飛沫と共にフェニックスは姿を消した。

非常に、芳しくない状況……。奴は死なない、痛めつけて動けない程度に留めておかなければ、殺せばまた肉体を焼いて再生する

……！

加減が……難しいな。

フェネクスは人間の姿に戻ると、海の上に着地し、海にもぐったであろうフェニックスの再出現を待つ。

フェニックスの魔力は、フェネクスとは違って思いのほか少ない。生命力が凄いだけだ。だとすれば、奴は魔力ではなく力で動いている。つまり、魔力による攻撃に弱い。

所詮私の模造品。オリジナルの敵ではない。

しばらくすると、水飛沫をあげ、フェニックスは海中からその姿を現した。だが、彼女は再び変身する気配が無い。

……諦めたか？ いや、それは無い！

フェニックスは、空高く飛び上がると、急降下し、彼女めがけて落ちる。

空を裂く音と、凄まじい速さ。だが、

「君レベルは敵じゃないんだ、悪いね」

フェニックスの背から、その声が。見てみれば、彼女がそこに大砲を担いで乗っているではないか。

そして、その大砲からは紐が伸び、その先は輪になっている。

だからどうした？ 大砲を括り付けて海に沈めるつもりだろうが、大砲の一門や二門、大した重さではない！ 今海に突っ込めば、確実にその人間の体は衝突で壊れなくとも水圧で弾け飛び、砕け散る！ フェニックスが、そう高をくくっていたときだった。明らかに、背の重量が増えている。そして、両翼に異常なまでの重み。

目をやると、無数の大砲が縛り付けられている。こんなもの、溶かせばいい。

翼の炎が、勢いを増す。だが、一向に大砲は溶ける気配を見せ

ない。

「君の炎の温度では、これは溶かせないよ。私の炎の方が、2、3000度温度が高くてね。海賊船として船の見てくれよくするためだけど、この大砲は特別製なんだ。言ったはずだけど？ 敵じゃないって。君は死なないんだ、だったら、永久に動けなくすれば私の勝ち。君の再生能力は確かに大したものだよ。けれど、許容を超える重量の鉄の塊を括り付けられ、海に沈められれば後は沈んでいる以外の選択肢は無いだろう？ いくら死のうと、海のそこ。肉体を燃やすには不適な場所だ。炎で焼く事でよみがえるその肉体に、炎が供給されなければ君は永遠にそこで倒れているままだ。君の敗因は、相手が私だった事だ。イミテーションがオリジナルを超えられるわけ無いだろう？」

赤い訪問者（後書き）

本当はガブリエルだそうかと思ったけれど、さすがにここで出さなきゃいけないよな

なんて思っただけで急遽フェニックスに

案内、フェニックスとフェネクスは別物で、フェネクスのほうが先だったりします

同一視されがちですけど、この二羽は別物です

目が覚めた

ヴァンが帰ると同時、

「ひゃああ！ マシユマロのお化けが襲い掛かってきたあああ！」

意味不明な語句の絶叫と共に、優希が目を覚ます。

その瞳に、異変は無い。魔術は大体、相手を照準する眼球が要。ロックオン術式の間、リベラルが行っていたのは、優希の事を凝視し、魔術を展開し続けることだけだった。

万が一、優希の眼球に術式の紋様が浮かび上がっていた場合は、術式の展開を失敗した事を意味する。つまりは、術式に使われた紋様は危険サインであり、さしたる意味は無い。

魔術は系統別にサインとなる紋様が分かれているが、それは単に術式の開発者の紋様であるだけで、何の効力も無い。

大あくびをしながら、

「さっさと学校へ行ったらどうだ？ 今ならあのやかましい変態も、寝ていることだろう。昨夜、散々私用につき合わせてやったからな」

さも当たり前のようにリベラルは言い放った。

それを聞いて、優希は喜ぶべきか心配すべきかを迷ったが、その考えは別のにかき消される。

「そういえば」

優希が周囲を見回し、

「何で、俺はリビングで寝てるんだ？」

一番大きな疑問。　そう、つまりは何故ここに居るのかと言う事。

「ああ、それは覚えていなくて当然だ。　昨日、貴様は生死の境を彷徨ったのだ。　記憶があればある方がおかしい。　さて、急いで学校へ行くといい。　学校とやらにも、門限があるのだろうか？　遅れたらどうする」

リベラルは壁掛け時計を指差し、言い放つ。

時計の時針が8時をさしている。　学校までの電車は、これの20分後……。　マズイ！

「ああ、飯適当に食っておいてくれよ！　レンジの中にチャーハンあるから！」

テーブルの上においてあった果物の中から林檎を手にとると、優希はそれを口に咥え、玄関を駆け抜け、家を出た。

「やれやれ、思っていた以上に騒がしい奴だったらしいな。　さて、私は天使対策を練らねば……」

忘れ物その2

何だか、学校へ行くのが久しぶりな気がするのは何故だろう？

昨日、早退した所為か、長い休みの後に学校に来たような錯覚にとらわれているのだろう。

そんな考えで、下駄箱のラブレターをゴミ箱に投げ入れ、階段を上る。その途中、

「だーれだ？ ヒントは、昨うゝっ！」

辻本の腹に肘打ちを一撃叩き込み、階段から転げ落ちた事を確認して教室へ行くと席に着いた。

10分後、今にも寿命で魂の抜けそうな爺さん先生が、HRを始めた。それと共に、教室の扉が開き、辻本が入ってくる。

爺さん先生は、それに気付かず、HRを終了させる。そして…
…予想外だった。

「今日、二時間目の体育は水泳だ、もちろん水着は持ってきただろうな！」

教室の戸を、半ば蹴破り白銅先生が侵入する。それに対し、教室の視線は優希に集まった。

そう、夏のイベント。いつもなら楽しみのはずの、水泳の授業である。楽しみとは言えど、確かに優希の事を奇妙な目で見る女に飢えた生徒も居るわけだが。

そんな奇行に走った生徒は、監視の先生につまみ出され、授業中ずっと腕立て伏せをやらされるのだ。

「先生……」

「何だ、優希」

いや、せめて馬宮って呼んで。

優希が手を挙げ、

「俺、女子用の水着持っていないんですけど」

核心を突く。それに対し、『信じられない』とでも言うような表情で、白銅葵は馬宮優希を注視した。その視線は、徐々にしたへ下がっていき、

「わかった、スリーサイズも分かった。後は私に任せろ」

教室をあわただしく後にした。

そして、一時間目が終わった直後。チャイムが鳴ると同時、礼
と言い終わった丁度そのとき。

「馬宮優希は居るか!？」

白銅先生が、教室に侵入した。それも、ビキニを持って……。それに対し、優希はとっさの防衛本能に従い、机の下に隠れるが、先生のその並外れた観察眼によって易々と見つけ出され、後ろ襟首をつかまれると教室から引きずり出される。

「ハッハッハ！」

笑ってんじゃねえよ。

「さて。堪忍しろ、優希！ 貴様にはこのビキニがお似合いだ

アッ！
」

「勘弁してくれ！」

「断る！」

「それを断る！」

そのやり取りがしばらく続いた後、

「そうか、分かった。スク水で勘弁してやる」

白銅先生に、優希は念願の初勝利を納めた。

忘れ物その2（後書き）

夏だし、夏休み前に本当は書きたかったプールネタ

こういう学校に限って

こういう学校に限って。男子校に限って、プールと言うものは相当深かったりする。

そりゃ、女子がいない。そして、大体は背も高い。すなわち、若干数名の泳ぎの苦手な集団を除けば、大部分の生徒が深いプールでも大丈夫なのだ。

そして、水泳とは実際のところ、スポーツ目的よりも、いざというとき溺れない様にという目的で授業が考えられている。水泳選手などは、泳ぎに関して習っていて、溺れないようにの域を超えた人間なのだ。

そしてここにも、その水泳選手とでも言うべき変態が居る訳だが……。

「優希！ 次お前の番だぞ！」

そう、稀代の変態……辻本恭弥である。

このまじめそうなイケメンフェイスに騙されてはいけない。顔面詐欺という顔面詐欺だ。実際、ただ物事を何でもこなせる変態。行動力のある、手に負えない馬鹿だからだ。

「ハイハイ、何でお前はそんな元気なんだよ？ 男の裸見て興奮するなって」

「いいや、優希は美しい女性だ。それだけは断言できブツ！」

うっさい。なりたくてこの姿になったわけじゃねえ。

「何度も言うが、俺は男だ。次、女とかほざいたら……コンク

リブロックをテーマの体に括って沈めるからな」

満面の笑みで、優希はその恐ろしい言動を辻本に浴びせるが、辻本はまったく気にしていない。それどころか、

「優希のやる事なら、何でも来い！俺はそのためだけに生まれた男だ！」

今日の一時間目から、ずっとこの調子なのだ。何か悪いものでも食べたのか？

元男にそこまで言うほど惚れるか、この馬鹿は。

「そうか、じゃあこの間曲がっちまった東京タワーのてっぺんから飛び降りて自害しろ」

「自害だけは勘弁してくれ、優希に会えないのは嫌だ」

この……！

手を振り上げ、今にも辻本をぶん殴ろうとしたその時だった。

「馬宮優希！早くしろ、後がつかえてるんだ！」

監視の先生から、呼び出しを喰らった。仕方なく、辻本をぶん殴るのを諦め、スタート地点へ。

「泳ぎ方は自由、25メートルで折り返して、戻って来い。じゃ、スタート」

先生の笛と同時。優希はプールの壁を勢いよく蹴り、スタートする。最初は、クロール。そして、折り返して15メートルほ

ど行った所でだった。

突然、体が水の中に沈んでいく……？ 悪戯？ いや、足を掴ま
れてるわけではない。

魔物？ いや、違う。 原因は、激しい腹痛。

泳いでいられない、プールから出ないと……！

体の自由が利かない。 まずい……。

そこで、意識が途切れた。

こういう学校に限って（後書き）

何が起きたか、多分予想ついてる人居そうだな……

嘘だと言ってくれ

「なんつー……ベタな展開」

目覚めの第一声が、それだとは恐らく誰も思わなかっただろう。溺れて、目が覚めて、気付いたら保健室のベッドの上。そして、股間に違和感を感じつつも、腹痛が治まっていることに安堵する。恐らくは、いや、想像したくない。誰も俺に真実を言うのは止めてくれ。

「あら、目が覚めたの？ 大変だったわね、プールの中で、（略）^{ズキューン}が起きるなんて。私だったら絶対嫌よ」

ハイ、早速裏切られたね。起きて直ぐに（略）^{ズキューン}だったなんて、元男に悲しいこというなよ。もう、戻れないのか……。誰か、嘘だと言ってくれ。

ベッドから上半身を起こし、優希は保健室の先生と顔を合わせる。そういえば、保健室来るの初めてだったっけ。

「何、そんなに私が珍しい？ 一応、この保健室を任されてるんだけど、名前……分かるかしら？」

いいえ、知りません。

恐らく、そんな顔で見ていたのだろう。切れたような表情を浮かべると、

「私は淀川 岬。前に朝礼でも挨拶したと思ったんだけど、忘れちゃった？」

いいえ、ぶっちゃけ知りません。初めて見たよ、ホント。

「スイマセン、何か最近物忘れが激しくって」

その言葉の直後、

「優希いいい！」

勢いよく、保健室の戸が開く。

そこに居たのは、何て予想を裏切らないのだろう？ 絶世の変体、辻本である。

「大丈夫か！ お前がプールで（略）ズキーンなんてことになったから俺まで……」

「黙れ」

やかましい馬鹿のみぞおちに、肘打ちを一撃。それを喰らうと、辻本は一瞬で大人しくなった。

正しくは、伸びているの間違いだが……この際気にしないことにしよう。

「優希くんは、どうしたの？ 最近は、噂の的よ？ 女の子なんだもの。あ、血がついた水着は白銅先生が洗っておくっていったし、大丈夫よ」

あの先生、絶対洗う気無いな。

「噂……ですか？」

「ええ、辻本さんと付き合ってるって」

頭痛がしてきた。止めてほしい、こんな変態と誰が好き好んで付き合うんだよ。

それに、俺は男だ。……この姿じゃレズだけどさ……。

「さ、チャイム鳴るわよ？ 動けるなら、早く教室に戻った方がいいんじゃないかしら？」

校内ラジオ放送

何だかんだと聞かれて答えて、そんなこんなでお昼時。

いつものように、俺は校内放送で曲が流れると思っていたわけだが、

『みなさーん！ お元気ですか？ 私はチヨー元気でーす！』

エコーの掛かった大音量のアニメ声。それも女のはしやぎ声が、校内に木霊する。

赤崎かと思ったが、赤崎は辻本と弁当をつついている。そして、俺にもその疑惑の目が向けられたが、俺でもない周囲は認識。

この声は一体誰だ？ と、周囲は騒ぎ始める。

『えーとですね、今日から昼の放送を任せましたー！ 名前はー……どうしたらいいんでしょう？』

『んじゃ、テキストでいいよ。テキストで』

『テキストで良いんですね？ じゃ、シンデレラという事で。』

この放送室埃だらだし、私が

この放送に出てくるのはお昼12時までだからぴったりなネーミングセンスだね？ ヨシ君！』

『俺の名前を出すな！』

『いいじゃん、減るもんじゃないしい』

ブツンツという音と共に、その奇妙奇天烈な校内放送が途切れる。一体、何事だったのだから。理解に苦しむ面があるのだが、これだけは恐らく。確実に言える。

赤碕みたいな変態と、哀れな犠牲者が居るという事。

そして更に言えば、その変体ぶりは赤碕を軽く越えているという

ところだ。 あいつ以上の変態といえば、辻本しか見たことが無い。
だが、辻本とは異質の変態。 それが、この放送ではしゃいでい
るこの声だ。

男子校で、こんな声が出るのは今は俺と赤碕の二人のみ。 つま
り、ありえないのだ。 彼女の存在が、ありえない状況下でありえ
ている。

……まさか。

ええ、そのまさかです。

優希は席を立つと、放送室に向かって廊下を駆け抜け、放送室の
戸に張り付いた。

中からなにやら、話し声が聞こえる。 それも、さっき放送で流
れていた声。 男と、女。

「だから、お前が悪魔だったのは分かったけどよ！ 男子校だぞ
？ 無茶言うな！」

「無茶じゃないもーんだ！ そうだねエ、ヨシ君男の子だし、こ
こは買収する方向で！」

「フミヤー！ 胸を顔に押し付けるな！ こら、止めろ！」

中はどうも、ピンク色らしい。

入るには入れない、何だか気まずいこの空気。

勇気を振り絞り、その戸に手をかける。 そして……

「誰ですかー？」

無知を装い、平然と戸を開ける。 だが、そこに声の主の姿はな
かった。

窓が開け放たれ、カーテンが風に揺れている。

カップ麺のカップに残ったスープはまだ温かく、カップの内側を伝っていた。　どうも、ついさっき。

それこと、今とを空けるこの瞬間までここに誰か居たような。

それくらい、前。　どうも、怪しい。

窓から飛び降りたか？　いや、ここは三階。　窓から飛び降りるなど人間には無理だ。　だとすれば、どうやって？

棚の後ろへ隠れた？　いや、壁に接するように棚は配置されている。　隠れることは無理……。　と成ると、最後。　最も合理的で最もありえない展開。

「ボクと同じ人が……この学校に居る？」

そうだ。　悪魔とか何とか聞こえてきたっけ？　だとすれば、恐らくこの考えは間違っていない（ハズ）。

メリー・ヴェルディ

「そうか、悪魔……か。なるほど、分かった」

放課後。家に帰るとすぐさま、優希はリベラルにその話を持ちかけ、真相を確かめようとする。

だが、リベラルは特に気にする事は無いと言うように、

「恐らくは、別の悪魔が貴様の学校に入り込んでいるのだろう。だが、問題は無い。その手の悪魔は、冥界の生存競争に敗れたか、地獄より追放されたか。はたまた、人間界こうちで生まれたか。よくある話だ」

リベラルは携帯ゲーム機で、赤い帽子の髭おじさんを操っている。栗のような形のモンスターを気に留めることなく踏み潰し、ステージを駆け抜けゴールを目指しながら、優希の話に耳を傾けている状態だ。

ゲームに夢中で、話を聞いてないのか？

「お前な、俺は常に狙われてるんだろ？ お前の魔力のせいだ」

「問題あるまい、優希も下級魔術程度であれば扱えるだろう？ 魔術と言うのは、練りこんだ魔力によって威力が変わる。完全にコントロールできていない貴様の下級魔術ともなれば、魔力をつぎ込みすぎている事は目にしなくとも分かりきった事だ」

何だろう、凄く馬鹿にされた気分。

だが、今聞きたいのはそんな事ではない。

「で、本題に戻るけど。学校に居た悪魔って奴は、何がしたくてそこに居るんだ？ 何か目的があって、そこに居るんだろ？」

理由も無く、人間に紛れる必要など無いだろう。つまりそこには、悪魔ならでわの理由があるはずだ。少なくとも、ここに居る魔王^{リベラル}は、俺を妃にするというのが最終目的らしいし。

理由も無く、そこに居るはずがない。

「先ほど述べたとおりだ。人間界生まれの悪魔は、大部分が自分が悪魔であるなどと言う事を知らぬ場合が多い。つまり、これは可能性としては薄い。次に、冥界の生存競争に敗れたのであれば、大した魔力を持っていない。つまり、弱いと言う事だ。最後に、魔界より追放された悪魔は、性格によってこの刑が執行される。つまり、人間を見下し、人間界^{こうち}をゴミタメ同様にしか思っていない悪魔だ。つまり、学校に入り込むなどと言うような事は、しない。分かっただろう？ 大して、気に留める必要は無い」

ステージクリアのBGMと同時、リベラルはゲーム機の電源を切って違うソフトを差し込んだ。

そして、即起動。

「そこまで気になるのであれば、私自ら学校へ出向き、確かめてやらぬ事もない。が、優希。貴様はそれを嫌がるだろう？ ゆえに、私はどうすることもできん」

起動したゲームの画面を向きながら。リベラルは淡々と言葉を続ける。

目線は画面へ向き、顔つきのカラーボールを四つ繋げて消したところだ。

「取り敢えず、私に言わせれば貴様の友人に相談するのがいいだろう。辻本とか言った。アレは中々、頼りになる……」

リベラルは途中で言葉を止め、ゲームの画面へと向いた。そこでは丁度、カラーボールによる連鎖が画面に振ってくるモードで遊んでいるらしく、通常組上げるのであれば難しい数の連鎖を連発し始めた。

それが終わると同時、リベラルはまた口を開く。

「ま、頼りにはなったところで仲良くできそうには無かったが……」

「そうか」

何だろう、上手く誤魔化された気がする。

優希が部屋を出ると、ゲーム機の電源を落としリベラルは再び口を開いた。

「メリー・ヴェルディか？ ……まさか……な」

メリー・ヴェルディ（後書き）

何だか、久しぶりの更新のような気がします

両性愛

メリーが来ているのであれば、これは由々しき事態だ。

リベラルは家の屋根の上で頭を抱える。

リベラルは、メリーと何度か会って面識もある。そして、最後に会って直ぐに人間界へメリーが跳躍魔術を完成させて飛んだということも聞いた。

基本的に、魔界から人間界間の跳躍魔術は文献が残されていない。魔界に居るものがそれを完成させると、実験で人間界へ飛んで結果。

魔界以上に穏やかな環境に馴染み、魔界へ戻ることを嫌がるからだ。

そして、魔術の文献が魔界へと送られることなくその悪魔は人間界で一生を送る。と、言う算段だ。

メリーは、高名な魔法呪術者である反面。今リベラルを悩ませている要因を抱えている。

そう、彼女は両性愛者なのだ。可愛ければ、特に男女を気にする事もない。

この上ない、リベラルにとっての危険人物であり、優希を拉致する可能性の高い人物でもある。

そして、最も危惧すべき点。それは、メリーの魔術だ。

「夢羊の鈴は危険だな……」
メリーコール

そう、彼女の固有呪術。夢羊の鈴は、メリーコール彼女の命令を耳にした人物を、思いのままに。彼女の後を追うように夢現状態。それこそ、白昼夢を見ている。

寝ぼけたような状態で、彼女の命令を聞く。一種の、催眠状態に陥らせるのだ。

それのおかげで、人目を気にせず堂々と。人間を拉致できたりするわけだ。

優希にはああ言ったが、ここは早い内にその真意を確かめるべきだろう。

リベラルは再び優希の部屋へと跳躍すると、テレビのリモコンを手に取り、ニュースをつけた。

大体、これでメリーは見つかる。

「昨日の昼頃から、今日の朝にかけて数名の同時刻失踪事件が……」

……。

リベラルは呆れたように、テレビの電源を切ると掌に大鎌を吸い込み、ズボンのベルトを巻いた。

マントを壁のフックに掛けると帽子を手に取り頭に被る。

「……メリーだな」

その一言と同時。リベラルは玄関でブーツを履くと、外へ出た。

この近辺で、同時刻に失踪事件があった。こんな事をするのはメリーだけだ。

夢羊の鈴（前書き）

何だか、最近更新が滞ってます
私が飽きっぽいからかな……

夢羊の鈴

リベラルは素早く玄関を飛び出して、市街地の中心へと地面を踏みしめ駆け抜ける。

その速さは、自転車並で。陸上競技の短距離走と同義。全速力で、短期決戦型の速さなのだが、彼女にとってその程度の速さで長距離を駆け抜けることなど造作も無く。

瞬く間に通行人の間を縫って、目の前の車のボンネットを踏み台にすると空を舞う！

最も高いであろう高層ビルの外壁に着地すると、重力を感じていないかのようにそれを更に駆け上がる！

「さーて、メリーは何処だ？」

ものの数秒だった。ビルの屋上に到達すると、更にそこからアンテナを駆け上り、周囲を見渡す。

そして次の瞬間。ビルのアンテナからリベラルの姿が消えた。

と、同時刻。コンマ一秒後。

優に10キロは離れた地点で、彼女の視界にショッキングピンクの癖のある髪の水が映し出される。

手加減という言葉を知らないのか、リベラルの恐ろしく強烈な踵落としが相手の顔面に叩き込まれる。が、それを察知してか。相手はそれを左一つで受け止める！

平然と、顔色一つ変える様子も無く。彼女は平然とその場に立っている。

「何するのよ、リベラル」

「何をしているんだ、メリー」

リベラルは、メリーを。　メリーはリベラルをにらみつけ、互いに険悪な雰囲気です。

明らかに、この二人は中が悪いと初見の人間でも分かる勢いで。2人ともが相手を生理的に受付けないというオーラを放っていた。この2人は、見た限りでは水と油。そして、磁石の同じ極であり、そのくせ映し鏡だ。

「何って、私はただ可愛い子をスカウトしてただけよ！　何、やきもち焼いてんの！」

メリーの言葉に、リベラルの表情が音を立てて固まった。そして、数秒間のフリーズの後、その口をゆっくりと開く。

「貴様が誰と居ようと勝手だが、優希に近寄る可能性が否定しきれん以上！　私は貴様の監視をたった今より開始させてもらおう！」

「何勝手なことやってんのよ！　近寄らないでもらえないかしら？　無い乳！」

メリーの言葉に、リベラルは完全に頭にきたようだ。顔を真っ赤にして、

「五月蠅い、歩くダッチワイフ！　無駄に乳がデカイからといって貴様基準で物事を考えるな、万能有毒物！」

リベラルは、いつもの調子を失った様子で。　メリーに対して怒鳴り返す。

周囲の視線を気にも留めず、大声で。そして、その恥ずかしい会話はとある人物の耳に止まったらしい。

二人の間に、大きな十手が割って入る。

「そこまでしてくれないかな？ 風紀が乱れる」

柚木が、二人を制するも、2人はよきヒートアップするばかりで。

「大体、貴様はその無駄にデカイ乳に脳内回路の9割を取られて
いるんだ。 もう少しその自己主張を止めさせたらどうだ？」

「何ですって？ 賓乳のあんたが何を言ったところで負け惜しみ
ね！」

「いい加減にしろ！」

ようやく、2人は柚木の存在に気付いた様子で、柚木のほうを向
いた。

学ランに、長身のイケメンには、メリーは興味が無いらしい。

そっぽを向くと、どこかへ逃げようと試みるが柚木はその首根っこ
を掴んで引き戻した。

「もう少し、声の度合いを考えたらどうだい？ 今の恥ずかしい
会話が周囲に丸聞こえ。 後になって恥を書くのは構わないが、流
石に公害に匹敵した。 場から、僕が制裁を加えても文句は無いか
い？」

柚木は、一瞬の内に風を纏ったかと思うと小さな女の子に姿を変
えた。

本来の姿で居れば、姿を変えていた分の魔力を肉体に回せる。

つまり、臨戦態勢である。 それを見てか、リベラルはグローブを。
メリーはハンドベルを片手に臨戦態勢へ移行する。

大鎌は目立つ。 それに相手は人間だ、グローブで十分だろう。

実際の所は柚相手にそこまで警戒する必要は無い。 2人掛かりで止めればいいし、一対一でもリベラルとメリーのほうが魔力が多い。

負ける要素は、一切無い。

「君、例の転換男か。 優希が言ってたよ」

彼女の頭の上で、ハムスターともモルモットとも取れる生き物がドーナツの欠片をほおばったまま顔をのぞかせる。
まるで、何かに惹きつけられたかのように。

「いや、ボクは女さ」

Q11. 今度は何事ですか？

「わー！ 中々可愛いね、お持ち帰りコースだね、ストライクだね！」

元に戻った袖を見て、メリーがはしゃぐ。

片手に、その身長に釣りあわない十手を持っているのが、更にギヤップ萌とやららしく、どうやらこの反応から見た限り。 本日の一番の剛速球がメリーのグローブに叩き込まれたようである。

不愉快だと顔で言う袖を、お構いなしにその無駄にデカイ乳で埋め尽くし、もはや暴走していると言っても過言ではないメリーの後頭部に。 リベラルの強烈な右ストレートが叩き込また。

だが、メリーはまるでそこに眼球があって、見えているかのよう。 それを平然と避けて見せた。

流石、魔界屈指の上級魔術師。 腐っても、その称号は伊達ではないらしい。

「何するのよ、私はこの子を持ち帰るのに忙しいの！ 他を当たってくれないから？」

「何をするって言うのは、ボクの台詞だよ。 その無駄にデカイ胸をどけてくれないかい？」

袖は大層ご立腹らしく。 メリーに対する気遣いなど一切なしに、十手でメリーの首を捉えると、それを無理に投げ飛ばした。

何だ、どうもこの女からは“嫌な”魔力を感じる。

「何処で、魔力を手に入れた？ 返答次第では、殺すぞ」

リベラルが、殺気立って柚に問う。　だが、柚はその不服そうな
仏頂面のまま、

「何処でだっていいだろう？　ボクの自由だ、君には一切危害を
加えないさ。　大魔王」

意味有り気。　そして、リベラルの本性を知っているかのように、
柚は静かに言い放つと同時に。　明らかに空気を読もうともしないメ
リーを、その大きな十手の鉤で引っ掛けると一瞬の内に。

いとも軽々と投げ飛ばしてみせる！　が、メリーは空中で壁に足
を掛けるようにその勢いを殺し、地面に着地した。　そして再び、
柚へと迫る。

が、今回はリベラルが。　メリーの首根っこを引っ掴むとそこか
ら引き離れた。

「まあ、今までの会話は忘れてくれて構わない。　今回一つ、聞
いておきたいことがあってな」

リベラルの言葉に、メリーは面倒くさそうに仏頂面を向ける。

「何よ？　忙しいんだから、早く質問して早く離して」

「まあ、難しい事ではない。　何故、貴様がここに居る？」

リベラルの問いに、メリーの表情が少し曇る。　だが、想定外の
質問ではなかったらしい。

直ぐに口を開くと、

「フェネクスの船を、フェニックスが襲った。　から、陸地に逃
げろって。　フェネクスの船長命令が出たのよ。　知らなかったか

もしれないけど、私は何年か前からフェネクスの船にいたの」

その言葉にリベラルは、言葉を失った。

まさか、フェネクスが？ いや、不死鳥だ。死にはしないが、まさか。

「フェネクスが……どうなったかは知っているか？」

「知らないわ。ただ、私に來た伝達は最終決戦^{ラグナロク}を待ってっただけよ」

Q11. 今度は何事ですか？（後書き）

近い内に、挿絵を描いてみようかな……

A11. ラグナロクが近いようです

「もう、最終決戦ラグナロクが始まると言うのか？ 情報は、それに関する情報は他にないのか？」

リベラルの言葉に、メリーは面倒くさそうに説明を続ける。

「うーんとね、確かまだあったのよね。……もう、10日無くて始まるらしいわよ。最終決戦ラグナロク、私も戦うんだ。神って馬鹿よね、自分で人間を導いておいて、逆に暴走させてるんだから」

リベラルは思わず、柚の方を向いた。

柚は、呆れた様子でこちらを見ている。

「知っていたのか？」

「何のことだい？ 最近、この近辺で悪魔を良く見かけるんだ。それが風紀を乱していたからね、粛清させてもらった事も多いかな」

リベラルに対し、柚は十手を向けた。

「覚悟はいいかい？ 乱れの根源……大魔王」

柚が、動く。

ついさっきまで、味方だと思っていた人間が襲い掛かってきて。とっさに動ける者など少ない。

リベラルも。恐らくは……優希たち人間の影響さえなければ平然とそれをかわし、柚を一瞬で屠る程度の事はしただろう。だが、

その平和ボケした思考がコンマ数秒、判断の遅れを招いた。
柚の振り下ろした十手がリベラルの頭部に直撃し、リベラルは前
のめりに倒れこんだ。

「^{ケルプ}智天使程度の力に倒れるとは、地上では中々……大魔王も弱い
んだね」

リベラルの首を、柚の十手の鉤が押さえ込む。

が、リベラルは持ち前の力でそれを振り払うと同時。違和感を
覚えた。

振り払わなくとも、柚が直前で引き剥がれていたかのような、そ
んな感覚。後ろを見れば、それは当たっていたらしい。

メリーの拳が、柚を軽々と吹き飛ばす！

力関係でいけば、リベラルもメリーも、柚以上に強い。魔力一
つ取ろうとも、身のこなしを取ろうとも。柚に勝ち目など無かつ
た。

だが、リベラルが十手を受けた理由。それは、平和ボケともう
一つ、別の所にある。

「メリー、もういい。手を出すな、私の妃の友人だ」

追い討ちを掛けようとするメリーの行く手を、リベラルが阻む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5418t/>

なにがどうなったらこうなった？

2011年11月20日16時56分発行